

アポカリプスの庭で
血涙の天使

ふくふくろう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

殺す事。

奪う事。

それしか知らなかった少年が、父の死をきっかけに生まれた街を出る。

出会った仲間にはセーラー服を着た日本刀の使い手、啞えタバコで軽機関銃を担ぐグラマラス美女、ゴスロリファッションに暗視スコープの狙撃手。

彼女達との旅路で、少年は誰も予想しえなかった方向に成長を遂げる。

他サイトに投稿したものを、ほんの少し手直しして掲載しています。

目次

デイリンケン・パスを越えろ	1
出会い	15
サヨナラ、ミルクレイプ・チェインソウ	29
初体験	42
廃墟へ	55
探し物	67
好きの理由	79
襲撃	90
キラキラ	104
爆発	118
血涙	129
出会い	144
マスター	156
キャンプ地の夜	167
宝物	179
男の子	190
バス	202
鉄の騎兵	214
大聖堂	226
人の性	238
単独行動	249
帰還	260
計画	271
忘れられた時代の街	282

緒戦

覚悟

突入

室内戦

ポイント・ブランク

少年よ、静かに眠れ

その手に掴んだもの

293

305

317

330

344

355

377

デイリンケン・パスを越えろ

ジョン・ハッピーニューイヤー。

それが、僕の名前。

忘れられた時代ではありふれたファーストネームだと街で一番物識りなオババは言つてたけど、同じ名前の人にはまだ出会つた事がない。

そしてファミリーネームのハッピーニューイヤーは、忘れられた時代の呪文の言葉だつたらしい。

しかも、それは人を呪う言葉ではなかつたそうだ。

意味はもうわからなくなつてしまつたが、楽しくて、希望に満ちた言葉だつたらしいとオババは言つてた。

だから僕は、この名前が嫌いではない。

金を出せ、服を脱げ、なんでガキが銃を、殺さないでくれ、死にたくねえ。

そんな言葉は聞き飽きた。

この街で言葉なんてのは欲望のままに要求を告げ、イエスカノーかを聞いて略奪か殺

し合いのどちらかが始まる合図でしかない。

希望に満ちた何か。

そんなものがあるのなら、父さんが死んだこの街に、いつまでもいる必要はないだろう。

毎日、酒と女を買えるだけの金を調達するのが僕の仕事だった。

でも父さんはゆうべ、酒場でミルクレイプ・チェインソウに頭をカチ割られて死んだ。僕は酒を飲まないし、女も買わない。精通はしてるけど、女は臭いから嫌いだ。だからもう、小金を持っている人間が街から出るのを尾けて、物陰から銃で撃つて有り金をいただく必要がない。

僕は、ハツピーニユーイヤーの意味を探しに行こうと思う。

「あはあく、ジヨン。荷物なんかあ背負って、どこ行くの?」

「東」

フラワー姉ちゃんは訊ねたくせに返事を聞いてはいない。僕なんか最初からいなかったとしても言うように、濁った眼で虚空を眺めながらスースーが入った缶をまた啜えた。

スースーは、パンより安い。

パンを食べても次の日にはまたお腹が減ってしまうが、スースーなら巧くやれば2日

はすべてを忘れていられるのだそうだ。

この街で割り当てられた仕事をしてさえいれば、日に一度の水と食事は支給される。僕は気にならないけど、普通はそれだけでは、喉の渇きも空腹もガマン出来はしないらしい。

だから雀の涙の給料でブルースの部下が売る、バカみたいに高い水と食料を買う人も多い。買えないのならそれより安いスースーを吸って、すべてを忘れて次の夜明けを待ただけだ。

「アンおばさんには、いつも優しくしてもらってた。フラワー姉ちゃん、スースーは程々にしなよ？」 元気で」

「アン？ あんあんうつせえクソババア!? ……あんのババアのせいであ、アタシは毎日毎日、舐めたくもねえ汚えケツをさああ！」

安定して会話ができる住人など、この街にはほとんどいない。

貧乏ならスースーを。中流ぐらいなら酒を。金持ちならクスリを四六時中、朝から晩まで食るようにやるくらいしか楽しみがないからだ。

割れたガラスを踏みながら、街の外へと向かう。

ここから東にはなぜか住民が数年で死んでしまう街があり、西にはシー、海とかいう大きな水たまりと、とても大きな街があるらしい。そこには賢者とかいうオババよりも

物識りな人間がいるらしいので、まずはその街でまだ知らない文字を習うつもりだ。

辿り着いたら、だが。

「お、リトル・Bじゃねえか。親父さんは残念だったな」

「その呼び方も、今日で終わり。東で静かに暮らすよ」

「だから、一張羅に大荷物なのか。まあ、子供ならアナグラ暮らしの方がいいのかもなあ」

東は他の地域よりなぜか野生動物が大きかったり、家畜も何本か足が多いのが産まれたりしてくれるので、平和と安寧を求める人間達はそこに穴を掘って集落を作って暮らしている。

なぜか住民が数年で死んでしまう鉄とコンクリートの大きな街にあまり近づかなければ、地面に掘った穴で充分に暮らしてゆけるのだ。

だから見張りの男、チューインガムも、僕が東に向かったと他の連中に言ってくれらさう。

「じゃ、また近いうちに買い物にでも来るよ」

「気をつけてな。リトル・Bが警備や狩りに手を貸してくれるなら、どこの集落も喜んで迎え入れてくれるはずだ。頑張れよ」

「うん」

永遠に、サヨナラだ。

荒野を東へ。

街の入り口から僕の姿が見えなくなっても、すぐに西に向かうのは危険だろう。北に進路を変えながら、僕はシャツで隠した銃のグリップを握って気持ちを落ち着かせた。

銃は貴重品だ。

街のチンピラ程度じゃ僕の銃の事を知らないが、街のソルジャーを束ねる男。ボストと呼ばれるブルースは、僕のリトル・Bというニックネームの名付け親でもある。

どこかで、この銃を奪うために仕掛けてくるはずだ。

「来たか……」

もちろん、まだ街からそんなに離れてはいない。

来たのはブルースでも、その部下のミルクレイプ・チェインソウでもなく、焼け爛れた肌を持つバケモノだ。

灼かれしモノ。

人型であったり動物型であったりするソレは、食欲に突き動かされるだけの何の役にも立たない人類の敵。

襲われたからと苦勞して返り討ちにしても、人型ならたまにかろうじて残っているポケットなんかには何も入っていなければタダ働き。

動物型ともなれば実入りなんて皆無。なにせ肉は腐ってしまったているのだから、食べるはずもない。

「おああ、ああ……」

両手を水平に伸ばして僕に向かってくる灼かれしモノは、丈夫そうなズボンを穿いていた。

こんな個体は極稀にはあるが銃弾なんかをポケットに入れていたりするので、逃げるという選択肢はない。

荷物と一緒に背負っている鉄パイプを抜き、僕は灼かれしモノに歩み寄る。

「えーっと、成仏して下さい。それと、ポケットに良い物が入ってますようにっ！」

フルスイング。

ぐちゃっつ、と嫌な音を立てて、灼かれしモノは崩れ落ちた。

「さーって。何が出るかなー何が出るかなー」

鉄パイプを地べたに置いて腰の後ろのナイフを手に取り、灼かれしモノのズボンを切り裂く。

コロソツ。

そんな感じでて来て来たのは、僕の拳銃には入りそうもない大きな銃弾。

「はあ。ツイてるんだか、ツイてないんだか……」

特徴的なこの銃弾は、両手で保持して撃たなければ怪我をしてしまうくらいのもので、大きな銃の弾だ。オババの家の書物で見た事がある。たしかその銃の名は、シャツガン。

いつか手に入れたなら、忘れられた時代の廃墟を漁るのに役立つだろう。

廃墟には灼かれしモノだけではなく、もつと恐ろしい『新しきモノ』達も闊歩する。奴らは人間のシルエツトすら捨てたバケモノとしか言えない姿で、様々な種類がいるのだ。中には、銃を使う種類もいるらしい。その特徴は、どれもがしぶとく、人肉を好んで食す。

銃が貴重品なのは、銃がある廃墟には必ずと言っていいほど新しきモノが住んでいるからだ。

「……行こう。デイリンケン・パスを越えられれば、もう追っ手は来ない」
独り言を呟いて歩き出す。ここから、進路は西だ。

厚底のブーツで、一歩一歩。

鉄パイプは、杖代わりに使う事にした。

道は、街から離れるほどに悪くなる。とりあえず見えている丘のような小山を越えて、どこからか僕を見ているはずの追っ手から身を隠したい。

これまでの外出経験と噂話を総合すると、水場はデイリンケン・パスを越えないとな
いはずだ。

最近やっとサイズが合うようになった父さんのコンバットスーツの袖で汗を拭い、今はただ先を急ぐ。

日が暮れても歩き続け、ついに岩より鉄の多い景色が目に入った。左手に持つフラッシュ・ライトに照らされているのは、クルマやセンシヤの残骸。

この丘を越えれば、触れただけで死んでしまう柵の外に出られるらしい。

海を見れる！

言葉を習える！

そんな喜びに支配された僕は、フラッシュ・ライトと鉄パイプを持ったまま駆け出した。

「があああっー！」

灼かれしモノ。

それも、かなり活きの良いヤツだ。

僕の顔を狙って振られた腕を掻い潜りながら、鉄パイプで横っ腹を突く。

「くっそ、動きの速いヤツはやっぱり硬い。かと言って銃を使えば、他の灼かれしモノも寄ってくる。……なら、こうだっ！」

僕は灼かれしモノに背を向け、一目散に逃げ出した。

クルマの残骸が散乱しているので、ディリンケン・パスは迷路のようになっていく。

外の噂はいろいろあるけど、ここの灼かれしモノに襲われて命を落とす人間がほとんどなので、噂が本当なのかはわからない。

水場が多いとか、廃墟より新しきモノが多いとかはよく聞く。

僕が面白いと思つたのは、外には銃どころか、動くクルマまであるという噂だ。

「ああもう、出口はどこなのさ。破れてるフェンスなんてないじゃないかっ！」

「向こうにあつたわよ、少年」

「えっ」

思わず足を止める。

フェンスの向こうには、見た事もない服を着た女の人立っていた。

若い。

そして、信じられないほどに身綺麗だ。

テカっていないし、ボサボサでもない長い黒髪なんて、生れて初めて見た。

女の人がいるのは、触れただけで死んでしまう柵の外。

向こうには、こんなキレイな人達が住んでいるのか。

「えっと、誰で」

「危ないっ！」

鉄パイプは、反射的に捨てていた。

バックステップ。

飛び退きながら、ズボンの中に銃口を入れてシャツで隠していた銃を抜く。

「成仏！」

して下さい、までは言えなかった。

灼かれしモノが仰け反る。

僕の撃った弾が、顔面に命中したからだ。さらに銃爪を引く。

やはり、活きがいいだけあって硬い。

バン、バン、バンと3発も撃って、やっと灼かれしモノは地に崩れ落ちた。

「美形シヨタっ子の股間からベレッタが出てくるとか、コレなんてエロゲ？」

「しよ？」

「おほん。なんでもないのよ、少年。それよりフェンスの切れ目は、もう少し向こうなの。頑張つて向かって。お姉さんも、急いでそっちに向かうから」

「ダメッ！」

僕の大声に、女の人は酷く驚いたようだ。

少しだけ哀しそうに眉を下げている。

「キレイなお姉さんは嫌いなのかな？」

「銃声で灼かれしモノが集まる。だから、反対の方向に逃げてっ！」

「いや、だつて。……あ、ちよつとっ!？」

パンツ!

イヌ型の灼かれしモノを撃ち、僕は返事を聞かずに走り出す。

女の人が指差したのは、北だった。

クルマの残骸の中には触れると死んでしまう物もあるので、気軽に乗り越えたりは出来ない。東や西に進路を変えながらも、最終的に少しでも北へ進める道を選んで走り続ける。

進路上にいる灼かれしモノは、銃で倒すしかない。

後ろから聞こえる足音は、気にしない事にした。活きの良いのが、何匹かいるらしいからだ。

足を止めれば、囲まれて死ぬ。

パンツ!

また人型。

でも今度は柔らかいヤツで助かった。

柵。フェンスとかいうらしい。

やはり、穴は開いていない。空まで届きそうな高さの、触れただけで死んでしまうフェンス。どこにも穴なんてないじゃないか。

「死んで、たまるかつー！」

走る。

センシヤの残骸が多くなってきた。

大きな箱のようなクルマも多い。何人が乗れるクルマだったのだろう。いや、その形状は、まるで何かを閉じ込めるための物のようだ。

ここで大昔、何かがあった。それは間違いないだろう。

「あれかつー！」

全力で走りながら大きな箱のようなクルマの残骸を迂回した先には、たしかに破れたフェンスが見えた。

「なん、で……」

破れたフェンスの前は、丸い広場のようになっている。

その中央に、贅沢なほど大きな焚き火。木材が貴重な僕達の街では、こんな大きさの焚き火なんて厳冬期にだって滅多にお目にかかれない。

そして外に出るための穴の前には、ミルクレイプ・チエイソウとその部下が約10人。

「遅かつだなあ、りどるびーちゃんよお。おであ待ちくたびれて、部下のケツを何回掘ったかわつかんねえだあ」

素早くマガジンを交換して、ミルクレイプ・チェインソウを睨みつける。

いつかケツを掘ってやると醜い笑顔で宣言されたのは、僕がまだ6歳の頃だ。コイツの仄暗く濁った目で見られると、僕はいつも吐き気を催す。

「銃に勝てると思ってるの?」

「んだあ」

「ついにアタマにまで性病が回ったか。部下の皆さん、性病の特効薬が荷物に入ってるんだ。忘れられた時代の抗生物質。極上品だよ。いらない?」

「そりやありがてえ。いただくよ」

「じゃ、その醜く太った肉団子に、みんなで一斉に襲いかかってさ」

「オマエさんを殺した後でなあ、リトル・B!」

勝ち誇った表情でミルクレイプ・チェインソウの部下がポケットから出したのは、僕のととは違う形の拳銃だった。

「やっぱ持たされてたか……」

「ブルース様が、銃と荷物をすべて渡したなら逃してやってもいいとおっしゃってたぜ。オマエは年の割りに賢いからな。どうしたら良いかはわかってるんだろう?」

「わかってるよ、もちろん」

「なら、じゅっ」

パンツ！

男の眼球を撃ち抜き、背後に転がる。

そのまま、男達とは逆へ駆け出した。

背の低いクルマと、鉄の箱のようなクルマの残骸。

低い方の上に飛び乗ると同時に、僕を追っていた灼かれしモノ達が広場に雪崩れ込んだ。

最初の賭けには勝った。

次の鉄の箱のようなクルマの残骸。それに触れても死ななければ、ここを切り抜けられる可能性も出てくる。

「ジーザス！」

出会い

跳んだ。

鉄の箱のようなクルマの屋根に手がかかる。

それなのに、死んでない。

賭けは、僕の勝ちだ。

ジーザス。

それは祈りの言葉。神様なんて信じてないけど、効果があるならいくらでも祈ってやる。

斜めになっている屋根に身を伏せ、銃声の響く広場を覗き込んだ。

ミルクレイプ・チェインソウとその部下は、隊列をしつかりと組んで後退している。

どうやら、フェンスの外に出て灼かれしモノ達を始末するつもりのようなのだ。

部下が何か言ったに違いない。

バカなミルクレイプ・チェインソウだけなら、広場で灼かれしモノを迎え撃って死ん

でくれただろうに。

「向こうは銃を撃つのに慣れてない。ここに身を隠して、1人ずつ殺れば……」

そういうえば連中はフェンスの外に出たが、あの女の人は大丈夫だろうか。

ずいぶんと清潔そうな服を着ていた。あれではヤツラに見つかつたら、身ぐるみを剥がされてしまう。もちろん、それだけではない。しばらく嫌な思いをするし、最悪の場合は殺される。

「聞こえるのは怒声と銃撃の音。灼かれしモノの吠える声も聞こえるな。女の人の悲鳴はない。……大丈夫、か」

マガジンを抜いて、ポケットの弾を補充する。

拳銃のマガジンは2つしかない。それでも、大切な僕の命綱だ。

銃があつても、弾がなければ鈍器にしなければならない。さつきまで銃に入れていた方のマガジンに弾を詰めながら、外への出口を見遣る。

灼かれしモノ達は僕に見向きもせず、フェンスの向こうに行つてくれたようだ。ヤツラを何人減らしてくれるだろう。

背負っている大きなザックをクルマの屋根に下ろし、この場を切り抜けるためのとつておきを探す。焚き火の明かりがあるので、フラッシュ・ライトは消してザックにしまった。

急げ、急げ！

気だけが逸る。

「……あつた！」

カーキ色の、小さな箱。

父さんはこれの使い方を知っていたので、ブルースに食料と水を毎日支給されていた。アル中になるまでは、上等な酒も。

酒がなくては生きられないようになってから理由をつけて食料と水だけを支給したのだから、やはりブルースは人の使い方を心得ている。真似る気なんてないが、そんなやり方を学ばせてくれたのだから、また会えたら礼をしてやってもいい。

くれてやるのは、もちろん鉛弾だ。

箱の上部に小さな信管を差して、屋根から飛び降りる。

頼りないほど細い足を出し、F面を出口に向けて地面に設置した。この方向を間違えると、とんでもない事になる。

パンツ！ チュンツ！

元の位置に戻ろうと低い方のクルマの屋根によじ登った所で、銃撃が来た。

「危なっ！」

大急ぎでザックを置いてある屋根に戻る。

銃撃は、破れたフェンスの向こうからだった。ここならば、銃撃は届かない。

そう安堵した瞬間、ミルクレイプ・チェインソウの腰巾着が顔を出す。

「外したら殺される、それが銃って武器なんだよっ！」

バンツ！

僕の撃った弾は、もう一度僕を狙おうとフェンスの向こうから顔を出した腰巾着の肩間を、正確に撃ち抜いた。

「どうした、かかって来いよ玉なし共！」

「うるせえっ、Cが見えてんに誰が行くかよ！」

C。

僕が設置したとっておきは、そう呼ばれている。

Cの力で、ブルースは彼に逆らう勢力を殺し尽くした。殺つたのは父さんと、まだ小さかった僕だが。

使い方は知らなくても、ブルースの部下ならその威力は知っているか。

「膠着、って言うんだっけ。こんな状況……」

水も食料も、持てるだけ持って来ている。

だが、あちらの近くには水場があるはずだ。機械で作られた物じゃない、天然の水。どんな味がするのだろうか。

Cを撃とうとしたのか、また一人の男が顔を出す。
バンッ！

いくらCがジャマでも、今のは不用意に顔を出し過ぎだ。
男の倒れる音が僕の耳に届く。

この辺りの灼かれしモノは、フェンスの向こうですべて倒されてしまったらしい。
やけに静かだ。

あと、何人いる。フェンスの破れている場所にはクルマやセンシヤの残骸が多くて、
ミルクレイプ・チェインソウ達の姿は見えない。

だがそのおかげで、ヤツラがCを撃つには僕の射線に入らないといけないのだ。

「朝までに終わるといいけど」

「じゃあ、終わらせましようか」

「っ！」

声のした方向に銃口を向ける。

あの女の人だ。

僕と同じく伏せるようにして、フェンスの破れた場所を覗き込んでいる。

どうしてスカートなんだろう。しかも短い。焚き火の明かりが届いているのは顔の
辺りまでだというのに、闇の中に足が見えている。それほど、白い肌なのか。

「敵じゃないわよ?」

「……味方って保証もない」

「だから殺すの? 優しそうな顔立ちをしてるのになんか険があると思っただら、ヤサグレた生き方をしてきたのかな」

「生き方は、生まれ方だ」

「あらあら。檻の中はそんな感じなのね」

「檻?」

皮肉だろうか。

人を襲う家畜は子供の時に捕らえて檻に入れ、残飯を与えて育ててから外に出さずに槍や剣で突き殺して解体する。

ブルースに逆らう人間も、見せしめで檻に入れられたりしていた。

その檻に、僕がいたとでも言いたいのか。

「もうかなり昔の話だから伝わってないか。あのフェンスはね、お姉さんの故郷がすっぽり入ってしまうほど大きな地域を、丸ごと囲んだ檻なの。大昔のこの国で、バイオテロっていうのがあってね。核まで使っても生物兵器になっちゃった人々を殲滅できないから、高圧電流の流れるフェンスを張って多くの無事な人間ごと閉じ込めたのよ。言ってる意味、わかる?」

「……ほとんどわからない」

「でしようね。まあ、そんな事をしてても感染を止められるはずなんてなくってね。今じゃ外の世界も、檻の中と同じ。いえ、もっと酷いつて話よ」

さっぱりわからないので、黙って出口を見張る。

敵ではないというのは、本当なのかもしれない。この女の人は腰に拳銃を装備しているが、それを僕に向けようとはしないのだ。

「それより、他に出口があるなら教えて欲しい」

「ああ、ないわよ?」

自分は、あそこから入って来たとしてもいいのか。

ここで嘘。

やはり敵。なら……

「待ちなさいって、少年。お姉さんがあそこから入って来たのは本当なのよ。ほら」
女の人が消える。

なんだ、この人はもしかして人間じゃないのか。

「なん、で……」

「光学迷彩。それも、特別製のね」

「声がする場所は変わってない。なのに、姿を消せるなんて」

「見えなくなってるだけだけどね。触ってみたら？ そしたら信じてもらえるわ。さあ、どうぞ」

おそるおそる手を伸ばす。

出口と女の人がいた辺りを見ながらだ。

ムニユツとした感触。

「あんつ」

「柔らかい」

「そ、そつちに驚くんだ。少年、お母さんは？」

「顔も知らない」

「……そうなの。家族は、いないのかな？」

手を握られる感触。

その手も酷く柔らかく、そして暖かい。

「父さんが死んだから、街を出た」

「どこに行くつもりだったの？」

「西。シーがあつて、大きな街に賢者がいる。そこなら、わかるかもしれない」

「何がわかるの？」

「ハッピーニューイヤーの意味。僕の名前は、ジョン・ハッピーニューイヤー。ハッピー

ニューイヤーの意味を探しに、僕は街を出た」

女の人が姿を現す。

手を握ったまま、まっすぐに僕の目を見ていた。

「君は運がいいわよ、ジョン」

「え？」

「半年」

「……意味がわからない」

「ジョンが私と来れば、半年後にハッピーニューイヤーの意味を知るわ。どう、一緒に来る？」

「半年、飲ませればいいのか？」

「飲ませる？ 何を？」

「僕くらいの歳の男の精液は小腹を満たすのにちょうどいいから、飲ませろってよく言われた」

「ええっ！」

女の人は顔を真っ赤にして目を伏せてしまう。

僕は、なにか変な事を言ってしまったのだろうか。

「外って言うのかな。そこじゃ飲ませろって言う人はいないの？」

「ど、どうだろう。……ちなみに、ジョンは飲ませたり」

「そんな事をさせてやる必要はなかった。だからあまり家から出なかったし」

「仕事はしてなかったのね。まあ、見たところまだ中学生くらいだしね」

「仕事ならしてた。父さんが目をつけた人間を尾行して、街の外で殺して金品を奪う。運がいいと月に1人殺れば、他に仕事をしなくてもお金は足りた」

「……ヘビー級の過去をさらつと話すのね、ジョン。これからも、そうやって暮らしていくつもり？」

「まさか。銃には弾が必要だから、廃墟を漁る。もう、父さんが見つけたこの拳銃の弾は残り少ないんだ。そして、そこで見つけた自分に必要のない物をどこかの街で売れば、たぶん生きていけるはず」

僕の言葉に、女の人は笑顔を浮かべて頷いた。

「なら、もう一度訊こうかな。お姉さんと一緒に来る？ お姉さんの仕事も、スカベンジャー・ハントなんだ。助け合えば生き残る確率は跳ね上がるし、持ち帰る品もそれだけ多くなるわ。飲ませるとか言わないし、良かったらどうかな？」

外では廃墟に入って忘れられた時代の遺物を手に入れる行為を、スカベンジャー・ハントと呼ぶのか。

悪くない話だけど、それはこの女の人が裏切らないならばだ。

「ああ、お姉さんが君を騙す心配ならしくなくていいわよ。スカベンジャー・ハントで得た物は公平に分けるけど、今のジョンが持っているのはその拳銃と下の対人地雷だけでしょ。言っちゃ悪いけど、お姉さんの光学迷彩セーラー服や武器と比べたら、まるで価値がない。奪う気なんてないわ」

「……なら、どうして僕を誘ったの？」

「悪者に殺されかけている人を見過ごしたら、お姉さんも悪者と同じじゃない」

おどけたように言っているが、その言葉に嘘はない。

この女の人の目を見ていると、なぜかそう思えた。

「……わかった。ここを切り抜ける事が出来たら、僕はあなたと行く」

「嬉しいわ、ジョン。それとお姉さんはアキという名前よ」

「アキ。覚えた」

「うんうん。それじゃ、始めましょうか。ああ、対人地雷はもつたいないから使わなくていいわよ。信管を抜けば、また使えるでしょ」

「どうして使い方を」

「広く浅くのオタクを舐めちゃいけないわよ。そのくらいは知ってるの。よいしょつと」

女の人の、アキが肩から下げている箱を操作する。

ザザッ、ザッ。

そんな音が箱から出ると、アキはそれに口元を寄せた。

「交渉成立。仲間が増えるわよ。ジャンニスからぶちかましちやって！」

他にも仲間がいたのか。

一緒に行くと言ったのは事実だけど、その仲間が気に入らなければ、アキ達とは別れて西を目指そう。

そう思うと同時に、とんでもなく大きな音がした。

「なにっ!？」

「爆発音よ、RPGのね。クレイモアを使えるなら、驚くほどの音でもないでしょ。撃ち漏らしはカレン、頼んだわよ？」

また爆発。

いや、これは銃声だ。

「こっちは大きな銃なのか……」

「よくわかるわね、ジョン。これは、スナイパーライフルの音」

「スナイパーライフル？」

「遠くから敵を撃つ銃よ。さっきのRPGっていうのは、こんな車両なんかを壊すための武器」

アキがコンコンとクルマの屋根を軽く叩く。

「外には、そんなのが……」

ザザツ。

その音にアキが眉を寄せる。

と同時に、女の人の怒鳴り声が聞こえた。

「一人しづといのがそっち行つたぞ、アキ！」

ザーツ。

「射線が切れた。狙撃不可能。まあ、アキなら平気」

また女の人の声。

「じゃあ、ちよつと片付けてくるわね。ジョンは出発する準備を」

「ミルクレイプ・チェインソウは、父さんを殺したヤク中。しづといのつて言つてたか

ら、ヤツだと思う。僕が殺らなきゃ」

「……危なくなつたら、お姉さんがソイツを殺すわよ？ あなたは、ジョンはもうあかし

達の仲間なんだから」

頷く。

立ち上がつて、背の低いクルマの残骸の屋根に下りた。

ミルクレイプ・チェインソウ。

禿頭やぶくぶく太った体のあちこちから血を流し、片足を引きずっている。それでも油断は出来ないし、する気もない。

睨み合う。

「り、りどるびー！」

「ミルクレイプ・チェインソウ！」

サヨナラ、ミルクレイプ・チエイソウ

ミルクレイプ・チエイソウが持っているのは、見た事もない形の銃だ。体も指も人間とは思えないほど大きいので錯覚してしまいそうになるが、どうやらそれは拳銃ではないらしい。

拳銃よりも大きな銃口が、僕を狙っている。

「みんなにぐになつた！ ごんどむも、ばいも！」

「オマエの部下の名前なら、コンドームとチエリーパイだろ。いい加減に人間の言葉を覚えるよ、ミルクレイプ・チエイソウ」

「にぐにしないで、食う！ りどるびー！」

「ジョン。ソイツの銃はショットガン、散弾を広範囲にバラ撒く銃よ！」

「まさか、これがシャツガン!?!」

「誰もいねえのに、ごえがぎごえる……」

シャツガンとは離れて戦え。

父さんは酔っ払っていた時だけど、たしかそう言っていた。

なら、これ以上ミルクレイプ・チェインソウを接近させてはいけない。

「サヨナラだ、ミルクレイプ・チェインソウ！」

銃口を跳ね上げる。

眉間を撃ち抜けば、この肉の塊だって即死だろう。

それにミルクレイプ・チェインソウが着ているのは全身を覆う、防弾チョッキを縫い合わせた服だ。狙うなら、顔しかない。

パンツ！

「な、なんだって……」

「でへえ。ぶるーず様の言うどおりだ。顔をかくせば、じなねえ」

「腕で庇って痛くないのかよっ！」

「クスリ、たくさんもらっただ。これ。んごっ、んぐっ。……んー、ぎもちいーい♪ これ
でまだ、うだれでもいだぐねえ」

動きを止めた僕に、ミルクレイプ・チェインソウの銃口が向けられる。

ダアンツ！

衝撃。

風が、まるで刃のようだ。

でも頬の肉を抉られたが、即死は免れた。
ツイてる。

運の波に乗れ、ジョン。

父さんの声が聞こえた気がした。

ポーカー狂いで、酒場に入り浸りだった父さん。酒より博打のはずだったのに酒のピンを手放せなくなつてから、すっかり人が変わつてしまった。

旅立ちの日に仇が討てるなら、父さんも喜んでくれるだろうか。

「ならその腕が千切れるまで、撃ち続けてやるっ！」

バンツッ！

バンツッ！　バンツッ！

マガジンの弾は15。

顔を腕で庇うミルクレイプ・チエイソウは、撃たれても撃たれても悲鳴すら上げない。
い。

だがそれでも、僕には撃ち続ける事しか出来ないのだ。

「くそっ、本当に人間なのかよっ！」

1マガジンも弾をブチ込まれたミルクレイプ・チエイソウの腕には、服が破れて爆ぜた果実のような傷口が見えている。それでも、しっかりとシヨットガンを持ってい

た。

その銃口が、ゆっくりだが確実に近づいてくる。

死ぬのか？

僕はハッピーニューイヤーの意味を知らずに死ぬのか？

「……そんなのは、嫌だっ！」

もう遅いのかもしれない。

間に合わなくて死んでしまうのかもしれない。

それでも僕は、マガジンを交換する。

「このくらいは助太刀ならいいよね、ジョン」

「アキ!?」

どこに隠していたのかもわからないほど大きな、銀色に光る武器。

剣なのだとは思いますが、それは今まで見たどんな剣より美しい。

そして、それを振り上げたアキも、今まで見たどんな女の人より美しかった。

ミルクレイプ・チェインソウ。

顔を庇っていた腕がズれる。

その腕が地面に落ちるまでに、僕はアキと、ミルクレイプ・チェインソウ両方の目を見た。

「ぎやあつ。いでえつ！」

「今よ、ジョン！」

走る。

ミルクレイプ・チエイソウは右腕を切断され、ショットガンを落としている。それでも、左手で顔を隠すのを忘れてはいない。太った体は防弾チョッキで守られているので、なんとしても頭部だけ守れと指示されているのだろう。

僕の拳銃では残る左腕を潰せなくても、あのショットガンなら。

「おでの銃。ぶるーず様にもらった、銃……」

ミルクレイプ・チエイソウは腕を斬り落として距離を取ったアキを追うより、僕の拳銃から顔を庇うより、ショットガンを拾う事を優先したらしい。

だが、人間とは思えないほど太り過ぎた上に、痛覚がなくなるほどクスリをやっている。

マトモに動けるはずがない。

「僕の、勝ちだ」

ショットガン。

拾い上げ、拳銃を手放して両手で構えた。

銃口の１センチ先には、呆けた表情のミルクレイプ・チエイソウ。

顔を庇う事すら忘れ、四つん這いになったままショットガンの銃口を見つめている。

「おでの、銃……」

「バアイ、ミルクレイプ・チェインソウ」

トリガー。

物凄い音と衝撃で、撃った僕の姿勢が崩れたほどだ。

ミルクレイプ・チェインソウの頭部は粉々になって消失し、首から呆れるほどの血が噴き出している。

数歩さがって、血の雨を避けた。

巨体が音を立てて地に倒れると、拍手の音がする。

アキだ。

「仇討ち成功ね、おめでどう」

「人を殺して喜んじやダメなんだよ、アキ」

「いいわね。常識的な思考をする子は好きよ。荷物を取って来るといいわ。仲間が待つてる」

「それなんだけど、もし僕が信用できなかつたら」

「ええ。一緒に行く話はなしでいいわ。大丈夫。2人共、良い子達よ」

頷いて、クルマの屋根に荷物を取りに向かう。

放り投げた拳銃と、使わなかったCも回収して信管を抜いておいた。

ザックを持ってクルマの残骸から下りると、肩から下げている箱にアキが何かを言っている。

「お待たせ。もう外に迎えに来てるから、さっそく2人を紹介するわよ」

「あ、この銃」

「ソードオフ・ショットガン。元が古いから2発しか装填できないけど、近距離ならベレッタより威力があるわ。ホルスターは後で作ってあげるから、持っておいて。さあ、行きましょう」

「ありがとう。……その剣、すごくキレイだったね」

「それは嬉しい言葉ね。これは日本刀と言って、お姉さんの故郷の武器なの」

「それとアキも、キレイだった。助けてくれて、ありがとう」

「……そ、そう。こちらこそありがとう。キレイなんて言われたのは初めてだから、どう反応していいかわからないわ」

「こんなにキレイなのに」

アキの後ろを歩きながら、歩を進める姿勢までキレイなのかと僕は驚いている。歩く度にスカート裾が揺れて、チラチラと見える白い太股もキレイだ。

「故郷では、中の中か中の下。でもこっちじゃ身だしなみに気を使う余裕のある人なん

てそうはいないから、それでジョンにはそう見えるのかもね」

「え、夜なのに明るいの？ でも焚き火でもランプでもない。こ、これは……」

フェンスの向こうには、明かりを盛大に灯した大きなクルマが待っていた。

牛で言うなら横つ腹を僕達に見せて停まっているのだが、前と後ろにドアがある。

プシュツツという音がして、そのドアが開いた。前の方だ。

「バスという乗り物よ。さあ、クリーチャーが来るかもしれないから早く乗りましょう。

2人は本当の美人さんだから、ジョンも気に入ってくれると思うわ」

ドアの向こうには赤い髪の体格の良い女の人と、僕と変わらない背丈の銀色の髪をした少女がいた。

どちらも、アキのように清潔な服装ではある。

でも赤い髪の女の人はズボンもシャツも凄く小さくて、アキより大きな胸やお尻が見えてしまいそうだ。

逆に僕と同じくらい背丈の子はヒラヒラした布がたくさんついた服を着ていて、とても動きづらそうに見える。そして胸もお尻も、アキより小さい。何より異様なのは、機械で目隠しをしている事だ。

頭の後ろで赤い髪を束ねた女の人が僕を見ながらタバコに火を点け、それからニヤリと笑った。

「アキの好きそうなガキだなあ」

「かわいいでしょ。この子はジョン・ハッピーニューイヤー、よろしくね。露出狂みたいな赤髪のポニーテールがジャンニスで、ゴスロリのボブカットがカレンよ。今は夜だから、暗視ゴーグルをしてるの。どう、どっちも私より美人さんでしょ？」

そうだろうか。

「アキの方がキレイ、かな」

「うえっ」

「いい度胸だこのガキ。さっさと乗らねえと、急発進で振り落とすぞ？」

「女はちよいブスの方が簡単にヤレそうでモテたりもする」

「誰がちよいブスよ、カレン。こ、これはあれじゃない、ほら。人種が違うから細かい美的センスの違いと、どの顔を見ても同じに見えるって理由で、ちよいブスでも外国人にだけはモテ、って自分でちよいブスって認めんのかーい！」

騒ぎ出したアキの横を抜け、いくつもある椅子に座る。半年も一緒に行動するなら、遠慮なんていらなだろう。

またあの音がしてドアが閉まり、音と振動が椅子に座る僕を包んだ。

「こーやって、クルマは動くのか……」

「檻の中にクルマはねえのかよ、ジョン？」

「残骸ならたたくさんある」

「ふーん。なら、漁りに行く価値もないねえ」

「ねえ、後ろ半分が鉄板と金網で仕切られてるのはどうして？」

「ああ、たまに客を運ぶからな。用心のためさ。一応、自分で自己紹介しておこうか。アタシはジャニス。このパーティーの運転担当で、戦闘では軽機関銃を使う。たまにRPGもな。まあ、RPGはさっきので品切れだけど」

軽機関銃というのもわからないし、RPGも音しか聞いていない。

でも僕より背が高くて腕も太いジャニスなら、きつと上手く戦うのだろう。

「カレン。狙撃担当。19歳だから、カレンお姉ちゃんと呼ぶ」

「じゃあ、アタシはジャニスお姉さまで」

「お姉さん、お姉ちゃん、アキ姉、アキ姉ちゃん。んー、悩むなあ……」

「アキ、ジャニス、カレン。半年間、よろしく」

「呼び捨てかよ、かわいくねえぞ？」

「カレンお姉ちゃん。言わないと狙撃する！」

「いきなり強制はダメでしょ、カレン。徐々に、ゆつくりと自分好みに染め上げていくのよ」

「たった半年で？」

「そ、それは」

首を傾げてカレンが言うと、アキは言葉を詰まらせた。

「とりあえずドコ向かうんだ、アキ。こつからならモーガン・タウンに向かつて、休息を取つてから街渡りの客を探すか？ それとも適当に廃墟を漁つて、その戦利品をモーガン・タウンに売りに行くか？」

「うーん。今回は、ジョンに決めてもらいましようか。パーティー加入のお祝いに。ジョン、外の街でお泊りしてお客さん探し。それか廃墟で、スリル満点のゴミ漁り。どっちがいい？」

外の街にも興味はある。

でも、今まで遠くから見ただけだった廃墟を漁つて、銃や食料を探せるなら。

「廃墟に行きたいけど、僕が決めてもいいの？ それと、パーティーって？」

「ああ。パーティーは協力してスカベンジャー・ハントをする集団の事よ。廃墟つてクリーチャーがウジャウジャいるから、1人で行つたらすぐ死んじやうでしょ。だから私達は、3人でスカベンジャー・ハントをしてるの」

「いやあ、もう1人くらいメンバーが欲しかったんだけど、下心ミエミエの男しか加入希望者がいなくてなあ。ジョンに出会えてラッキーだったよ」

「ふうん……」

「ま、檻の入り口でいい出会いがあるって賢者のお告げは正しかったんだねえ。1年もかけて大陸を横断したのは、ムダじゃなかったか」

「もしかしてアキ達は」

「そうよ。ジョンの目的地から来たの。戻るにしても数ヶ月はかかるから、ハッピーニューイヤーの意味は途中で知る事になるわね。西海岸まで私達と行くかは、ゆつくり考えて決めなさい。それまでは、この辺りの廃墟を探索して過ごせばいいわ。毎日、楽しく暮らせるわよ」

スカベンジャー・ハントというのは、そんなに儲かるのだろうか。

その事を率直に訊ねると、廃墟にある大昔の物は壊れていなければどこでも高く売れるらしい。そして銃の弾と同じくこのバスというクルマを動かすために必要な物も、廃墟に行かなければ手に入らない。

僕が目指そうと思っていたシー、海と賢者のいる大都会は、このバスのようなクルマがなければとても辿り着けないほど遠いんだそうだ。

ジャニスが鼻歌を口ずさみながら、バスを走らせる。

しばらくすると僕は、違和感を感じた。

「……クルマって酸っぱいんだね、アキ」

「え、まさか舐めたりしたの？」

「ううん。でもなんか、口の中が酸っぱい」

「えつと？」

「初めてバスに乗ったんだ。乗り物酔いなんじゃねえのか？」

「ええっ!?! ジョン、吐くって単語はわかるよね。吐きたい感じなの？」

「……お腹は殴られてないけど、そうかも」

「ちよ、バス止めてジャニス！ 私が周囲警戒するから、カレンは降りたらジョンの介抱を。背中をさすってあげて」

「やれやれ。パーティー加入1時間もしないでこれかい。こりや、騒がしい毎日になりそうだねえ」

「ジョン、もう少しガマンよ。降りるまでガマン！」

「顔面蒼白。涙目かわいい。もう少しガマンさせるべき」

「鬼か、カレン！」

「も、もう、ムリ……」

初体験

酷い目に遭った。

僕が気持ち悪くなったのは乗り物酔いというもので、初めてバスに乗ったなら仕方がないと3人は言ってくれたが、人前で戻してしまうとはなんとも情けない。

もう近くにバスを止めて寝るかと言ったが、水を飲んでいたら落ち着いたので、構わずに進んでもらった。

屋根に乗っていたカレンから、廃墟を見つけたと合図が来たのはついさつき。

それで、この辺りで夜を明かすと決まったのだ。

バスの運転席がある方は座席が最小限しかなくて、その後ろに寝るための広いスペースがある。そこに寝転がった僕は毛布をかぶっているのだが、どうにも落ち着かない。

「ううん……」

耳に当たる吐息。

アキだ。

くすぐったいので頭を動かすと、柔らかいものにぶつかる。

「ヒマな時に好きだけ揉ましてやつから、今は寝てる。ったく、エロガキが」
別に揉みたくない。

そう呟いたらジャニスに小突かれ、そのまま胸に頭を抱え込むようにされる。

苦しいのでやめて欲しいが、仮眠を取ったらそのまま朝から廃墟に入るらしい。少しでも体を休めておかなければ。

いつそ運転席で見張りをしているカレンと、朝まで話してようか。そんな事を考えながら、僕は都合よくちようど訪れてくれた睡魔に身を委ねた。

「起きろ。起きろつてば、ジョン。廃墟に行きたくねえのか、おい！」

「眩しい。……ん、起きた」

「朝だからな。起きたんなら顔を洗いに行くぞ」

「水場があるの？」

「汲んである水があるんだよ。ほら、起きた起きた」

身を起こして立ち上がろうとすると、小さな唇が目の前にあった。

「えつと、カレン？」

「こんな顔をしてたのか。夜はずっと暗視ゴーグルとかいうのをしてたから、わからないかった。」

かわいらしい、そう表現するべき顔立ちなんだろう。

「惜しい。寸止め」

「なに、どうしたのカレン？」

「これ」

カレンが差し出したのは、動物の革で作られたベルトのようなものだ。

受け取ってみると、2つある。

「ホルスターか。ちようどいい。着替えを持って着いて来な、ジョン」

「もう一つは朝ゴハンの時までには」

「わかった」

バスでの寝泊まりも、廃墟の探索も、僕だけが経験のない事だ。経験者のジャニスの言う通りにしよう、と、ザックを開ける。

下着。靴下。シャツ。

「ズボンも着替えるの、ジャニス？」

「当たり前だ」

「わかった」

これからの季節は暑くなるので、上着はいらないだろう。

ジャニスとバスを降りると、アキが焚き火で何かを焼いていた。

「おはよう、ジョン」

「おはよう」

「これ、ジョンのタオルと歯ブラシね。歯磨き粉は共用。掃除とお洗濯は当番制だけど、慣れるまではやらなくていいわ。あ、服やタオルは毎日交換してね。清潔に暮らす。それが数少ない、私達のルールよ。いい?」

「いいけど、歯ブラシって何?」

「……そこからのね。ジャンス、ちゃんと教えてあげて」

「あいよ。こつちだ、ジョン」

ジャンスが立っているのは、バスの屋根に上るためのハシゴの前。

昨夜は暗くて見えなかったが、屋根には大きな箱のような物や、たくさん荷物が載せられている。

「少し離れた場所に着替えやタオルを置いて、服を脱いでからここに来るんだ」

「何をするの?」

「水浴びさ。嫌いか?」

「好きだよ」

言いながら服を脱ぐ。

「ちよ、土の上に置いたら汚れるって。そのカゴに入れるの、洗濯物はそっち。ジャン

ス、ちゃんと教えてって言ったでしょ！」

「アキは細けえなあ。だそうだ、ジヨン。覚えたなあ？」

「うん」

洗濯物のカゴには、アキ達の服や下着も入っている。

その上に、脱いだシャツを入れた。

ブーツを脱いで靴下、ズボンもカゴに入れる。最後に下着を脱げば、水浴びの準備は完了だ。朝から水浴びが出来るなんて、アキ達はバスで移動しながらだということに、とてもいい暮らしをしているらしい。

「うおっ」

「わあ……」

「いい脱ぎっぷり。そして凶悪」

「カレン、窓から身を乗り出してまで見たいの？」

「うん」

苦笑しながら訊くアキに、無表情ながら嬉しそうなカレンが頷く。

「えっと。何を見たいの、カレン？」

「なん、……でもない」

カレンが顔を赤らめ、バスの中に引っ込む。

どうしたのだろうかと思っていると、結構な力でジャニスに頭を叩かれた。

「……痛い」

「あのなあ。アタシ達は女で、ジョンは男だ。素っ裸で股間を見せつけたりしたら、襲われたって文句は言えねえぞ?」

「襲う? ジャニス達はゴハンに困ったりしてなさそうだし、スカベンジャー・ハントで廃墟に入るなら子作りは。……ああ、快樂目的の性行為か」

「ちよ、おま! どうなってんだよ、アキ!」

「どうも育った街がロクでもなかったみたいなの。小腹が空いたから精液を飲ませろとか、普通に言われてたらしいわ。もしかしたら、経験はなくても行為を見た事くらいはあるのかもね」

「アタシ達だって、エロ本でしか見た事ねえのに!」

「……さらつとバラさないでよ、ジャニス」

女は臭いから嫌いだ。

でも、3人は臭くない。昨日、ジャニスに抱きしめられながらも眠れたのは、それが理由だと思う。

「相手した方がいいなら、言つて。廃墟に入るのもバスに寝泊まりするのも初めてだから、足を引っ張ると思う。そんな僕でも、役に立てる事があるのは嬉しい」

「……ダメよ、そんな事を言ったら。もっと自分を大切にしなきゃダメ、ジョン」

「とか言いつつ迷ったろ、アキ？」

「迷ってない！」

「いや、迷ったね。寄宿舎のガキみたいに便所の個室や、見張りの順番中に運転席で自分を慰めるのには飽きてるはずだ。3人でジョンをかわいがれば、毎晩どれだけ愉しいか。そんな事を考えただろう？ アタシは考えたぜ！」

「……威張るな、バカ」

脱いだのはいいが、水なんてどこにもない。

どうするのだろうかと思っていると、ジャンスがハシゴを上がって丸い鉄の部品に手を伸ばした。

「ジョン、シャワーヘッドって言ってもわかんねえか。この大きなのが貯水タンクな。そこから銀色の筒みてえのが伸びてるだろ」

「この、先っぽがキノコみたいになってるヤツ？」

「そうだ。その下に立て」

「わかった」

僕が移動したのを確認して、ジャンスが円状の部品を回す。

「冷たっ！」

「まだ夜と明け方は冷え込むからな。夏になりや、逆にこの冷たさが恋しくなる。ほれつ、これが石鹸だ。よく泡立てて、体の隅々まで清潔にしろ。クリーチャーの中には、体臭に反応して人間を襲うのもいるからな」

「わかった。……あー。雨みたいで気持ちいいね」

「手早くやれよ？ 水は無限にある訳じゃねえんだ」

「うん。急ぐよ」

髪と体を石鹸で洗い終わると、ジヤニスの水を止めてタオルを僕に放った。それで体を拭いていると、コップと歯ブラシというのを渡される。

教えられた歯磨きという行為は、とても気持ちが良かった。

「なんか生き返ったって感じ。特に口の中」

「初めてなら、まあそうだろうさ。明日からは毎朝これをしろよ？ 水が足りなくなったら水浴びは中止にもなるけど、洗顔と歯磨きはよほど水に困らない限り毎日だ」

「わかった」

「ごはんよー。服を着てテーブルに着きなさい」

「おう、今行く」

焚き火のそばに、小さなテーブルが出されている。

カレンだけは、バスの屋根で食べるようだ。見張りというのは、片時もやめないから

こそ効果があるのだろう。

「これ、食べ物？」

「そうよ。さあ、座って」

「……うん」

「では、いただきますっ！」

「いただきますーす」

「いただきます」

屋根の上のカレンもいただきますと言っている。

僕も言うべきなのかな。

そう思っていると、アキに睨まれているのに気がついた。

「いい、いただきます」

「よろしい。たくさん食べてね。昨夜は時間が遅くてそのまま仮眠を取ったから、お腹は空いてるでしょ？」

「うん」

茶色の塊に、恐る恐る手を伸ばす。

アキもジャニスも手で食べているので、これでいいはずだ。

茶色の塊は僕が思っていたより柔らかかったようで、持ち上げながら握り潰してし

まった。

「うわっ」

「パンは柔らかいのよ。食べた事ないの？」

「ない」

「なら、主食は？」

「カチカチ」

「えっと、なにそれ？」

「機械から出て来る、四角くて固い食べ物。野菜や肉が高くて買えなくても、カチカチと機械の水を飲んでれば死なない」

「非常時用の食料生産プラントが生きてたのかしら」

「だろなあ。いいから早く食べ、ジョン。正面に大きな廃墟が見えるだろ。メシが済んだら、あそこを漁るんだ」

遠くに見えている廃墟は、本当に大きい。ブルースが住んでいた、街一番の建物よりもだ。

見渡す限りの荒野に、ポツンと残る大きな廃墟。

たぶん僕には想像も出来ないような危険が、あの中で待ち受けているのだろう。それでも、そこに早く入ってみたいと心が浮き立つ。

「弾、あるかな」

「ベレッタの弾ならバスにあるから、それを使うといいわ。シヨットガンのも。そういうえば、ホルスターはまだ付けてないのね」

「上着を持って来てないみたいだからな。着てみてからさ」

「これからの季節、上着は暑くない？」

「それでもだ。廃墟にはクリーチャーだけでなく、罠まであつたりする。それに壁は崩れかけてたり、木製のドアは破れてささくれてたりするんだぞ。革手袋と上着なしじゃ、出る頃には血塗れだ」

「なら、ジャンスも着替えるんだ？」

「まさか。アタシは冬でもこんな感じさ」

ジャンスは慣れているから大丈夫という事か。

「私達には、これがあるからね」

そう言つてアキが僕に向けたのは、腕に付いている機械だ。

本で見た事のあるテレビのような物が付いていて、そこに文字が浮かんでいる。僕には、まったく読めない。

「なに、これ？」

「軍用デバイス。私のは性能が段違いだけどね。ジャンスとカレンが装備してる標準

的なデバイスでも、身体能力や経験に基づいた力量を数値化して表示してくれるの。それがレベル。高レベルになればミスが少なくなるから、厚着して怪我を減らす事を考えるより、薄着で機動性を確保した方が死ななかつたりするのよ。まあ、ジャニスはさすがに薄着すぎるけどね」

「……まったく理解できない。ごめん」

「まあ、難しいからなあ。要はこれを装備してれば、自分の強さがわかる。兵士の質を揃えるために使われていた、測定器だと思えばいい」

「それは。凄いね」

「なくても例えば、怪我の程度や治りの早さでどのくらいレベルなのか推測も可能なんだが、そのためにジョンに怪我をさせる訳にはいかねえだろ」

「だからあの廃墟で、軍専用デバイスを探そうって訳。あれだけの建物なら、バイオテロの後で逃げ込んだ人も多いはず。それを救助に行った軍人がクリーチャーになった人達に倒されてれば、遺体と一緒に軍専用デバイスも残ってるでしょ。5つもあれば、街で修理してジョンが使えるわ」

機械の修理なんて出来るのか。

外って凄い。

「このゴハンも全部が信じらんないくらい美味しいし、世界が違うって感じだ」

「徐々に慣れたらいいわ。おかわりは？」

「もうお腹いっぱい」

「食べ終わったら『ごちそうさまでした』ね」

「ごちそうさまでした。厚手の上着を取って来ればいい、ジャンス？」

「ああ。なるべく丈夫なのがいい」

「わかった」

ドアが開いたままのバスに乗って、ザツクの底に入れてある冬物の上着を出す。

それを羽織って戻ると、真っ黒な液体が満たされたカップを渡された。

「なにコレ？」

「食後のコーヒーよ。ライダーズジャケットなんて、よく持ってたわね。似合うよ、ジョーン」

「ありがとう？」

言ってからコーヒーというのを飲んでみる。

口に運ぼうとしても止められないし、カップに入っているからには飲み物なんだろう。

「……に、苦い」

廃墟へ

コーヒーを口に含んだだけで顔を顰めた僕を、ジャニスが指差して笑う。笑い事じゃない。

まるで春先の山菜を、灰汁抜きもせず生で食べたような苦さ。

僕達を見ていたアキが苦笑しながら、白い粉をコーヒーに入れてスプーンでかき混ぜた。

「なに？」

「飲んでみて。気に入ると思うわ」

半信半疑で、もう一度コーヒーを口に運ぶ。

苦いだけじゃない。

「……これ、もしかして砂糖？」

「砂糖は知ってるのね。どう、それなら飲めるでしょ」

「うん。ありがとう」

「飲みながらでいい。立て、ジョン」

何をするのかわからないが、こんな熱い物を持ったままでは怖い。

僕がカッツを置いて立ち上がると、ジャンスは僕の腰に手を回してホルスターというのをベルトのように付けた。

「ソードオフは装弾数が少ないから、左の腰だ。抜かずにグリップを握って銃口を上げて、そのままトリガーを引く超近距離武器としても使えるからな。コミックのロボットの固定兵器みたいに。にしても、さすがはカレンだ。可動式で抜かずに撃てるホルスターを、たった数時間で縫い上げるなんて」

「私が絵に描いて説明しただけのゴスロリドレスを、数日で自作しちゃうくらいの腕だからね」

「次はハンドガン、ベレッタのホルスターだ」

「わかった」

ホルスターとは、銃を入れておくポケットのような物らしい。

ジャンスは僕の左脇に付けられたホルスターに拳銃を、腰のにはミルクレイプ・チエインソウのショットガンを入れた。

「銃の重さで血が止まったりはしてねえか？」

「大丈夫」

「使い方は、好きに工夫するといいい」

「拳銃のはマガジンを2つ入れる場所がある。腰のベルトには、弾をそのまま入れる所が6つ。でも、弾は1発しかないや」

「待ってて。バスの保管金庫から取って来るわ」

「アキ、ホルスター追加。だから、32口径と弾も」

そう言つてカレンは、ホルスターを屋根から放つた。

「よつと。ナイスキャッチ、私。ジャニス、これもお願い」

「あいよ。ハンドガン2つに、2連式のソードオフ・ショットガンか。接近戦はさせたくねえんだがなあ」

「アサルトライフル。最低でもボルトアクションくらいあるといいわね、あの廃墟に」

言いながらアキがバスに向かい、僕はジャニスの手を借りて右の脇の下にもホルスターを装備した。

毎朝こんな事をするなんて、スカベンジャー・ハントつて大変な仕事なんだな。

「32口径つて、ジャニス？」

「あのデブちんの部下が持ってたハンドガンさ」

「貸してくれるのか。なんか悪いね」

「ジョン、アタシ達はパーティーだ。だから戦利品は公平に分ける。そのショットガン

とアキが持つて来る銃は、ジョンの取り分だよ。バスで迎えに行つた時、死体から使える銃は剥ぎ取つたんだ」

「それだと、僕が取り過ぎでしょ。ショットガンは1つしかなかったんだし、ミルクレイプ・チェインソウだって、アキのおかげで殺せたんだ」

「いいんだよ。融通し合うのもパーティーだ。うちで一番装備が貧弱なのはジョンなんだから、黙つてもらつとけ」

「……もしかしてパーティーつて、家族の事？」

ジャニスが考え込む。

「そうね。家族と同じくらい大切なのがパーティーよ。だつて1人でも欠ければ、それだけ生き残る確率が減るもの。この荒野ではね、人間なんて簡単に死んでしまうわ。だから私達は3人で助け合つて、はるばる西海岸からここまで旅をしてきたの。ジョンとも、そうやつて助け合えたら嬉しいわ」

「……頑張る」

戻つてきて微笑みながら言つたアキに、そうとだけ答える。

いつか好きな女が出来たら、何があつても守つてやれ。それが男だ。

父さんはそう言つていた。

僕は、アキ達が嫌いじゃない。臭くないから。

だから、守ろう。

「そろそろテーブルを片付けて焚き火を消して、前進しましょうか。この辺りは、バスでの移動が楽でいいわよねえ」

「核は落ちてねえはずなのに、街が破壊されてつからな。当時、何があったんだか」

「大型のクリーチャーでも発生したんじゃない？ ビルなんかより大っきいの」

「考えたくもないねえ。ジョン、椅子を畳んでバスに乗せてくれ。置き場所は座席の後ろだ」

「わかった」

3人でテーブルや椅子をバスに積み込むと、天井の穴からカレンが下りて来た。

「クリーチャーの姿はない」

「やっぱ見張りをしてたんだね、カレン」

「カレンお姉ちゃん」

「はいはい。今度、僕にも見張りを教えてね。カレン」

「……かわいいのにかわいくない」

「そんじゃ、出発するよ」

「おけおけー」

アキの陽気な返事を聞いたジャンニスはエンジンというのを始動させて、ゆっくりとバ

スを進ませた。

遺跡が近づいてくる。

僕はこれからあそこに入って、忘れられた時代の物を手に入れるんだ。そう思うと、自然と手に力が入っていた。

「拳なんか握りしめちゃって。男の子ねえ、ジョン」

「ジャマだけはしないようにするよ」

「ジョンの射撃の腕なら、即戦力よ。頼りにしてるわ」

「だな。昨夜はその9ミリで、何人も即死させたそうじゃないか。廃墟にはすぐに慣れる。気負わずやりな」

「うん」

バスは進み、だんだんと廃墟の状態が見えるようになっていく。

すべての窓は割れ、入口も中に入れないんじゃないかと思えるほどにグチャグチャだ。

「あんなんで、中に入れるの？」

「たぶんね。ダメなら、1階の窓から入れればいいだけよ」

「なるほど」

「あの感じじゃ、中はクリーチャーだらけだろうなあ。ここいらに暮らしてるはずのク

リーチャーが、全部あそこで寝泊まりしてんじやねえか？」

「かもね。市庁舎って書いてあるわ。クリーチャーが手強そうなら、玄関ホールだけ漁ってすぐに撤退しましょう」

「アキ、まさか字が読めるの？」

「英語は得意じゃないから、少しだけね。それがどうしたの？」

「僕は、忘れられた時代の文字を覚えたい」

「OK。辞書があるから、単語なら教えられるわ。文法は、期待しないでね」

「わかんないけどわかった」

楽しみだ。

廃墟に入るのも、文字を習うのも。

ニヤけてしまいそうになる頬を手で隠していると、廃墟のだいぶ手前でバスは止まった。

「ここから歩きましょう」

「そうよ。もし逃げ帰るような事態になれば、カレンがバスの屋根からスナイパーライフルでサポートしてくれるわ」

「アキ、アタシの軽機関銃を出しといてくれよ。ないとは思うけどガソリンがあった時のために、ポリタンクとポンプを後ろから下ろしとく」

「了解。備蓄倉庫なんかまで漁れば、ガソリンだつてあるかもね」

ドアが開いて、ジャニスが降りる。

立ち上がったアキが開けたのは、バスの床だ。

大きな銃、それに四角い金属製のカゴがそこから出される。

「これは？」

「軽機関銃と、キャリアー。廃墟の中にある物を入れるカゴよ。持ち帰って売らなきゃ、ゴハンが食べられないでしょ」

「なるほど。じゃあ、僕がそれを背負うよ」

「ベルトは調節できるけど、大丈夫？ 今は軽いけど、帰りには重くなるわよ？」

「頑張る」

「……なら試してみましようか。いらつしやい」

キャリアーというのを背負っても、銃を抜くのに支障はない。

どれだけ重くなるのかはわからないが、これならなんとか運べそうだ。

「うん、大丈夫みたい」

「そう。重かつたら言つてね。私もジャニスもそれなりにレベルが高いから、荷物運びは苦じゃないのよ」

言いながらアキはあの声を届ける箱を2つ出し、片方をカレンに渡してもう1つを肩

に下げた。

「あのキレイな剣は持たないの？」

「あるわよ、ほら」

言つた途端に、アキは剣を握つていた。

姿を消せるんだから、そんな芸当が出来ても不思議じゃないのだろう。

「おうい、準備は出来たぞ。行こうぜー」

ドアから顔を出してジャンヌが言う。

僕とアキがバスを降りるとドアが閉まり、屋根に出て来たカレンが長い銃を持ちながら手を振つた。

「何かあつたらすぐに呼んでね、カレン」

「もちろん。お土産はお酒がいい。ジョンを酔わせる」

「市庁舎に、お酒なんかないって。それに酔わせたからって、期待してる展開にはならないと思うわよ。じゃあ、いつてきます」

「いでらー」

アキが先頭で歩き出す。

枠だけのキャリヤーにポリタンクを2つも入れ、重そうな銃まで抱えたジャンヌが最後尾のようだ。

2人に挟まれて歩きながら、僕は沸き上がってきたツバを飲み込んだ。

「気楽にな、ジョン」

「そうよ。危なそうならすぐ撤退。これが、スカベンジャー・ハントの基本だからね。覚えておいて」

「うん」

徐々に見えてくる入り口。

その中には、ボロボロのクルマがあった。

「忘れられた時代の人達って、建物の中にクルマで入ってたの？」

「そういう建物もあるけど、あれは違うでしょ。逃げ遅れて中に入れてもらえなかった人が、バリケードに車で突っ込んだらしいわね」

「道連れか。どんな時代にも、迷惑なバカはいるんだなあ。クルマに乗ってたなら、素直に逃げろっての」

「見捨てられた人間って、自暴自棄になっちゃうのかもね。クルマは動きそうにないけど、ガソリンは取れそうじゃない。どれだけ年月が経っても気化しきってないから、ガソリンじゃないのかもだけど」

クルマを動かすのに必要なのが、ガソリンか。

気化とはなんだろう。

廢墟から帰ったら、夜にでもアキに教えてもらおう。

「いよいよジョンの初探索か。楽しみだねえ」

「ジョン。私達にはバスがあるから、ガソリンというのを再優先で持ち帰る事にしてるの」

「うん」

「そのガソリンが、気化。つまり液体から気体になると、少しの火気でも引火して大爆発よ。忘れないで」

「銃を使っちゃダメって事？」

鉄パイプを持って来るべきだったか。

「そうよ。そうなれば私達3人は死んで、カレンがたった1人で途方に暮れる事になるわ」

「じゃあ、ポリタンクを背負ってるジャンスは銃を使えない？」

「密閉しちやえば平気。クルマがあるのはほとんど外でしょ。見えてるあのクルマも入り口で大破してるから、ガソリンを抜いたら風で気化したガソリンは散ると思う。でも、私がいいと言うまで銃は使わないで。火花が散るような動きもダメよ？」

「わかった。アキの指示を待ってから戦う」

「それでいいわ」

「アキの軍用デバイスは反則級だからなあ」

「こんな世界なのにチート装備がなきゃ、非力なヲタのJKなんて体売るくらいしか生き残る方法なんかないって。さあ、気を引き締めて踏み込むわよ」

ヲタ。

それにJK。後でアキに意味を教えてください。

でも、今はスカベンジャー・ハントが先だ。

ジャニスが僕の肩を押さえる。

振り返ると、唇に立てた人差し指を当てていた。話すなという意味だろう。

しやがみ込みながら、アキがクルマに接近する。

そつとクルマの向こう、廃墟の中を覗き込んだのはアキなのに、僕はまた生ツバを飲み込んだ。

探し物

アキが手招きをする。

身を低くして僕とジャンニスがクルマに近づくと、アキは優しく微笑んだ。

「用心深さは合格ね、ジョン。玄関ホールに、クリーチャーはいないわ」

「このくらしいの声なら、話して平気なのか」

「ええ。でも、廃墟では出来るだけ口数は減らして、声も潜めてね」

声を出さずに頷く。

アキは満足気にまた微笑み、割れた窓から運転席を覗き込んだ。

「目盛り一つもないけど、ガソリン抜いちやつて。ジャンニス。こつち来てからはクルマの残骸をあまり見かけないから、これだけでも貴重だわ」

「了解。今回は見学な、ジョン」

「なるべく動かさず、新しきモノが来ないか見張る。それでいい?」

「上等の答えさ。頼んだよ」

「うん」

ひしゃげたドアの隙間に手を入れ、アキが何かを操作する。

するとジャニスの目の前のフタが小さな音を立てて開き、僕にはわからない作業を始めた。

目盛り一つもない、そう言われた時点でジャニスはポリタンクを一つだけ下ろし、フタを開けてポンプの先をすでに入れている。

もう片方をクルマに差し込むと、ジャニスは小さなスイッチを押した。

「臭うでしょう、ジョン」

「うん。これが……」

「ガソリンが気化した臭い。この臭いがしたら、火気厳禁よ」

「わかった」

パーティーに入ったのだから、覚えなくてはいけない事がたくさんあるのだろう。

新しい事を知る。

僕は、それが何より好きだ。

迷惑はかけるだろうけど、一つ一つ覚えていけば僕も役に立てるはず。

いつか。

「もう空だ。ポリタンク一つにもなんねえなんてな」

「手に入っただけマシよ。このクルマの持ち主は、ガス欠が近いからここに突っ込んだのね。それより、後部座席は見た？」

ガソリンを抜いた部分のフタを閉じながら、ジャニスがニヤリと笑う。

「当然だ。割れてるのも多いが、酒のビンや缶詰がゴロゴロしてらあ」

「この車の持ち主、火事場泥棒でもしてて逃げ遅れたみたいね。市庁舎なら食料の備蓄もあつただろうから、ここさえ破られなきや救助を待てたでしょうに」

「なら、軍の突入はなかつた？」

「いいえ。階段の手前に迷彩服のガイコツが見えるわ。武器は、……パツと見ただけなさそうね」

「ジョンにアサルトライフル。せめてボルトアクションライフルくらいは欲しいのにな」

「まだチャンスはあるわよ。行きましょう」

「ああ」

アサルトライフル。それに、ボルトアクションライフル。

いつかそれらを目にする機会もあるのかな。思いながら、アキに続いて階段を目指す。

ポリタンクとそれ用のキャリアーはここに置いて行って、後で持ち帰るようだ。

「これよ。階段の警戒をお願い、ジャニス」

「了解」

アキがガイコツに手を合わせる仕草をしたので、僕も真似ておく。

「服の下かな。……あつた。軍用デバイス。電源は、謎電力で入るわね。通信、地図表示は機能停止。うーん。やっぱりしばらくはこの無線機を手放せないかあ」

「僕のキャリアーに入れればいい、アキ？」

「これは私のアイテムボックスに入れておくわ。軍用だから丈夫だと思ふけど、これ以上壊れたら大変だし」

「アイテムボックス？」

「私だけが使える、大きなバックみたいな物よ。他の人には見えないから、高価な物はそこね。日本刀も、今はアイテムボックスの中」

言われて気づいたが、アキがバスで出した日本刀がない。

便利なバックもあるものだ。

「銃はないね」

「あつたけど、生き残りが使つたんでしようね。サイドアームのハンドガンすら剥ぎ取られてなくなつてるわ。廃墟ではガイコツを見かけたら、周りを注意深く見回すといいわよ、ジョン。銃がある可能性があるから」

「わかった」

「……この臭い。来るわよ、ジャンニス！」

「任せろっ！」

ジャンニスが腰を落とす。金属音を立てながら構えた軽機関銃という武器は、見るからに強力そうで頼もしい。

新しきモノが来たのだ。僕も、拳銃を抜いた。

「つてなんだ、ただのゾンビじゃねえか。ジョン、撃て」

灼かれしモノ。

クルマからはだいぶ離れたので、撃つてもいいのだろう。

いつもの拳銃を眉間に撃ち込むと、灼かれしモノはあっさり倒れた。活きが悪いのは、倒すのが楽でいい。

「これなら楽そうだねえ」

「まだゾンビしかいないって決めつけるには早いわよ、ジャンニス」

「わかってるって。何してんだ、ジョン？」

「ナイフを持って来てないから、灼かれしモノのポケットを切れない。何か代用できる物はないかなって」

「ゾンビのポケットなんて漁らなくていい。さっきのクルマの中は見ただろ？」

「いやらしい本とお酒。それに、缶詰がたくさんあった」

「あれを売るだけで10日は遊んで暮らせるんだ。ゾンビのポケットなんかシカトだよ、シカト」

「……わかった」

もつたいない気がするけど、ジャンニスの判断に従う。

このままこの階段で上に行くらしい。

日本刀を腰に装備したアキが、鼻をヒクつかせながら階段を上がっていく。

次からは、僕もナイフを忘れないようにしよう。ガソリンのせいで銃が使えない状況が考えられるなら、素手で灼かれしモノを殴るよりはいいはずだ。

「風が上から来たけど、腐敗臭だけで獣臭さが微塵もない。本当にゾンビしかないのかも。こっちはスカベンジャー・ハントをする人が少ないから、こんな楽勝の廃墟がまだまだあるのね。驚きだわ」

「なら、ドルをたんまり稼いでから帰ろうぜ。LAに豪邸を買って、好きな事をして暮らす。遊びに飽きたら、スカベンジャー・ハントに出るんだ。ピッカピカの戦闘車両でさ」「50万ドルで売りに出たアレ?」

「ああ。機銃が2つも付いててよ。エンジンもかなりのブツだって話だ。……ああ、運転してみてえなあ」

「機銃はカレンと、射撃は苦手だけど私よね。ジョンは？」

「助手席でアタシにタバコを啜えさせたり、肩を揉んだりだな。タバコはジョンが吸って火を点けたのを、アタシに啜えさせるんだ」

「わかった。次からそうする」

「マジかつ!？」

「本気にしないの、ジョン。はいはい言う事を聞いてたら、どんどん要求がエスカレートするわよ」

エスカレート。

「……死ねとか言う、ジャニス？」

「誰が言うか。せいぜいキスとか添い寝くらいだよ」

「そんなの、昨日もしたし」

「え？」

「は？」

「寝てる時、ずっとジャニスとアキがくつついてた」

「キ、キスなんかしてないはずよね？」

「寝てたら、カレンが何回かキスして運転席に戻った。暗視ゴーグル？ あれがちようど目に当たると痛くて」

「あんのクソアマ」

「抜け駆けは禁止って言ったのに……」

小さな頃から使っている、ベレッタという名前らしい拳銃だけでなく、32口径というのも抜く。

ミルクレイプ・チェインソウの部下は、銃の後部にある部品を親指で押し下げたからこれを撃っていた。

固い。

それでも力を入れて押すと、それは動いた。

「ジョンが32口径を抜いたらゾンビが来た。……違うわね。ジョン、なんでゾンビが接近してるのがわかったの？」

「アキと同じ、臭いで。32口径っていうの、撃つてみていい？」

「そうね。この廃墟は、初心者レベル上げには最適だわ。弾はたくさんあるから、どんどん倒しなさい」

「わかった」

僕は出くわした事がないが、灼かれしモノは集落や街をたまに襲いに来るらしい。やはりこんな姿になっても、屋根のある場所で暮らしたいのか。

パアン！

「お見事。本当に射撃の腕がいいわねえ」

「お、おいアキ。ジョンは32口径を初めて撃つたんだろ。しかも廊下の端から出て来るゾンビの接近に気がついて、その眉間にここから銃弾を撃ち込むなんて」

「凄いでしょ、ジョンの腕は」

「……まさか、同類かい？」

「さあ。それは軍事用デバイスの判断を待たないと、なんとも言えないわ。この状態だと予想通り、ニコイチ修理じゃ済まない、ゴイチ修理くらいかな。そこからデータの蓄積を待つから、答えが出るのは早くて夏の終わりかしらね」

「値が張っても、西海岸で可動品を買っとくんだったなあ」

「だね。賢者サマのお告げなんだから、そうするべきだったかも」

なんの話かはわからないが、臭いからして灼かれしモノはまだまだいる。

「えっと、軍事用デバイスを探しながら灼かれしモノを倒すの？ それとも、灼かれしモノを倒しながら軍事用デバイス探し？」

「軍事用デバイスを探しながら、よ。まずは正面の部屋からね」

「なら僕は役に立たないなあ。でも、わかった」

ドアを開ける。

窓は廊下にしかないので、部屋の中は暗い。

両手に拳銃をぶら下げながら、荒れ果てた室内にガイコツを探す。

「アロハシャツのガイコツが1つ。次ね」

「うん」

「待ちな、ジョン」

ジャンニスに呼び止められたので足を止めると、背中のキャリアーに何かを入れる音がした。

重さはほとんど変わらない。ただ、動くとき音が出そうなので、歩き方に工夫が必要かもしれない。

「売れる物の見分け方は、ゆっくり覚えればいいさ」

「うん。どんどん入れて」

「持ち帰れる量には限りがある。だから、なるべく高く売れる物を選ぶんだよ。なんでもかんでも入れてたら、バスが遺物に埋もれちゃうって」

「……なるほど。アキ、次は？」

「あー、右の部屋にしよっか」

「わかった」

次の部屋も、その次の部屋にも、軍用デバイスはなかった。

キャリアーに入れられる荷物だけは増えたが、銃も1つも発見できない。

「おかしいわねえ」

「軍人のガイコツが、異常に少ねえもんな」

「1階のコンバットスーツはボロボロだったから、ここはそれなりの激戦区だったはず。それなのに軍人の遺体がないなんて」

「考えたってしゃあねえって。それよりこんなに広い手付かずの廃墟なんて、この先また見つけられるとは思わねえ。根こそぎいたただかねえか、何日かかけてさ？」

「街渡りの客を乗せるスペースがなくなるけど、それはそれでいいかもね。西海岸を出てから乗せたお客さんの半分以上は、途中で強盗になったし」

「だろ。ジョン、3つの部屋に戻るぞ。まだ売れる物は多くあつたんだ」

「わかった」

3部屋を回り直すと、それだけで僕の背負うキャリアーはいっぱいになってしまった。

「これじゃクルマの中の物が」

「あれくらいなら、私のアイテムボックスに入るわ。行きましょう。バスに戻って、少し早いお昼ご飯。それからジャンスとカレンが見張りを交代して、またスカベンジャー・ハントよ」

「お昼ゴハン？」

「食事は1日3回に決まってるじゃない。中じや違ったの、ジョン？」

「1回が普通。僕はいつも夜だけ」

「呆れた。栄養をたくさん摂取しないと、大きくなれないわよ。胃が慣れるまでは苦しいかもしれないけど、毎食ちゃんと食べましょうね」

「うん。パンっていうの、美味しかったな」

「まだあるから、お昼にも出すわ」

「楽しみ」

好きの理由

ポリタンクに入れておいた少しのガソリンと、クルマの後部座席にあったお酒や缶詰を回収し、僕達はバスに戻った。

お昼ゴハンにはあの柔らかいパンや、焼いた何かの肉、魚のスープまで出たので、僕は大満足だ。

余裕がある時は食休みというのをきちんと取るのがルールらしく、僕はバスの座席でぼんやりと本のページに目をやっている。

「な、何を読んでいるのよっ。ジョン!?!」

「何って。性行為の勉強だけど」

「しなくていいからっ！ 西海岸じゃ成人は15歳だから、今のジョンとそんな事したら『シヨタコン変態女』とか呼ばれちゃうから！」

「そのままじゃん、アキ」

「うっさい、カレン。それでもエージェント志望の子達からは、クールなお姉さんだと思

われてるのよー！」

「ちよい布斯だけどな」

「そうそう、それだけはどうしようもない。って、やかましいわっ！」

エーリエントとは何だろう。

そう思つてアキを見るが、微笑みが返つて来ただけだ。カレンにも視線をやるが、あまり話したくはなさそうに見える。

ならばと、『わからないならなんでも訊け』そう言つていたジャニスのいる運転席まで歩く。

計器とかいうのが並んでいるところに、ジャニスのタバコとライターがある。それを一本取つて火を点け、煙を吐いてからジャニスに啜えさせた。

「かーっ、たままないねえ。女心をくすぐりやがる。なんか欲しいのか、ジョン？」

「エーリエントって、何？」

「それか。エーリエントってのはだなあ……」

「絶対、心の中で『ちよろい』って思われてるわよ、ジャニス」

ジャニスの話によるとエーリエントというのは、スカベンジャー・ハントをしながら賢者の望む物を調達したり、その指示に従つて遠くまで調査の旅をする人達の事らしい。

西海岸のにはハツデンシヨとかソーラーパネルというのがありますが、その部品は今の時代では作れないから、何処からか調達する必要があるのでそうだ。

アキ達はエージェントではないが賢者とは顔見知りなので、集団生活をしながらエージェントになるための勉強をしている子供達とも面識があるらしい。

「まあ、エージェントの説明くらいはいいけど、賢者の事は実際にジョンが会うまで話せないわ。それが約束なの。それに西海岸に行くかどうかすらも決めてないからね、ジョンは。賢者の事を知ってるのは、あの街の住民の中でも限られた人達だけ。外の人間に気軽には話せないのよ」

「………わかった」

文字はアキが教えてくれる。

なら、僕がどうしても都会に行かなければならないという事はない。

街にはそれぞれに秘密や独自のルールがあるとオババが言っていたので、話せないというのをムリに聞き出そうとは思わなかった。

「休憩が終わったらまた廃墟だ。アキ、先に備蓄庫を探しちまおうぜ。備蓄食料は腐らねえし、アタシ達で消費するだろ。積めるだけ積んじまって、空いたスペースに売る物を入れちまえ」

「ガソリンもあるかしら」

「あればいいなあ。こんな廃墟には、ガソリンの詰まったドラム缶があるんだろ」
「もしあつても積める？」

「進めば進むほどガソリンを使うから軽くなる。少しくらいのムチャは平気さ」
「ならいいけど」

結論から言うと、ジャンスの期待した食料もガソリンも廃墟にはなかった。

あるにはあつたが、備蓄されていた物ではなくて、普段から使われていた分しかなかったのだ。

軍事用デバイスも、ギリギリの5つ。

でもずっと探していた通信機能がまだ生きている物が3つもあつたとかで、アキはゴキゲンだ。

「3日も遺跡を漁って、銃は1つも出てこねえかあ。こんな事つてあるんだなあ」

「ジョンの軍事用デバイスはあつたし、別にいいでしょ。どうしても銃が欲しいなら、今回の稼ぎで買ってもいいし」

「アキ。東の街は品揃えが最悪。物々交換だから、値段もおかしい」

「そういえばそうだったわね。じゃあ、次は軍事基地でも探す？」

「さすがに、それはな。それよりも街並みがごっそり残つてりゃ、警察署やガンシヨッブも手付かずなんじゃねえか？ この辺りなら」

「あり得る」

「それじゃ、廃墟を探しながら移動しよっか」

「あいよ。とりあえずモーガン・タウンで、売れるモンは売ろうぜ」

「軍用デバイスの修理もね」

バスが動き出す。

外の街。

楽しみなような、怖いような。不思議な気持ちだ。

「ジョンはカレンお姉ちゃんとバスでお留守番」

「そうなの？」

僕とカレンが座っているのは、運転席のすぐ後ろだ。

ジャニスはハンドルを握っていて、アキは通路を挟んだ反対側の座席に座っている。

「たしかに、危険かもしれないわね」

「なんでだよ。ジョンが絡まれたら、アタシが助けてやるぜ？」

「その逆が心配なのよ。ジョン、もし見えず知らずの男にナイフを突きつけられて、食べ物を出せって言われたらどうする？」

「撃ち殺すけど」

「……あちゃー」

「ね。モーガン・タウンは、この辺りで最大の街だもの。完璧な吹き溜まりだわ。まずはチンピラの少ない村かどこかで、人のあしらい方を練習しないと」

「だなあ。こつちが悪くなくても、それを誰かに目撃させてから殺さねえとダメだ」
「それに出来るなら、怪我で済ませた方がいいわね」

「どうやら、僕が街に行くとは揉め事を起こすと思われているようだ。」

「ねえ、バスつて貴重だつたりする？」

「それはもちろん。この辺りじゃ動いてる車両なんて、数台しかないわ」

「なら、僕は留守番でいいや」

「バスを奪おうとしても、壊してしまつたら修理できる人がいないしパーツがない。だから、留守番は念のためによ？」

「うん」

初めて乗った日に経験した乗り物酔いの症状は、あれから出ていない。

アキの話では、その日の体調や気分で酔つたり酔わなかつたりする人もいるらしいので、僕は気にしない事になっている。

「ふんふふーん♪」

「機嫌が良いね、アキ」

「目的の物は手に入れたし、それを修理できる数少ない職人が直近の街にいる。稼ぎも

なかなかだったし、言う事なしよ。あーあ、これでジョンが西海岸に来てくれるならなあ」

「僕なんか連れ帰ってどうするの?」

「楽しく暮らすに決まってるじゃない。ジョンはお風呂って知ってる?」

「知らない」

「水浴びの代わりにね、大きな器にお湯を溜めて入るの。きつもちいーのよーつ。仕事が終わったら毎日お風呂に入って、鍵のかかった安全な部屋で少しのお酒を飲んで眠る。サイコーじゃない」

「人間がお湯に? 煮えちゃわないの、それ?」

「火傷しない温度に決まってるじゃない、やーね」

「ふーん」

思い浮かべてみるけど、大きな鍋で煮られる僕達の姿しか想像できない。

4人で大きな鍋に入った自分達を想像してみる。……あ、カレンが最初にお亡くなりになった。

そんなのが気持ちいいなんて、僕には理解できないや。

「アキは風呂好きだもんなあ。月に1度の部屋の掃除は頼んで来たけど、LAを出てもう1年か」

「婆ちゃん歳だから死んでて、部屋がホコリだらけかも」

「こら、カレン。縁起でもない事を言わないの!」

「シヤレになんねえからなあ……」

「そもそも、なんで僕を?」

「腕も見た目も性格も良い。難点があるとすれば若すぎて他のスカベンジャーにナメられるって事だけど、何年かすればそんな事もなくなるでしょ。つまりみんなでお爺ちゃんお婆ちゃんになるまでにお金を貯めて、体が動かなくなってきたら助け合いながら、のんびり暮らすには絶好の相手って事」

「それぞれが男を作ると、女パーティーはロクな事にならねえしな」

「それが本音。アキは性欲大魔神」

バスが揺れる。

見るとジヤニスが、身を振って大笑いしていた。

カレンもくすくす笑っている。

アキの顔は真っ赤だ。

「じゃあ、とりあえず西海岸に向かえば?」

「えっ、いいのっ!?!」

「おほーっ。着く頃にはジョンも成人してるし、ドルもたんまり稼いでるはずだ。いい

「ねいねえ」

「夢のツバメちゃんゲット？」

「よっしやー！ ジャニス、モーガン・タウンを出たら進路は西よ！」

「おうっ！」

バスのスピードが上がる。

しばらく走ると、お尻に伝わる振動がずいぶんと和らいだ。

「なんか揺れないね？」

「ああ、道路だ。快適な乗り心地だろ」

「なにそれ？」

「古いクルマの通り道よ。この時代でも、大きな道路は走りやすいの。西に向かえば向かうほどクルマの残骸だらけで、道路なのに逆に走りにくいんだけどね。ほら、地面が土じゃないでしょ」

「……ホントだ」

「もうすぐクーパーズ・ロックが見えて来る。森の手前で泊まって、朝になってから進むぞ」

アキとカレンはそれに賛成のようだ。

僕はわからないので、窓に額を付けて土ではない道路を見続ける。

「それにしてもジョン、なんで急に西海岸に来る気になったの？」

「んー。アキとジャニスとカレンと、ずっと一緒に嬉いのは嬉しい」

バスが揺れる。

キーツという、聞くだけで不安になる音までしていた。

「大丈夫、ジャニス？ 今の、なんか怖い」

「わ、悪い。いやほら、いきなりストレートな言い方をされたからよ」

「ストレート？」

「真つ直ぐにつて意味よ。ジャニスはずっと一緒に嬉いって言われて、照れちゃったの。だからもつと言つてあげて」

「ん。一緒に嬉い」

「もつとよ。なんで嬉いのかも言つてあげて」

「文字を、戦闘を、スカベンジャー・ハントを教えてもらえるから。それに、話してて楽し」

もうバスは揺れないけど、ジャニスは顔を赤くしている。

それを見るアキとカレンは、なぜかとても楽しそうだ。

「ジョン、ジャニスは好き？」

「ぶーっ！ ガハッ、ゴホッゴホッ！」

ジャニスが変な声を出す。

見ると、ハンドルを抱えながら咳き込んでいる。飲み物が変なところに入ってしまったようだ。

立ち上がってその背中をさすろうとした僕を、アキがいい笑顔で止めた。

「で、どうなの？」

「好きに決まってるけど」

「ひゅーひゅー」

「だってさ、ジャニス」

「バ、バカ言ってるんじゃないよ……」

「まだまだいっくよー。ジャニスのドコが好きなの、ジョン？」

「えっと、これはジャニスだけじゃなくてアキとカレンもなんだけど……」

「おーっと。予想外だけどバッチコイ！ 聞かせて聞かせて？」

「女なのに臭くない」

「は？」

「好かれた理由が酷すぎる」

「……ほれみろ。欲張るから、知らなくていい事実まで判明しちゃねえか。途中でやめてたら、今日はいいい夢を覗られたっつてのによう」

襲撃

夕食のお肉を焼いた焚き火はもう消えている。

もう、時刻は深夜。僕は運転席で、初めての見張りの最中だ。

なぜか僕の膝の上に座っているカレンは、いつも夜になると目に付ける暗視ゴーグルという物で暗闇を見通しているらしい。

時折、カレンの体がピクリと動く。

その後で黙り込み、安心したように息を大きく吐くので、灼かれしモノでも見つけては、その行方を見てくれていたのだろう。

今もまた、カレンは僕の膝の上で身を震わせた。灼かれしモノはバスを襲わないと判断して、安心したんだと思う。

「もう行った、カレン？」

「う、ん。また、イッた……」

「ごめんね。役に立たなくて」

「役に、立ってる。これ以上ないくらい」

カレンが空きビンに詰めてある水を飲む。

僕にも渡されたので少しだけ口に含んでからフタを閉め、なるべく音を立てぬようダッシュボードという場所にビンを戻した。

「静かだね」

「タバコ、運転席の下に潜って吸うといい。火が目立たないように」

「僕はあれば吸うけど、なくても買った探したりしないから。カレンは吸わないの？」

「うちではジャニスだけ」

「ふーん。ねえ」

「……しつ。クリーチャーが来てる」

クリーチャー。

その言い方にも、いい加減に慣れないと。

思いながら闇に目を凝らす、僕には何も見えやしない。

この闇に敵が紛れていて、壊されたら後がないバスを狙われる。そう考えると、夜と
いうものが途端に恐ろしく感じられた。

どうにかして、夜でも目がよく見えるようにならないかな。

「アキとジャニス、起こす？」

「うん」

運転席から這うようにして移動し、後ろの床で毛布をかぶって寝ているアキとジャニスを揺り起こす。

「んうっ。ジョ、ジョン？」

「起きて。クリーチャーが来てるって」

「そう。ジャニス、ジャニス！」

「……うるせえなあ。起きてるっての」

「なら、急いで支度しなさい。カレンが私達を起こすなんて、狙撃じゃ倒せないクリーチャーか、相当の数の群れが相手よ。逃げる事も考えておかないと」

「ふあーっ。こんな闇の中をバスで走ろうってのかよ。カレン、数は？」

「およそ100」

「なんっ!？」

「バスは発見されてるのよね、カレン？」

当然。

そうカレンが言うと同時に、アキとジャニスは飛び起きた。

ジャニスは運転席に、アキは座席の後ろの荷物置き場に走る。

「ジョンはこっちー！」

荷物置き場のアキだ。

近づくともバスのエンジンの音がかり、僕はアキに6つほどのマガジンを渡された。ベレッタのだ。

「撃てと言われたら窓を開けて撃つ。引つ込めと言われたら、1秒後には体を窓から引つ込める。出来るわね？」

「うん。どこから撃てばいい？」

「運転席のすぐ後ろ」

「わかった」

座席に走り、シートに膝を付いて窓を開ける。

「振り落とされんなよ、ジョン！」

返事をするより早く、バスは走り出した。

思っていたよりも揺れるので、リボルバーの方を抜く余裕がない。

左手で体を支えながら、右手でベレッタをいつでも撃てるようにするので精一杯だ。

「突つ切れそう、ジャンニス!？」

「まだ完全に囲まれちゃいねえ。たぶん大丈夫だ。それより、真夜中のクーパース・ロックスを全速走行なんてカンベンだぜ！」

「仕方ないわね。ルートを変更するなら、北に向かって。こつち側はまだ見渡す限りの

荒野で更地みたいなものだから、北ならなんとでもなるでしょ。進路が西寄りになり過ぎると、森や廃墟に激突しちゃうわよ？ 気をつけて」

「了解っ！」

アキが床に身を伏せ、腕の軍事用デバイスを操作している。

反対側、右の一番前の座席にいるカレンも、あまり大きくはない銃を手にして窓の外を覗んでいるようだ。

まだ、撃てとは言われていない。

「ふうっ。どうやら包囲網を抜けたようだ。一安心だね」

「100以上の群れなら、ザヴォック？」

「ああ。何匹か轢き殺したから、間違いはないさ。どこからか流れて来て、クーパーズ・ロックを根城にしたらしい。前に通った時は雪解けを待つての山越えだったから、アタシ達が東に行つてから住み着いたんだろうさ」

「もう少し山から離れて泊まるべきだったわね。油断したわ」

「朝イチでジョンに、緑の山を見せてやりたかったんだ。誰のミスでもねえさ」

「どうやら、銃を撃つような事態にはならないで済んだらしい。」

「弾は無限にある訳ではないので、パーティーにとつては良い事なのだろう。」

「窓を閉める、ジョン」

「あ、ゴメン。ねえ、カレン。ザヴォックって？」

「んしょ。小人のようなクリーチャー。元は人間らしくて、多少の知恵がある」

座席に僕を座らせ、その膝の上に座りながらカレンが教えてくれる。

たまにカレンがする、向かい合った形で座るといふよりは僕に跨るといった方がいいような不思議な座り方だ。耳や頬、首を小さくて真つ赤な舌でチロリと舐められたりするのてくすぐつたい。

「銃とか使うの？」

「それはない。武器は、牙と爪」

「食べられる？」

「そもそも食べたいとは思わない」

「そっかー。じゃあ、弾のムダだねえ」

「んっ。だから逃げるが勝ち」

「ちよつと、なにやってんのカレン!？」

「死闘の後のお愉しみ？」

「I 発だつて撃つてないでしょうが。下りなさい！」

「や」

「嫌じゃないっ！」

窓を閉める前に、後ろを見てみる。

ザヴォックというクリーチャーの姿を確認しておきたかったが、僕にはやっぱり暗闇しか見えなかった。

「アキはケチ」

「なんとでも言いなさい。ジャニス、悪いけどしばらくは運転をしてもらおうよ?」

「もうすぐ朝だろ。珍しく早起きしたと思えばいいさ。にしても、クーパーズ・ロック越えはムリだなあ。日中に駆け抜ける算段でも、木の上からザヴォックが雨みてえに降ってくるはずだ。どうするよ?」

「それなんだけど、北上してピッツバーグを探索。さらに北上してクリーブランドで、エリー湖の水質検査。そして可能なら、シカゴを回って帰らない?」

「うえっ!」

「またアキはムチャを言う……」

ジャニスは驚いて変な声を出しているし、カレンはアキの言葉をムチャだと言った。

「何がムチャなの?」

「シカゴってのは、過去の大都市なんだよ」

「へえ」

「賢者のいるLAより大きかった都市は、ジョンの故郷の向こう側だ」

「うん。それで？」

「ジャニスが過去の都市の事を教えてくれそうなので、運転席の隣に立ってタバコに火を点けてから渡す。」

そのままドアに続く2段しかない階段に腰を下ろすと、新しいタバコの箱が飛んできた。

「やるんだろ、ジョンも。ライターはあるかい？」

「うん。父さんの形見がある。ありがと」

「ちよつと、体に悪いからタバコなんか渡さないで！」

「はっ。またぞろ平和なジパングのお嬢さんに逆戻りかい、アキ？」

「……うるさいわね」

「アキがこの世界で生きていくって覚悟を決めた時、3人で約束したはず」

「わかってるわよ。あつちの常識は捨てたわ。……国だけじゃなく、世界まで違うんだし」

僕にはよくわからないが、3人には3人の過去があるのだと思う。

いつかそれも聞けたらいいなと思いつながら、タバコに火を点けた。

美味しいとは思わないけど、考え事をする時には悪くない。僕にとって、煙なんてその程度のものだ。

「どこまで話したっけか、ジョン？」

「賢者の街より大きな街は、僕のいた街の向こう側」

「ああ、そうそう。だからこの国で一番大きな街は、もう跡形もない。ほんで、賢者のいるL Aの次に大きかった都市が、シカゴだ。何人ものエージェントが様子を見に出かけたが、ただの1人だつて帰つちや来ない」

「シカゴまでの道が危険なの？ それとも、シカゴの街が？」

「さあな。それは行つてみなきやわかんねえよ」

「なるほど」

ジャニスとカレンは、シカゴ行きに賛成するのだろうか。

3人の話し合いを耳に入れながら座席に戻つてうつらうつらしていると、いつの間にか夜が明けていた。

今回は姿すら見られなかった、ザヴオックと戦う夢を観たような気がする。

僕は大人で、体も大きくなっていて、アキ達と助け合つて笑い話をしながら、小さなクリーチャーの群れを蹴散らしていた。

でも仲間がもう1人いて、僕はその人を凄く頼りにしてたんだけど、その姿すら思い出せない。

「なあ、アキ」

「どうしたの、ジャニス」

「とりあえずピッツバーグを見て、シカゴに寄るか決めるって言ったよな」

「そうね」

「それから3時間は荒野を走ってるぜ?」

「……なるほど。つまり、ピッツバーグは更地になったと。右を見ても左を見ても、見渡す限りの荒野。進路を変えましょ。しばらく北に進んだら、エリー湖が見えて来るはず。たとえ水がなくても、段差でわかるわ」

「な、なんでそんなに落ち着いてんだよ! 核が落ちたのは、ニューヨークとワシントンDC。ピッツバーグに生き残りがいないにしても、街が残ってなきやおかしいじゃねえかよー!」

「私に怒鳴らないでよ」

あるはずの街がない。

それが、ジャニスには納得できないらしい。

「カレンはどう思うの?」

「知らない」

カレンはアキがジャニスと話しているので、その目を盗んでまた僕に密着している。今はちょうど、僕の股間に顔をうずめているような格好だ。

ズボン越しにかかる息が熱い。

「知らないって」

呆れながら手持ち無沙汰なのでタバコを啜えると、ビクツと動いたカレンが深く長く息を吐いた。

顔を密着させたままだから、くすぐったいんだけどなあ。

「……ふう。ジャニスは、このバスをとても大事にしているの。だから想定外の事態に遭遇して、バスが壊れるのを心配しているのよ。そしてアキはジパングで育ったからか、クルマなんてどこにでもあるし、壊れたら修理すればいいという感覚が捨てきれない。そんな感じね」

「え、えつと。カレンだよね？」

「当たり前じゃない」

いつもは片言なのに、こんな話し方もするのか。

カレンは優しげな表情で微笑みながら、僕のまばらなヒゲを爪で抜いた。

「痛っ」

「ヒゲなんか生やして、やらしー」

「意味がわからない」

「わからない事、ゼーんぶ教えたげよつか？」

「ねえ、話し方が変だよ。どうしたのかレン……」

「ふふっ。いいからお姉さんにすべて任せ、痛いっ!」

「カーレーナー? ちょっと目を離れただけで賢者モードになってるって、どういう事よっ!」

「ええっ、カレンが賢者だったの!?!」

「違う違う」

「こんなエロ賢者がいてたまるか」

「羨ましい、ジャニス?」

「当然だ」

なんの事かはわからないが、アキは怒っているらしい。

腕を引かれたので素直に立って、ドアの前の階段に移動する。ジャニスと話すには、ここが一番いい。

「ねえ、なんでアキは怒ってるの?」

「自分がしたくても出来ない事を、カレンが簡単にやっちゃうからだ。アタシ達は3人が3人共、得手不得手はつきりしててなあ。お互いが羨ましいから言葉がキツくなつて、よくケンカになっちゃうんだよ」

「ふうん」

「それで、カレンはどっち？　ここで南に進路を変えるか、シカゴを指して行けるトコまで行くかの2択よ」

「折衷案。クリーブランドまで消えてたら、すぐ南に」

「街がまだあったら？」

「クリーブランドのクリーチャーが、4人のどんな組み合わせでもツーマンセルで対応可能ならシカゴへ。でも途中で、ツーマンセルじゃ倒せないのが出たら引き返す」

「……ふむ。悪くないわね」

「だな。じゃあ、それで行くか」

「でもジャニス」

「ツーマンセルとは何かを聞くタイミングを逃した僕は、火を点けていなかったタバコにライターの火を寄せた。」

賢者モードの意味はわからないけど、カレンは優しい瞳でジャニスを見ている。

こんな瞳になるなら、カレンにはいつも賢者モードになっていて欲しい。

「んだよ？」

「モーガンタウンまでの道のり、各地の水質検査用サンプルはもう採取済み。これに未知の領域であるエリー湖とミシガン湖の、湖水のサンプル。シカゴの写真、それにアキの軍用デバイスが自動マッピングしたデータを持ち帰れば、ジャニスが欲しがってた

新車を買えるくらいのお金がLA管理局から出る。だからアキは、シカゴ行きにこだわった。それは、わかつてあげないとダメ」

「……わあってるよ」

キラキラ

それから数時間バスで進むと、ジャニスの指示でなぜか僕は目を閉じさせられた。

理由を聞いても、みんなは笑うだけ。でも、途中でジャニスが喜びの声を上げたのが聞こえる。

そして、バスが停まった。

「はあ。いったい、何が始まるんだか」

「ふふっ。さあ、行くわよ」

「どこに?」

「バスの屋根」

「このままっ!?!」

「ジャニスのバンドナで目隠ししてあげる。ほら、立って。そう。こっちこっち」

「ああもう、歩きづらいなあ……」

「よっと。屋根に出たわ。楽しみねえ」

「きつと驚く」

「だなあ」

「もう目を開けていいわよ。せーのっ、どうぞっ！」

目を開ける。

「わあっ……」

僕は、この日の事を生涯忘れないだろう。

目の前に広がるのは、瓦礫でも岩肌でもない。

初夏の陽射しを照り返す、見た事もないほど大きな水場だ。

キラキラ、キラキラ。

陽を照り返す、柔らかい波。

それは、まるで夢の様な景色だった。

「ふふっ。言葉もないみたいね」

「アキ、これが海？」

「いいえ、これは湖。海はこの何百倍も、何千倍も広いのよ」

「そんな事が……」

あのの？

とまでは口に来ななかった。

視界の端に入ったのは、緑がかった水色をした人型のクリーチャー。

「やっぱりいるのね、サハギン。お願い、カレン」
「ん」

カレンが手に取ったのは背負っているスナイパーライフルではなく、僕達がいるバスの屋根の手摺りに立てかけていた、スコープというのが付いていない長細い銃。

「その銃は？」

「これが、前に言ったボルトアクションライフル。カレン愛用のスナイパーライフルよ。威力は落ちるけど、これも遠距離から敵を撃つのに適した銃なのよ。西海岸では手頃な値段で売ってるの。廃墟でも発見しやすいから、次に見つけたらジョンの分にしましようね」

「こつち来る途中でめつけたのも、ガソリンと交換しねえで取つとけばよかったな」

「仕方ないでしょ。私もジャニスも使わないから、ジャマになるだけだし」

タアンツ。

そんな音がして、サハギンが砂利の上に倒れた。眉間に赤黒い穴があるのが、僕の間でもなんとか見える。

さすが、カレンは銃の名手だ。

「あれは服を着てないから、ポケットすらないよね」

弾がもつたいない。

そんな僕の考えを察したのか、アキが苦笑を浮かべる。

「そうね。でも、ボルトアクションライフルの弾は安いから。それに、あれは食べられるのよ。死体に定期的に水をかけてれば、驚くほど日保ちがするし。味もいいのよ」

「……なるほど。で、いつまで湖を見ててもいい？」

「湖はいつでも見れるわよ。それより西を見て、ジョン」

言いながらアキが指差したので、その先に視線を移す。

赤と白の、屋根しかない変な建物。それと、1階建ての廃墟が見える。

「廃墟、だね」

「あそこを漁れば、この辺りに人間がいるかどうか推測ぐらいは出来るわ」

「人間がいたら？」

「言葉が通じれば、情報が欲しいわね」

「いなかったら？」

「クリーチャーの調査をしながら、クリーブランドを目指すわ。ザヴォックから逃げて、だいたい北東に進んだから」

「調査。水をどうこうって言ってたね」

「ジャニスに、エージェントの説明はされたでしょ。エージェントは旅をしながら、どこ

にどんなクリーチャーがいて、どこにどのくらいの人間がいるかを調べてるのよ。そして、各地の汚染具合もね。ちなみにあの建物は、ガソリンスタンド」

「ガソリンスタンド。名前にガソリンって付くくらいだから、ガソリンがある？」

「正解。今回はこの地域にどんなクリーチャーがいるかわからないから、私とジャニスを探索に出るわ。カレンは、スナイパーライフルでここからサポートね」

「ジョンはこれ」

渡されたのは、カレンのボルトアクションライフルだ。

「借りていいの？」

「うん。マガジンはそこにある」

それからカレンは、ボルトアクションライフルの使い方を説明してくれた。

カレンはスナイパーライフルで、ガソリンスタンドに併設されている店舗の廃墟に思うられるクリーチャーを撃つらしい。

だからまたサハギンが出たら、それを撃ち抜くのが僕の役目だ。

「出来るわよね、ジョン？」

「うん」

「カレンを頼んだぜ」

「アキとジャニスも、気をつけて」

「任せて。危ないようなら、すぐに逃げ帰るわ。逃げ足は速いのよ、私もジャニスも」
「そんじや、いつてくらあ」

「いつてらっしやい」

アキとジャニスは屋根の穴からバスの中に戻り、数分後にバスを降りた。

手を振りながらガソリンスタンドに向かう2人に、僕も手を振り返す。

アキはいつもの日本刀と拳銃。ジャニスは大きな軽機関銃に拳銃だ。キャリアーは普通の金網のをアキ、ポリタンクのをジャニスが背負っている。

「あの2人なら、心配ない」

「……うん。でも、誰かを見送るのは苦手かな。自分が行く方がずっと、気が楽でいい」

「陽射しがキツイ。これを」

「なに、この黒いの？」

「サングラス。眩しくて狙いを外したり、太陽の方向からの接近に気づくのに遅れたりしないように。こう使う」

どうやらサングラスは、暗視ゴーグルの日中用のような装備らしい。

それで目を覆うと振り返ったジャニスが先を行くアキの肩を叩き、2人はまた僕達に手を振った。

手を振り返しながら、サハギンがいないか注意深く辺りを見回す。

アキ達もガソリンスタンドが近くなったからか、いつでも攻撃や逃走に移れるように姿勢を低くしていた。

「サハギンが出たよ、カレン」

「練習に撃つ。あれは足が遅いから、何発か外しても大丈夫」

「……わかった」

カレンはスナイパーライフルを構えたまま、スコープから目も離さずに言う。

やはり彼女達ほどのスカベンジャーでも、廃墟は危険なものなんだろう。カレンはアキとジャニスを守るために、自分の役割を真摯にこなそうとしている。

廃墟に接近するアキとジャニスを守るのがカレンの役割なら、僕の役割はカレンを守る事だ。

使い方の説明は聞いた。カレンが撃つ姿勢も見ていた。

やれるはずだ。

「撃つね」

「うん」

頬に銃床を当てる。

照門の向こうに照星。そしてその向こうに、サハギンの魚顔を重ねた。

女に触れるより優しくトリガーを引け。

酒場で初対面のチンピラを乱暴に撃ち殺した時、父さんが苦笑しながら僕の頭を撫でてそう言っていたのを思い出す。

「タアンツ！」

トリガーを引いたという感覚もなのまま、僕はサハギンの眉間を撃ち抜いていた。

糸の切れた人形のように、サハギンが崩れ落ちる。

排莖、次弾装填。

これで、次が来てもすぐ撃てる。

「命中?！」

「うん。あれって魚なの?！」

「魚でも人間でもない、クリーチャー」

「……なるほど。ねえ。マガジンを抜いてここに出してある弾を込めて、それを戻す

のってあり?！」

「あり」

「じゃ、1発もらうね」

「うん」

屋根の上に転がっている弾を込め、立ち上がって周囲を見渡す。屋根には貯水タンクや荷物もあるけど、問題なく周囲を見張れる。

目に入るのは道路と、少しばかりの緑。

驚いた事に、西には植物がたくさん残っているのだそうだ。

それは多すぎて、街を飲み込んでしまっていたりもするらしい。

見ているだけで寂しいけど、それはとても静かな景色だとアキが言っていたので、そんな街を見る日かひそかな楽しみだったりする。

「ジョン、水分補給」

「あ、うん。カレンは？」

「まだいい。レベルが低いうちは、外ではコマメに水を飲む」

「わかった」

水を口に含むと、遠くにサハギンが見えた。

ちようど木の陰から、こちらを覗いたところらしい。

慌ててボルトアクションライフルを持ち上げるが、サハギンは木の向こうに隠れてしまふ。

「……チツ」

射撃姿勢で待つ。

この構えも、父さんが教えてくれたんだっけ。ハンドガンでもライフルでも、肝は同じらしい。

撃つ瞬間まで、トリガーに指はかけない。

「木に隠れながら湖まで逃げたか」

隠れてしまった一匹にこだわって、他のサハギンの接近に気づくのが遅れる。ありそうなるので、僕は素直にポルトアクシオンライフルを下ろした。

「ジョンは、いいスカベンジャーになる」

「どうして？」

「目先の獲物を気にし過ぎない。それは、得難い才能」

「それを言うなら、見えた獲物をすぐ殺せるのが才能じゃないの？」

「それは最善。最善を手には掴むには運もいる。さっき水を飲んでたタイミングが、運不運」

「……なるほど」

「最善を逃したら、次善を掴めばいい。この場合の次善は、ジョン？」

これは文字を覚えてくれるようなものじゃないけど、カレンの授業なのか。

アキを見ているとわかる。人に何かを教えるという事には、もの凄いエネルギーが必要だ。それでもカレンは、僕にスカベンジャー・ハントを教えようとしてくれている。

ありがたいな。素直に、そう思った。

「サハギンがああ木の向こうの湖に隠れてしまったから、今度は違う木の周辺からまた

出て来るかも。ああ、次は数が多くなる事もあるのかな。それと湖が近いからか、この辺りにはたくさんサハギンがいる。あそこからさっきのサハギンが出て来るのと同じくらい、遠くの方にも注意が必要」

「うん。だいたいOK」

「もしかして、他にも何かあるの?」

「サハギンは弱い。だから、それを捕食するクリーチャーがいても不思議じゃない」

「そっか。食物連鎖つてのが、ここにも」

アキが言っていた。

クリーチャーの中には、灼かれしモノまで食べてしまう悪食もいると。だからゾンビがいない地域では、そんなクリーチャーの存在を疑うべきなのだそうだ。

たしかにあれと比べたら、サハギンなんてご馳走だろう。

「2人がガソリンスタンドの敷地に入る。サハギンはお願い」

「うん。自分の役割はキツチリこなしたい」

「……それでいい」

ボルトアクションライフルを持ち上げ、じつと待つ。

ガソリンスタンドとバスを襲えそうなサハギンが出たら、それを撃ち抜けばいいだけだ。

やれる。

「来たっ！」

サハギン。

蛇のような肌のデゴボコは、ウロコというのだとアキに教えてもらった。

タアンツ！

サハギンの眉間に、赤黒い穴が空く。

「ジョン」

「わかってるー！」

サハギンに知恵があるのかはわからない。

でも一匹が木陰から出ると同時に、僕の視界の端にはまた違うサハギンがチラリと映った。

ボルトハンドルを上げる。

急いではいるが、焦ってはいない。

上げたハンドルを引くと、薬莢が排出される。

それがバスの屋根に落ちる前にハンドルを前に押し、さらに倒して射撃準備完了だ。

ボルトアクションライフルから排出された薬莢が屋根で鳴ると同時に、トリガーを引いた。

タアンツ!

「ラツシユ。でも焦らなくていい」

「銃を持って取り乱すくらいなら、走ってつて鉄パイプで殴るよ」

「いい覚悟」

やる事は、同じなのだ。

銃の操作が短縮できる訳じゃない。短縮できるとすれば狙いを定めるといふ行為だが、自分の腕を過信するつもりはなかった。

ガソリンスタンドにもバスにも、サハギンはまだ届かない。

一匹ずつ、丁寧に狙って撃ち倒す。

「……見えてるのは、ラストっ」

バスの屋根に静寂が戻った。

初夏の陽射しに晒される5つの死体は、ピクリとも動かない。

「リロード。その間は引き受ける」

「お願い」

マガジンは6つ置いてある。

その1つを空になったマガジンと交換しても、次のサハギンは現れなかった。

「お待たせ」

「軽いラツシユだった。ジョン」

「なに？」

「頼りにする。これからは」

「……僕でも役に立てそうって事かな」

「ん。どんなパーティーに入っても、ジャンスとカレンお姉ちゃんは役立たずと罵られてた」

「とてもそうは思えないけどな」

「でも、真実」

スカベンジャーの、特に男性は粗暴な人が多いらしい。

そんな人達だから、ジャンスとカレンの凄さに気がつかなかつたのだろうか。

「そして、アキはイレギュラー」

「……イレギュラー？」

「本当はいるはずのない存在」

「違う世界の人だから？」

「そう。だから、アキといると何が起ころかわからないと賢者は言った。それでも」

「うん。僕は、みんなと行くよ」

「……ありがとう」

爆発

ダアンツ！

いきなり暴力的な音に鼓膜を叩かれ、僕はガソリンスタンドに視線を向けた。

日本刀をいつでも抜ける構えで、アキが1歩の半分ほど前に。ジャンスは腰を落として、軽機関銃を店舗の入り口に向けている。

ガソリンスタンドにはよく併設されているという、1階建ての店舗。

そこから出て来たクリーチャーが、カレンのスナイパーライフルで頭部を吹っ飛ばされたらしい。

サハギンより人間に近いカタチのクリーチャーが持っていたのは、斧だろうか。

アキが笑顔で、親指だけ立てた拳を上げているのが見えた。

「さすがだね」

「でも普通のパーティーじゃ、狙撃手を連れ歩いたりしない」

「なんで？」

「スカベンジャーの目的は、売れる物を持ち帰る事」

「クリーチャーを倒すだけの人はいらないうって？」

「そうなる。スナイパーライフルは割高な弾代もかかるし。それと高額な車両を買って、所有権でモメないパーティーなんてない」

「だからジャニスとカレンは、パーティーにいらないうと」

「うん」

「……スカベンジャーって、バカばっかなの？」

「優秀な人間はエージェントになる。エージェントは、エージェントとしか行動しない」
残りカス。

そんな言葉が頭に浮かんだけど、僕だってもうスカベンジャーだ。

それにしてもどうしてカレンとジャニスは、エージェントにならなかつたんだろう。

「あのクリーチャーは、カレン？」

「初めて見る。ジャニスより少しだけ大きい人型。長い腕に、歪なツノ。ドアを開けて外に飛び出す仕草は、まるでガーディアンのようなだった。武器も使うし、油断は出来ない」

「ガーディアン？」

「エージェントがL Aの外で仕事をするエリアトなら、ガーディアンは街で仕事をす

エリート。西海岸の治安を守る、武装組織」

「それも賢者が選んだ人間が、賢者の言う通りに街を守るの？」

「うん」

サハギンは出て来ない。

スカベンジャー・ハントに慣れているカレンでも初めて見るという、体毛のない大きな人型クリーチャーもだ。

アキが周囲、特に店舗の方向を警戒して立っている。

ジャニスはいえればキャリアーを下ろして地面に伏せ、僕にはわからない作業をしていた。

ザツ、ザザツ。

バスの屋根に置かれた通信機から音がする。

見ると周囲を警戒しているアキが、彼女の肩にかけている通信機を操作しているようだ。

「……ン。ジョン、聞こえる？」

「聞こえる。つて、僕はこれの使い方を知らないや」

「そのまま話して大丈夫よ。問題なく聞こえてるわ。タンクにガソリンが、かなり残ってるらしいの。ジョン達がいる屋根の後ろに、荷物がたくさん括り付けてあるでしょ。」

そこにポリタンクが8つ結んであるから、それをここまで運んでくれない？」

「わかった。その後はガソリンの入ったポリタンクを、バスまで運ばいい？」

「そこまで頼んでいいのかしら」

「いい。ジョンは仲間。お客さんじゃない」

「カレン。……じゃあ、お願いしようかな」

「すぐ行く。ありがと、カレン。ボルトアクシオンライフル、ここ置くね」

「ん。気をつけて」

屋根の荷物は、物の上に物を置かないように結び付けられている。屋根でこうして狙撃をする時の、視界確保のためだろう。

なので、ポリタンクはすぐに見つかった。8つのポリタンクを結んでから、さらにそれを屋根の上に敷いた金網に結んでいるらしい。

中身がなければ、ポリタンクなんて銃より軽い物だ。

それを担いで、屋根の手摺りを飛び越える。

「あれ、アキがなんか言ってる？ まいっか」

ポリタンクの束を担いで2人の所まで走ると、ジャニスは作業の手を止めて笑顔を見せた。

「サングラス似合ってるぜ、ジョン。いつだったかシアターのムービーで見た、フェニッ

クスの坊やみてえだ」

「それより危ないでしょ、バスの屋根から飛び降りたりしちゃー！」

「それを怒ってたのか、ゴメン」

「次から気をつけてね。ガソリンを入れたポリタンクは重いけど、背負える？」

「こう見えても、力だけはあるんだ。大丈夫」

ジヤニスが僕にキャリアアを背負わせてくれた。そしてガソリンがいっぱいに入ったポリタンクを2つ乗せ、太いゴムバンドで固定してくれる。

それに腕を通して足に力を込めると、僕はふらつきもせず立ってた。

「おお、やるなあ」

「こんくらいはね。これは屋根に？」

「後部の荷台。運転席とを隔てる壁と金網のところ固定するわ。だから、後ろのドアの近くに置いといてくれればいいわよ」

「わかった。すぐにまた来るね」

「急がなくていいぞー」

「あの身軽さに、あの筋力。やつぱりジョンって、それなりのレベルなのかも……」

「それに銃系の技能ってか？ そんなん、すぐにでも一流エージェントになれるじゃんか」

歩き出した後、2人のそんな会話が聞こえる。

「みんながスカベンジャーなら、僕もスカベンジャーがいいな」

2つのポリタンクをバスのドアの前に置き、急いで駆け戻る。

地面の穴に長いポンプのホースを入れてあるジャニスは、半分も満たされていないポリタンクをポンポンと叩いて僕を出迎えた。

「急ぎ過ぎだつて、ジョン。まだ1つ目も満タンになつてねえぞ」

「ねえ、ジャニス。技能つて？」

「軍用デバイスが認めた、ソイツの特技さ。特殊技能。エージェント・ライセンスにそれが1つでも記載されてりや、まず一流のエージェントで間違いはねえ」

「もしかして、ジャニスは」

「運転の特殊技能があるな。カレンは狙撃で、アキは白兵戦の特殊技能持ちだ」

「なんでエージェントにならないの？」

「3人共、ガラじやねえのさ。西海岸じゃエージェントは、人類の希望なんて呼ばれる。シカゴの調査1つ、マトモに出来ねえのにさ」

「ふうん」

僕のいた街でも、ブルースに雇われている男達は大きな顔をしていた。

そんなに偉そうにするなら、ご馳走である獣肉を毎日でも狩つて来ればいいのに。そ

う思った事が何度もある。

ジャニス達も、そんな感じでエージェントを嫌っているのかもしれない。

「ジョン、次のポリタンくれ」

「はい。ガソリン入れたのはもうね」

「ああ」

8つのポリタンクを僕がバスに運ぶと、アキは仕草で戻って来るなど伝えてきた。
なのでハシゴを使い、バスの屋根に上がる。

「おかえり」

「ただいま。サハギンの様子はどう？」

「何かがおかしい」

「どんな風に？」

「カレンお姉ちゃんを食べたそうに見る。でも何かに怯えているように、ガソリンスタンドを窺っては湖に戻るのが多い」

「じゃあ……」

「たぶん、何かがいる。あそこに」

カレンが鋭い視線で見詰める店舗に、アキとジャニスがゆっくりと接近している。

僕はボルトアクションライフルを手に取りながら、何かあればここからの銃撃で援護

すべきか、それとも駆け寄ってショットガンを撃ち込むべきか、スカベンジャー・ハントの経験が少ないなりに考えていた。

「ジョン？」

「え。なにかな」

「考え込んでるように見えた」

「……ああ。ボルトアクシオンライフルとショットガン、どっちが威力あるのかわかって」
「距離による。ショットガンをここから撃つても、ガソリンスタンドのクリーチャーには1発も命中しない。でも接近した状態なら、ショットガンの散弾がすべて命中する」
「ここからボルトアクシオンライフルを4発命中させると、接近してショットガンを2発、散弾をすべて命中させるのだったら？」

「考えるまでもなくショットガン。アキとジャニスが店舗に入る。ジョンも狙撃準備」
「わかった」

アキとジャニスは店舗の裏まで確認して、それから入り口に戻ってその横に立っている。

キャリアーを下ろし日本刀を右手にぶら下げるアキと、軽機関銃を両手で構えたジャニスが頷き合う。

そのままアキはガラスの割れた入り口に姿を晒し、ドアを蹴った。

「危ないっ、アキー！」

爆発。

アキとジャニスが吹っ飛ぶのが、酷くゆっくりと僕の目に映った。

「くっ。狙撃準備。敵が見えたらぶち殺す！」

「それじゃ2人が。……狙撃は任せたよ、カレン」

バスから飛び降りる僕を、少し涙目のカレンが呆然と見ている。

アキとジャニスがいたのはドアの右。つまり、バスに近い方だ。

運が良いのか悪いのか、吹っ飛ばされたアキとジャニス入口の手前に倒れている。あれなら、店舗の中に敵がいても追撃は受けないはずだ。

アキはスカートの短いセーラー服で、ジャニスは下着が見えそうなタンクトップにホットパンツという軽装。

走りながら見る限り、出血はない。

人は地面や壁に叩きつけられると、その衝撃で意識が飛ぶ。レベルというのが高いおかげで怪我はなさそうだが、それでもノーシントーとやらには勝てないらしい。

「ジャニス、返事を！」

そう叫びながらその横を駆け抜け、アキの細い体を肩に担ぐ。

「あ、ジョ……」

「生きてるならいい。今は体を休めて。アキ、生きてるなら声を出して」
「ま、だ、死ねない、わよ」

どちらもまだちゃんと喋れないが、どうやら無事らしい。

アキをジャニスの隣に横たえる。

2人の白い肌が、土や煤で汚れてしまっていた。

「許せないな、これは」

「てった、いを……」

「逃げ、て、ジョン」

「アキの方が、言葉がはっきりしてるね。これ、使い方は知ってるよね？」

「こ、れは」

アキの手に握らせたのは、小さなりモコンだ。

「入り口に向けてC、アキがクレイナントカッて呼ぶのを仕掛ける。後は任せたよ？」

返事を聞かずに、入口に向かう。

信管を入れたCを仕掛けた僕は、両手にベレッタとソードオフ・ショットガンを抜いた。

初めてのスカベンジャー・ハントにナイフを持って行かなかった僕は、それを少しだけ後悔した。

だからそれからは腰の後ろにナイフを差しているし、同じく腰に小さなバックを着けてそこにCを入れている。

ザツ、ザザツ。

入り口の横に転がっている通信機は、まだ生きているようだ。

これも忘れられた時代の遺物。結構な値段がしたはず。壊れてなくて良かった。

「ジョン、戻る！」

「えつとね、カレン。今から敵をおびき出す。Cの起爆をアキに頼んだけど、スナイパーライフルの狙撃で片付けられるなら頼むね」

「敵はトラップまで使うクリーチャー。危険！ お願いだから、3人でバスに戻る！」

「許せねえんだよ」

「えつ……」

声が低くなっているのが自分でもわかる。

人を殺す前は、いつもそうだ。

「ジョン？」

「許せねえつってんの。アキとジャンニスを吹っ飛ばして、カレンを泣かせて、僕を怒らせた。そんなヤツ、生かしておけねえよ」

血涙

手に馴染んだベレッタ。それとソードオフ・ショットガンを握り締め、僕は店舗の入口横に立っている。

あれだけの爆発。当たり前のように、ドアは粉々だ。

深く、長く、深呼吸をした。

「許せねえ。だから殺す。男はそれでいい。……だよ、ね、父さん」

サンングラスを胸ポケットに入れ、巨大な獣の口のような入り口に飛び込む。

暗い。

でも、このくらいなら。

広い店内の奥。カウンターの向こうでドアを守るように立つ大きなクリーチャーの顔面に、ベレッタの銃弾を撃ち込んだ。

「なにっ!?!」

ここから飛び出したクリーチャーは、カレンのスナイパーライフルの狙撃で死んだ。

それなのに、このクリーチャーは銃弾を眉間に喰らってもピンピンしている。それどころか、笑みのつもりか醜い顔を歪め、僕に見せつけるように銃を持ち上げた。

ボルトアクションライフル。

「罨まで仕掛けられたら、銃なんて予想済みなんだよっ！」

僕と父さんの奥の手、Cと同じような爆発物。

そんな物を使うクリーチャーが、銃を使えないはずがない。身を隠す場所がなければ外に飛び出し、入口に陣取って撃ち合うつもりでいた。

でも、外からは見えなかつた店舗の中央には、僕の腰ほどの高さの、丈夫そうな鉄の箱のような物が置かれている。

滑り込むようにして、その遮蔽物に身を隠す。

タアンツ、チュインツ！

思った通り、遮蔽物はボルトアクションライフルの銃弾を弾いてくれた。

「ショットガン。使うのは、ミルクレイプ・チェインソウを殺した夜以来だ」

汚れた床の上に、缶ジュースが転がっている。

命中しても効果がないとわかつたベレッタをホルスターに戻し、僕はそれを右前方へぶん投げた。

タアンツ。

見事に引つかかって撃ってくれた。
シヨットガンを構えながら立ち上がる。

ボルトアクションライフルは、ベレッタのようにトリガーを引くだけで次弾を発射できない。クリーチャーもそれは良くわかつているようで、その表情はまるで焦っているように見えた。

ボルトを操作しようと、クリーチャーが動き出す。

「遅いつての」

ダアンツ！

物凄い衝撃。銃身と銃床を切り詰めてあるからか、この銃は反動が凄まじい。ブルースがミルクレイプ・チェインソウに持たせる訳だ。

散弾はクリーチャーの左胸、その少し上の肉を抉っている。

狙いがズレた!?

でも、血は出ている。シヨットガンなら、コイツを殺せるんだ。
「もう一発だつー！」

散弾とは、距離が離れば離れるほど広がって着弾するらしい。

なら、接近すればいいだけだ。

クリーチャーに駆け寄る。

「終わりだよ、バケモノ！」

カウンターの向こうにいるクリーチャー。

まだ銃撃は来ない。

僕の勝ちだ。

思うと同時に、目の前が真っ赤に染まった。

爆発音は、吹っ飛ばされながら聞いた気がする。

「があっ」

爆発物。

罨は、1つではなかったという事か。

もし数分前に戻れるのなら、浅はかな自分をショットガンの銃床でぶん殴ってやりた
い。

「ゲツゲツ」

「……笑ってるつもりかよ、バケモノ」

吹っ飛んで壁に叩きつけられたらしく、酷く背中が痛む。

「痛みはジャマだよ。どっか行け」

立ち上がる。

目の上でも切ったのか、視界が赤い。

それでも、顔を歪めるクリーチャーは見えている。このバケモノを殺すのに、支障はないはずだ。

「ゲッ!?!」

ボルトアクションライフル。

その銃口の向こうで、クリーチャーは驚いているようだ。

姿は見えないのに人間の匂いが店内にもう一つあると気づけば、驚きもするだろう。「獲物の横取りは感心しないよ、アキ」

匂いだけの人間を撃つか、見えている僕を撃つかで迷っているらしいクリーチャーを睨みながら言う。

アキが息を呑む音を聞きながら、僕はまた踏み出した。

「ゲギヤーツ!」

「……アホウが」

クリーチャーは、もう銃口を僕に向けてトリガーに指をかけている。次弾の装填に時間がかかる銃を、そんな簡単に撃ってどうするというんだ。

半身になりながら、跳んだ。

銃声。

背後の床が、弾で削られる音。

大口を開けたクリーチャー。

カウンターの上に着地して、その眉間に銃口を押し付ける。

「バアイ」

ダアンツ！

反動が軽く感じる。

頭部がなくなつたクリーチャーの体が床に倒れ伏すと、僕はいい匂いのする方向に向き直つた。

「ジョン、その目……」

姿を消していたアキが、すうつと現れる。

特に外傷はないようなのでホツとした。

「怪我は、アキ？」

「こつちのセリフね。大丈夫、ジョン？」

「目の上でも切つたみたい」

ベレッタを納めてからショットガンを折るようにして排莖し、新しい弾を2発込める。

怪我の手当てなんて、その後でいい。

「痛みはないのね？」

「うん。これっぽっちも」

シヨットガンをホルスターに戻し、腰の水筒を取る。

どんな怪我でも、まずはきれいな水でしっかり洗うのがいい。それも、父さんに教えられた事だ。

「ジャニスは？」

「カレンが来て、休ませてるわ。脳震盪だけだから、1時間も経たずに歩けるはず」

「よかったあ」

水筒を傾け、目の辺りに水を浴びせる。

頭を振って濡れた髪の水気を荒く飛ばすが、怪我をした感じがしない。血が垂れてこないし、痛みもないのだ。

「あれ？」

「どこも切れてないわよ」

「でもさつきまで、たしかに目に血が」

「……血涙」

「えつと、なにそれ？」

「人間は激しく感情が高ぶったりすると、血の涙を流したりする事があるらしいわ」

「ああ。アキとジャニスの事で怒ってたし、爆発物の罾が1つしかないと思いい込んでい

た僕自身にもかなり怒ってた。そのせいでかあ」

「かしらね。本当に痛みはないの？」

「まったく」

「そう。ならカレンと交代して、ジャニスを見てあげて」

「了解」

「お説教は、ここのお宝を漁ってからね」

「う……」

指示には従うと約束していたのに、僕はそれを無視してクリーチャーを殺しに来た。

それでアキはかなり怒っているらしい。

「じゃ、じゃあジャニスの看病をしとくね」

「お願い」

アキがCのリモコンを放る。

それをキャッチして、僕は店を出た。

ジャニスは、店から少し離れた場所に寝かされているようだ。

こちらに顔を向けたカレンに笑顔を見せ、Cを回収して2人の元へ向かう。

「カレン、アキが来てくれっつき。持ち帰る物を選ぶみたい」

返事はない。

「えっと、カレン？」

「……カレンお姉ちゃんは怒っている」

「アキもね。仕事が終わったら、お説教だつてさ」

「そりやあそうだろう。まったく、止めたのにムチャシヤがって」

「ジャニス。大丈夫？ 痛いトコない？」

「ねえよ。それよりタバコくれ、ジョン。爆発でどつか行つちまった」

言いながらジャニスが身を起こす。

それをカレンが止めようと手を伸ばしたが、ジャニスはその手を振り払った。

「タバコが葉なんだよ。アタシ達には。なあ、ジョン？」

「僕はそんなでもないって」

タバコを唾えて火を点け、それをジャニスの口元に持つて行く。

カレンは、担ぐように持つていたボルトアクションライフルを僕に渡して店に向かった。

「店の中のクリーチャーも、こんな感じのボルトアクションライフルを使つてた」

「へえ。ラッキーじゃんか。そりや今日からジョンの物だ」

「あれがあれば、今より役に立てるか」

「今だつて役に立つてるさ。クリーチャーはジョンがぶつ殺したんだろ？ ショットガ

ンの音がここまで聞こえたぜ」

「うん。アレは許せなかった。だから、僕が殺さなきゃ」

「言うじゃんか。へへっ」

「ねえ、ジャニス」

「ん？」

「死なないでね、なにがあっても。僕、強くなるからさ」

ジャニスが煙を吐き、地面に灰を落とす。

そして突然、くつくつと笑い出した。

「……笑わないでよ」

「悪い悪い。つい、な。まあ、死なねえよ。4人で爺さん婆さんになるまでに金を貯めて、面白おかしく暮らすんだからさ」

「約束だよ？」

「ああ。約束だ」

真剣な眼差しに満足して店の方を見ると、アキとカレンはバスに向かって歩いていった。

「そういうえば、サハギンがバスを狙う可能性はないの？」

「ヤツラは機械になんて見向きもしねえさ。興味があるのは、食えそうな生き物だけ。」

最初にバスの上にカレンを配置したのは、スナイパーライフルで効果的に援護するためだ」

「ふうん」

「アキとカレンはキャリアーを取りに行つたんだろ。ボルトアクションライフルよりアサルトライフルが欲しかったが、それをクリーチャーが持つてたらジョンも無事じゃすまなかつた。まあ、ラツキーだな」

「アサルトライフルって？」

「ベレッタみてえにトリガーを引くと一発の弾が出るのと、トリガーを引いてる間ずっと弾が出る。その切り替えが可能な銃だ。セミオートとフルオートって言つてな。ベレッタにもフルオートへ切り替えられるモンはあるんだが、ジョンのはセミオートマチックのみだ」

「そこにあるジャニスの銃や、カレンが構えながら歩いてる銃みたいに？」

「だな。これは軽機関銃、カレンのはサブマシンガンだ。アサルトライフルは、その中間って感じだな」

「……銃は、銃身が長いほど遠くを狙える。その分、取り回しが悪い」

父さんはそう言っていた。

「よく知つてんなあ。だからカレンはスナイパーライフルを背負つて、今はサブマシン

ガンをいつでも撃てる姿勢で歩いてるだろ」

「遠距離と近距離。中距離が、この置いて行ったボルトアクションライフルか。凄いな、カレンは」

「銃での戦闘だけなら、西海岸が一番だよ。あんなちっこいものにな。……さて、アタシ達も手伝いに行こうか」

タバコを地面に捨てて、ジャニスが立ち上がる。

ふらつきはしていないようだけど、もう少し休んだ方がいいんじゃないだろうか。それを伝えると、ジャニスは大丈夫だと言いながら笑ってタバコを踏み消した。

「バスの後ろには、まだ空きがあったよな」

「ああ。4人で食料品や日用品を積み込んで、とつとと出発だ。陽のあるうちに、クリーブランドまで進みてえ」

クリーチャーのいたお店には、たくさん食料品や飲み物があった。クリーチャーの守っていたドアの向こうには金庫という物もあって、そこにはたくさんのお金も。

それを4人でバスに運んで、僕達はクリーブランドという街に向かっている。

道路にはクルマの残骸が多い。それでも道幅は広いし道路の横にも余裕があるので、速度は今までより落ちてはいけど何の問題もなく進んでいるようだ。

恐れていたお説教も、今のところはされていない。

「どう、アキ？」

「問題なさそうよ。はい、ジョン。このボルトアクションライフルは、今日からあなたの装備よ」

「ありがとう」

「良かったなあ、ジョン。背負って持っていける武器があるのは安心だ」

「うん。それにしても、この辺はクルマの残骸が多いね」

「クリーチャーはサハギンばっかだけどな。おおっ！」

「どしたの、ジャニス？」

「アキ、パトカー発見。止めるから、中を見てくれよ」

「了解。鎮圧用のライアットガンでもあれば儲けものね。カレンは屋根で索敵。ジョンは私と、パトカーを漁るわよ」

「ん」

「わかった」

パトカー。ライアットガン。

どちらも知らない言葉だ。夜にでも、アキに訊こう。

パトカーはおそらく、見えているクルマのどれかの事のはずだ。

死角が多いので、シヨットガンを抜く。

「良い判断よ、ジョン」

「ありがと。パトカーって、どれ？」

「黒と白に塗られてて、上にランプが付いてるのよ」

「なるほど」

アキに続いてバスを降りる。

ゆつくりとパトカーに近づいたアキは、残念そうに肩を落とした。

「いや、トランクルームに入ってるかも。よくそこからライアットガンを取り出してゾンビを撃つてたじゃない、私。ゲームでだけど」

言いながらアキはパトカーのドアを開け、何かを探している。

スカートが短いから、下着が丸見えだ。

「ねえ、アキ」

「なあに？」

「それって、なんて動物？」

「え。それってどれよ。野生動物の臭いはないし、パトカーに動物なんて」

「いや、そのパンツの。かわいく描かれてるけど、動物だよねそれ」

「……い」

「い？」

アキがパトカーから上半身を引き抜いて振り返る。
顔が真っ赤だ。

そして手を振り上げて、……あれっ？

「いやあああっ！」

出合い

僕の膝の上に座るカレンが、痛む頬をぶにぶにと指で突く。

地味に痛いのでやめて欲しい。

「痛い？　ねえ、ジョン。痛い？」

「痛いに決まってるでしょ。だから突っつかないでよ、カレン」

「痛みを噛み締めて、その分アキの好感度を下げるといい。勝手にパンツを見せたくせにゴリラ並みの怪力でビンタするとか、人間の所業じゃない。アキはちよいブスな鬼、外道、鬼畜。わかった？」

「はいはい」

「くくつ。にしてもアキ、ジョンに会う前に廃墟で、衣料品はたんまり手に入れただろ。きわどくてエロいのもたくさん持ってんのに、なんでクマさんパンツなんだよ？」

「……うっさいわねえ。ジョンはまだ未成年だし、油断してたのよ」

「オマケにライアットガンどころか、ハンドガンの1つもパトカーにやなかったし」

「それは私のせいじゃないでしょ！」

衝撃。

賑やかな声を、急ブレーキの音が掻き消す。

「あつぶな。カレン、頭ぶつけなかった？」

「ジョンが守ってくれたから平気」

「危ないわねえ。どうしたのよ、ジャンニス？」

「……前を見な」

小柄なカレンを抱き上げ、通路に出る。

アキも反対側のシートで立ち上がって、フロントガラスの向こうを見ていた。

視界に入るのは状態の良さそうな大きな廃墟と、見た事もない形の大きな鉄の物体。

いや、あれはオババの家の本で写真を見た事がある。それが何かは知らないけど。

「ジャンボジェット。いえ、それよりは小さいわね。どう見ても飛べそうにないけど。

でも、空港に間違いはないわ。少し待って。私の軍事用デバイスにある、当時の地図を

……」

「そうじゃねえよ、アキ。もっとよく見ろ。空港から先の道路だ」

アキが顔を上げる。

「そ、んな。クルマが片付けられたみたい、1台も見当たらないなんてっ！」

たしかに前方には、クルマの残骸がない。

でもこの規模の古い街なんて初めて見る僕には、そのどこがおかしいのかまったくわからなかった。

「何が問題なの、アキ？」

「この世界が崩壊したのは、酷くゆつくりとよ。だからこそ人間は生き残れたんだけど、その後は往時の力を取り戻すなんて夢のまた夢。あんな風に道路をキレイにする機材も人員も時間も、今の人類にはないはずだわ」

「クルマの残骸はあつて当たり前。ないからこそ、おかしいって事か」

「そうよ。いったい誰が、こんな事を」

「なんか来た！」

「くっ、戦闘準備っ！」

カレンが1つ後ろのシートに置いているスナイパーライフルに飛びつく。

僕も座席の上の棚から、ボルトアクシオンライフルを手を取った。

通路でなるべく身を屈め、前方を睨む。

「なっ。せ、戦闘用ロボットですって!？」

「逃げるぞっ！」

クルマに人間の上半身をくっつけたような物体が、バスとは違う方向に銃を撃つ。

「何っ!？」

「空港の敷地にサハギンの死体。あ、ロボットが引き返すわね」

「どういう事だ？」

「……わかんないわよ」

誰も黙り込む。

この3人でも、どうしたら良いかわからないという状況は存在するらしい。

まず大きく息を吐いたのは、アキだ。

「少し戻って考えましょうか。ジャニス、少し手前に公園があったでしょう。その駐車場まで戻って」

「わかった。……こりや、大人しく南回りで帰った方が良さそうだな」

「そうかもね」

バスが向きを変え、動き出す。

いつもと違って会話がないし、カレンも僕の膝の上ではなく別のシートに座った。

手持ち無沙汰なので、ついついタバコに手が伸びる。それを吸い終える前に、バスは公園という場所の駐車場に到着したようだ。

「ここで一晩、ゆつくり考えましょう」

「だな。とてもじゃねえが、状況を整理できねえ」

「すぐそこにトイレもある。しばらく滞在して、クリーブランドを探ってもいい」

「まずはトイレの安全確認かしらね。ジョン、付き合ってくれる?」

「もちろん」

ボルトアクションライフルを背負い、ショットガンを抜く。

「いつでも行けるよ、アキ」

「カレンは屋根で索敵。でも、狙撃される可能性も頭に入れて注意してね。ジャンスは、いつでも逃げ出せるようにしておいて」

「……屋根にいて狙撃にどう注意しろと」

「ここにはクルマの残骸があるけど、ロボットは来ねえのかな」

「わからないから、気をつけるしかないのよ。それに行きは気にしなかったけど、クリーブランドからここまでの道には規則的にクルマの残骸があつたわ。まるで、問題なく車両は通行できるけど、非常時には盾に使うために配置したみたいだね」

「マジかよ……」

「まあ、そう感じただけで根拠はないわよ。とりあえずトイレを見るついでに、公園内を探索してみるわね。クリーブランドの状況を理解するための、手がかりがあるかもしれない」

「ジョンもいるんだ。気をつけろよ?」

「危険そうならすぐ戻るわ。行きましょう、ジョン」
「うん」

トイレは男女ともに、使用されている形跡はなかった。

アキと領き合い、公園の奥に歩を進める。

アキが前、僕がその右後方だ。

「な、なにあれ……」

思わず声が震える。

駐車場から少し進んだ場所には、信じられないような光景が広がっていた。

爛れた肌の胴体。

引き千切られた手足。

それらが、うず高く積み上げられているのだ。

少し先の地面では目の辺りに穴が空いた少女の生首が、歩みを止めた僕達を虚ろに見詰めている。

「落ち着いて、ジョン。あれは死体じゃないわ。腐臭がないでしょ」

「……本当だ。臭うのは血じゃなくて」

「オイル、ね。どうやらここは、アンドロイドの墓場のようよ」

「アンドロイド？」

「人造人間。ロボットのようなものよ」

「ロボットは、さっきの街でサハギンを倒したヤツだよね？」

「そうよ。どっちも人に作られた存在。こっちの世界に存在していたのは知ってたけど、こんなに多くのアンドロイドがどうして……」

「もつと奥に行ってみる？」

「クリーチャーの臭いはないし、そうしましょうか。でも、私が逃げると言ったら今度は従ってね」

「わかってるよ。あの時はゴメンって」

これが人間の死体でないとしても、人間と同じ形をしている。

気味が悪くて仕方がない。

いくつかの死体の山を見て回っていると、アキがふと足を止めた。

「……おかしいわね」

「何が？」

「服を着てるアンドロイドがない。五体満足のものもあるけど、すべて全裸なのよ。男も女も、子供も大人も老人もね」

「洋服は可燃ゴミ。可燃ゴミの処分場はあるけど、アンドロイドの処分場はない。それだけの話っすね」

「誰っ!？」

アキが日本刀を抜く。

声が出た方向に、僕もショットガンの銃口を向けた。が、そこにいたのは、左手しかない下半身を失った少女だ。

見ているだけで痛々しい。

「……あなたは誰？」

「ティファニーっす。ここに来る前はシカゴで、ジュニアハイスクールの生徒を演じてたっす」

「演じていた？」

「そつすよ。あ、そこな美少年。後ろのちよつと高い位置にある、ほつそりした右手を取ってくんないっすかねえ？ こんな体なんで、這い回るしか出来ないでしょう。ずつと狙ってたんっすよ、そのパーツ」

「えつと、アキ？」

「要求はこちらの質問に答えてからよ、アンドロイド」

「ティファニーっすって言うてるのにい」

人間なら即死している状態でも、ティファニーは頬をふくらませて抗議する余裕があるらしい。

振り向いて白くて細い腕を取り、地べたにうつ伏せているティファニーに近づく。

「おおつ。それっすよ、それっ!」

「ねえ、知ってる事を話してくれないかな。そうすれば僕達だって、君に優しくなれると思うんだ」

「い、今は優しくないんすか?」

「うん。動けない君の前に女性の腕や下半身を積み上げて、それを燃やしてバーベキューをするくらいにはね」

笑顔で言ってる。

交渉事は、お互いの言い分を言い合っていたらいつまでも終わらない。

どうしてくれたら、どうしてあげるのか。

それをはつきりさせるのが、早く終わらせる一番の近道だ。

「じゃ、じゃあ、話したら工具なんかも用意してくれるっすか? パーツを集めても、工具がなきゃ修理できないっす」

「私達が持つてるのなら貸すわ。クリーブランドの状況を教えてくれて、そこが安全だというなら探しに行ってもいいし」

「わおつ。話す、話すっす。何が聞きたいんすか!」

「クリーブランドの空港の前に、戦闘用ロボットがいたわ。あれは何?」

「ああ。ヘキサゴン・ステイツを守る軍門口ボつすよ〜」

「ヘキサゴン・ステイツ?」

「はいっす。クリーブランド、デトロイト、シカゴ、インディアナポリス、シンシナティ、コロンバスを結んだ線の中を領土とする、アンドロイドの国っす」

「アンドロイドの国……」

難しい話になりそうなので、考えに集中するためにタバコを啜める。

すると、見ててかわいそうになるほどテイファニーが慌て出した。

そうか。オイルは燃えるんだっけ……

「で、演じてたつてのは? ちゃっっちゃか吐かないと、狙ってたキレイな腕が黒焦げになるわよ」

「アンドロイドにはそれぞれ役が割り当てられているっす! テイファニーはジュニアハイスクールに通って、週末にはショッピングモールで買い物を楽しむっす。エアだけど!」

「エア?」

「服なんかはヘキサゴンステイツでも作ってるっすけど、アンドロイド全員が毎日着替えて、週末に買い物するほどの量は作れないっす。製造関係の仕事に就いてる人の大半は、アンドロイド関係の製造に回されてるっすから」

「……意味がわからないわ」

アキは困惑しているらしい。

あの頭のいいアキが、だ。

もしかして、ティファニーの説明が悪いのだろうか。

「そこっ、何おもむろにライターを取り出してるとすかっ!？」

「腕が惜しいならちゃんと言明しなさい。そのヘキサゴンステイツで、どうしてアンドロイド達がそんな事をしているの?」

「オクトの爺さんがイカレポンチだからっすよ!」

「……オクト?」

「シカゴにいる、ティファニー達の生みの親っす!」

「そのオクトもアンドロイドなの?」

「そうっすよ。世界をこんな風にしたのは人間。だから、人間を野放しにはしておけない。でも孤独には耐えられないから、アンドロイドを作っては大昔の人間の生活を真似させているっす」

「じゃあ、特に悪さはしてないのね?」

「まあ、今はまだそんなでもないっすねえ」

「……どういう事?」

ティファニーが一本しかない腕を動かして頬を掻く。

アンドロイドやロボットでも、肌が痒くなったりするのだろうか。

「西海岸に人間の多い地域があるらしくって、そこへの攻撃を計画してるって噂です」
「な、なんですってえっ!?!」

マスター

アキが抜身の日本刀を、ティファニーの眼前に突き立てる。

「あぶつ、あぶつ！」

「えーつと、アキ。エージェントとかガーディアンで迎え撃つとして、勝算は？」

「数によるでしょ。ティファニー、ヘキサゴンステイツが保有する戦闘用ロボットの数は？」

「5000くらいじゃないっすかねえ」

「……西海岸の人間は確実に皆殺しにされるわね、それ」

「ねえ、ティファニー。どうすればオクトってアンドロイドを止められると思う？ 僕はその西海岸で平和に暮らしたいから、攻撃なんかされたら困るんだよ」

「そんなん、オクトを殺すしかないんじゃないっすか？」

「でも、5000もの戦闘用ロボットに守られるアンドロイドを相手に」

「軍事ロボは、国境線に配置されてるっす。オクトのいるシカゴのビルには少しいるか

もしないっすけど、アンドロイドは反乱を起こしたりしないっすからねえ」

アキが日本刀を納めて考え込む仕草を見せたので、とりあえず僕はティファニーに手を伸ばした。

機械は総じて重いものだが、下半身と片腕がないので僕でも運べるだろう。

肩を持ち上げようとしたら口を押し付けられたので咬まれるのかと思ったが、どうやら攻撃するつもりではなかったらしい。

「やくん、身動きできない美少女にセクハラっすか。顔の割りに鬼畜ですねえ、少年。やんっ、先っちょはらめっつ！ つす」

「うっさいよ。三つ編みを引き千切られたくなかったら黙って」

「イエス、マスター！」

「マスター？」

「はい。伸ばされた手をペロツと舐めたっす。その時にDNAを採取、それでマスター登録完了っす。ちよろいもんっすね、マスター？」

「……ジョン。なにしてんのよ」

「いや、ここで3人で話しても埒が明かないから、バスに戻って話を聞こうと思って」
マスターとは主人の事だ。

性行為の勉強のために読んだ雑誌で、マスターと呼ばれる男の人は『ご主人様の命令

に逆らうのか、悪い子だ。お仕置きが必要だな』とか言いながら、女の人を喜ばせていた。

「……あれ？ マスターが女の人を喜ばせるなら、マスターは主人じゃない？」

「なに言ってるんだか、この子は。というかティファニー。人間を攻撃しようとしてるアンドロイドに、なんでマスター登録なんて機能が搭載されてんのよ！」

「ちよいとお待ちくださいっす。マスター、今の質問をマスターの口から言っただけっす」

「はあ。人間を攻撃しようとしてるアンドロイドに、なんでマスター登録なんて機能が搭載されてんの？」

僕が声に出すと、ティファニーが瞳を閉じる。

「マスターの問いにより、データ閲覧可能領域拡大を実行。……完了。近場ではムリっすかあ。なら、人工衛星とのリンク開始。……完了。ふむ。どうやらアンドロイドは、新しい何かを設計する事は出来ないらしいっす。修理なんかは得意であるっすけどねえ」

「それって、マスター登録機能を削除したりも出来ないの？」

「みたいっすねえ。この機能は、アンドロイドの魂に関わるパーツに組み込まれてるっすから。ちよ、マスター。三つ編みを離すっす。傲慢の金髪が傷んじやうっす」

「ねえ、ロボット三原則は？」

「なんすか、それ」

「人間を襲わない、人間の命令には従う。もう一個は忘れたわ」

「ロボットはアンドロイドを人間と認識するつす。人間が人間を襲えと命令したら、襲うに決まってるつす」

「じゃあ、アンドロイドは？ アンドロイドだって、人間に危害を加えないようにプログラムのされてるはずでしょう」

「いえ、人間とアンドロイドに上下はないつすよ？ 国際社会の常識つす」

「マジ!? ……あ、そうだ。世界が違うんだつた。こつちなら、そんな事もあり得るのかしら」

「とりあえず運ぶよ、アキ。ジャンヌとカレンも心配してるだろうし」

「そうね。でもジョン、勝手にマスター登録なんかされたのに余裕あるわねえ」

アキ達なら背負って運ぶけど、ティファニーにそこまで気を使うつもりはない。

勢いをつけて肩に担ぐと、小さな悲鳴が上がった。

「きゃつ。もうちつと優しく抱き上げろつす。つてか、お姫様だつこしやがれつすー」

「うつさい。マスター登録されたつて、僕のティファニーに対する意識が変わる事はないからねえ」

「なるほどねえ。じゃあ、行きましようか。あ、腕だけでも持つわよ」

「ありがと。しつかし重いなあ」

「乙女になんて事を言うですか、このマスターは。バツとして体液を舐めさせやがれっすー！」

「体液って……」

「アンドロイドには、多少の不純物が必要なんっす」

「へえ。砂でも舐めてるといいよ」

「そんな舐め飽きたっす！」

「舐めてたのか。ねえ、ティファニーはどうしてここに来て、どのくらいここにいたの？」

「そ、それは……」

振り回されていたティファニーの左腕が、だらりと垂れる。

「嫌かもしれないけど、話して欲しい。僕はアキと、これから向かうバスにいるジャニスとカレンを守りたいんだ。そのためには、聞いておかないと」

「……役を演じる事を拒否すれば、ヘキサゴンステイツで暮らすアンドロイドは見せしめに処分されるっす。廃棄場はここだけじゃなくて、各街の国境外に必ずあるらしいっす。毎年どのくらいのアンドロイドが処分されてるのは、想像も出来ないっす」

「なるほど」

「作って殺して廃棄。西海岸を襲うのは、資源確保の目的もあるのかしらね」

「どうなんっすかねえ」

「お、バスが見えて来た。意外と近かったんだ。じゃあ、人間とアンドロイドに上下は無いのに、マスター登録なんて機能があるのはどうして？」

「……そういえばそうね」

「ああ。マスター登録は、人間とアンドロイド間での婚姻の形っす。結婚つてすると配偶者のいる人間はアンドロイドの恩恵を受けられないので、マスター登録つて事にしてるっす」

「な、なんですつてーっ！」

その大声は、バスの2人まで届いたらしい。

死体を担いでいるようにしか見えない僕を見て怪訝な表情を浮かべていた2人が、さらに首を傾げている。

バスに戻ってシートにティファニーを立てかけると、アキが今までの状況をジャニスとカレンに説明してくれた。

「……ほう。このガラクタがジョンと結婚、ねえ」

「判決、スクラップ刑」

「いやいやいや。なんなんっすか、この殺気。マスターはもしかして、ハーレム野郎なんっすか!」

「ハーレム?」

「複数の異性を囲って、持て余す性癖と性欲を満足させる人間のクズっす!」

「精通はしてるけど、性欲は持て余してないなあ」

「マスターはいくつになるっす?」

「14」

「え。ちゃんと夢精はしてるっすか?」

「たまに。あ、でも住んでた街を出てからはないなあ。まあ、バスでの生活はいつクリー

チャーに襲われるかわかんないから緊張感があるし。そのせいかな」

「……なるほどっす」

飲み物でも飲みながら話そうという事になり、アキがガソリンスタンドの店で手に入れた缶コーヒーを渡してくれた。

ティファニーには、バスの整備のために確保してあったというオイルが出される。

重要な話なのでカレンも屋根ではなく、車内で見張りをするそうだ。

「それで、ティファニー。あの戦闘用ロボットは、アタシ達を襲うのかい?」

「それはないっすねえ。ロボットは人間の姿形なら、反対に守ってくれるっす」

「じゃあ、クリーブランドにはどのくらいのアンドロイドがいるの?」

「いないっすよ」

「はあ?」

「アンドロイドは、シカゴにしかないっす。いつかは他の街にも配置する計画らしいっすけど、人間と同じように自我があるアンドロイドに役を演じさせてるから、逃げ出そうとして見せしめのために殺されるアンドロイドや、実際にシカゴから逃げ出すアンドロイドが後を絶たないっす。ああ、そうやって逃げたアンドロイドが住み着いてる可能性はあるっすねえ。クリーブランド」

どうやらオクトというアンドロイドは、僕が暮らしていた街のブルースよりも嫌われているらしい。

「じゃあ、シカゴの街に私達が潜入するのは可能?」

「車両はムリっす」

「どうして?」

「もう輸入できないガソリンがもつたないんで、シカゴの街じゃ一般車両は稼働させてないっすから」

「じゃあ、アンドロイドは私達を見て人間だと気がつく?」

「マスターのいないアンドロイドは、臭気スキャンや体温スキャン機能が使えないっす。

そしてシカゴでマスター登録をしているアンドロイドは、オクトー1人。問題はないです」

そこで会話が途切れたので、僕は思い切って気になる事を訊いてみる事にした。

「ねえ、オクトを殺しに行くの?」

「当然よ。LAはジャニスとカレンの故郷。私にとつては、一宿一飯の恩義を受けた賢者の住む街。見過ごしたら女が廃るわ。ああ、ジョンは付き合わなくてもいいわよ。バスで留守番してて、私達が帰らなかつたら修理を終えたティファニーと西海岸を目指す」といいわ。出来れば賢者に、オクトの計画を伝えて欲しいわね」

「それは出来ない。僕もシカゴに行く」

「本気かよ、ジョン。ムリに付き合う事はねえんだぜ?」

「嫌だ。3人は、僕が守る」

ガソリンスタンドでアキとジャニスが吹っ飛ばされた時、僕は心臓が飛び出してしまいうのではないかと思うほどに驚いた。

次に湧き上がった感情は、目も眩むほどの怒り。

3人だけを危険なシカゴに行かせるつもりなんて、これっぽっちもない。

「そしてマスターを、ティファニーを守るつす。ミニスカ黒髪、提案があるんつすけど」
「ミニスカ黒髪つて。アキよ。何?」

「オクトを殺しに行くなら、ボルトアクシオンライフルやダブルバレルのソードオフ・シヨットガンなんかじゃお話にならないっす。クリーブランドで、武器なんかを探さないつすか？」

「そうね。軍事ロボットが私達を襲わないなら、そうするべきだとは思うわ。最低でもジョンにアサルトライフルと、軍事ロボット用に対物ライフルが欲しいわね」

「軍事ロボやアンドロイドの治安部隊も相手にするだろうから、パルスガンも人数分欲しいっすね」

そして具体的な計画だが、まずはこの公園を離れるのを何より優先するらしい。

ここにはは見せしめに始末したアンドロイドを、シカゴの治安部隊が捨てに来るかもしれない。貴重なガソリンはその部隊が戦闘車両を運用するためにのみ使われている。万が一にも発見される訳にはいかないという判断だ。

なので、出来るだけ急がなくてはいけない。

ポリタンクを載せるキャリアーにティファニーを縛り付け、僕が背負う。

いつものキャリアーを背負うのは、ジャニスだ。

アキは姿を消してエリー湖に水のサンプルを取りに行き、カレンがバスに残る。

「そんじゃ行くか。必要なパーツだけを手早く掻っ攫うぞ。ジョン、ティファニー」

「だね」

「ホントは厳選したいっすけどね〜」

キャンプ地の夜

ティファニーが失っている右腕は確保してあるのもう必要ないのだと思っていたが、どうやら1本あればそれでいいというものではないらしい。

右腕が1本に、丸ごとの女性用下半身が2つ。さらに左右の足も2本ずつ背負われ、ジャニスを見るからに辛そうだ。

「代わろうか、ジャニス？」

「……こ、こんくれえ、屁でもねえさ」

「ならその足も取るつす、ジャニス」

「うるせえポンコツ。これ以上ワガママ言うと、エリー湖に沈めちまうぞ！」

「ケチンボつすね〜」

「ティファニー、時間がないんだ。1秒でも早くビーチウツドって地域の方向に回り込んで、クリーチャーの少ない場所を探してからキャンプ地を決めなきゃいけないんだから」

「仕方ないっすねえ。なら、これだけでガマンするっす」

「行こう、ジャンス」

「おう。しかしこんな重いのが仲間になって、バスは大丈夫なのかねえ」

「キャンプ中はマスターとティファニーが、そこらのクルマの残骸から部品を取ってバスを改造するっす。今より頑丈にして走行性能も上げるから、気にしないでいいっすよ」

そんな話は聞いていないが、可能なら是非ともやつてもらいたい。

まだそこまで話し合っていないが、シカゴへの潜入が困難だったり、潜入が露見して治安部隊の戦闘車両に追われるような状況になれば、バスの性能は少しでも良い方がいいだろう。

バスの車内に荷物を下ろすと、ジャンスはすぐ運転席に座ってエンジンを始動させた。

「ああつ、重かった。行くぞ。東に少し戻って、広い道をめつけたら右折すりゃいいんだよな？」

「お疲れさま。そうね。湖のそばなら水には困らないけど、サハギンの襲撃が鬱陶しいと思うわ。それに、クリーブランドの中心部から遠いし」

「あいよっ」

バスが動き出す。

ティファニーは座席ではなく床に胴をついて、嬉しそうに持つて来たパーツを点検している。

「アキ。このバスなんだけど、ティファニーが頑丈にして走行性能も上げてくれるって」「ええっ。あなた、車両の改造なんて出来るのっ!?!」

「データベースにある既存の改造だけっすけどね。新たな設計は出来ないっすよ」

「そのデータベースは、どのくらいのものなの?」

「当時のインターネットのほとんどっすねえ」

「ええっ!?!」

「それって凄いの、アキ?」

「うーん。世界が違うから、断言は出来ないわ。でもね、私が知っているインターネットというのは、神様の図書館みたいなモノなのよ。情報が正確である保証はないけど、それで調べられない事なんて本当に専門的な知識の、とても詳細な情報だけ。それが画像や映像まで閲覧できるとなれば、ティファニーは今の人類の誰より腕の良い技師で、並ぶ者などない学者と言ってもいいわね」

「へえ。凄いんだねえ、ティファニーって」

「どうだ!」

そう言わんばかりの表情でティファニーが僕を見上げる。

とても誰より腕の良い技師にも、誰より知識を蓄えている学者にも見えないので、とりあえず頭を撫でておいた。

肌の手触りも、髪感触も人間と変わらない。少し下か同年代の女の子にしか思えないのだ。

「ティファニー、服は？ ジョンの前で全裸、羨ましい」

「そうは言ってもカレンたん。このまま服を着たら、オイルは付くし剥き出しのパーツで生地を傷めるしで大変な事になるっすよ」

「なら、こうすればいいのよ」

アキが荷物をゴソゴソと漁って取り出したのは、いつもアキとジャンスが着けている上半身用の下着のような物だった。

「じゃーんっ。カレン用の水着！ 19歳とジュニアハイスクールの生徒なのにピツタリな不思議っ！」

「アキ、クロス……」

「ぶははっ。それなら安心だな。道幅のある通りをめつけたから、右折すんぞー」

水着が何かは知らないが、形からしておそらく下着のような物だ。

それより今までは湖沿いを進んでいたので建物は少なかったが、街に入れば建物がた

くさんあるはず。そちらの方が気になる。

ジャニスの横に移動してタバコに火を点け、ジャニスに啜えさせながら初めて見る街並みを観察した。

「凄い。損傷の少ない廃墟が、こんなに」

「それでもクリーブランドの中心からはだいぶ離れてるはずだからな。建物もまだシヨポイんだぜ」

「じゃあ、中心部は……」

「ああ。ビルや店舗がたくさんあって、お宝の山だろうな。見なよ、右の店だ。シヨウウインドウの中に、当時の商品がそのまま残ってらあ」

「あれは、洋服だね」

「銃どころか、戦闘車両まであるんじゃないやねえかこりゃ」

「そんな簡単なはずないじゃないっすか。軍関係の建物や警察署は、ヘキサゴンステイツの治安部隊が搜索した後のはずっすよ」

後ろから、ティファニーが言う。

「じゃあ、どこから銃を調達しろってんだよ!？」

「この辺りはそうでもないっすけど、クリーブランドの中心部はかなりの激戦区だったはずっす。なんせ当時はマスターの言うクリーチャーがどこからともなく溢れ出し、こ

の辺りは地獄のようだったみたいですから。そんで生き残った人間が一息ついたら、オクトの軍事ロボとアンドロイドが人間狩りを始めたんすよ?」

「当時の軍には、軍事ロボもいたでしょうに。どうしてこの辺りの人間は狩り尽くされたのかしら……」

「アンドロイドは、人間に紛れ込むのが得意ですからねえ。最初期に作ったアンドロイドを、人間側の拠点に紛れ込ませてたんじゃないっすか」

「でもさ、その頃のアンドロイドは、どうしてオクトに従ってたんだろ。人間を殺せと言われて放り出されても、人間に助けを求めれば殺されはしないよね?」

「アンドロイドは既存の物を作るのは得意って言ったはずっす」
「言ったね。それで?」

「アンドロイドを拉致して爆弾を取り付けてから売買する、人間の犯罪組織。その手口、アンドロイドの頭部に埋め込む爆発物のデータが残ってたっすよ。さすがに建国後に作られたティファニー達みたいなアンドロイドには、取り付けられてないっすけどね」
「……クズだねえ。当時の人間も、それを利用したオクトも」

人間にもアンドロイドにも、悪人はいるという事か。

「ねえ、ティファニーは銃の修理なんかも出来るの?」

「もちろんっす。じやなきや装備を整えるなんて言わないっす。損傷にもよりますが、

同じ銃がいくつか必要になるっすね」

「ティファニー。あなたもしかして、軍専用デバイスを修理できたりする？ 損傷がこれくらいのを、5つ集めてあるんだけど」

「アキが何も無い場所から軍専用デバイスを取り出す。アイテムボックスとかいうやつだろう。」

「ティファニーはギョツとしたようだがそれには触れず、黙って片手で軍専用デバイスを受け取った。」

「ん〜。可能っすね。マスターの装備なら、気合入れて直すっす」

「それ、3つは通信機能が残ってるわよね。ジャニスとカレンのは通信機能が死んじゃってるの。その部品を使って、それも直せない？」

「いけるっすよ〜」

「おおっ。やったな。あの重い通信機を担いで歩く必要がねえなら、ゴミ拾いみてえな武器集めも早く終わりそうだ」

「なら右手をくつつけたら、軍専用デバイスから直すっす」

「ありがたいけど、いいの？」

「武装の充実が最優先っすからねえ。クリーブランドの中のクリーチャーは軍事ロボッツトが駆除するっすけど、キャンプ地は普通に襲撃されるし」

「敵地の方が安全って事か。変な状況だね」

キャンプ地は夕方には決まり、右手を取り戻したティファニーはすぐに軍事用デバイスの修理に取り掛かった。

なんでも耳に付けるインカムとかいうのが当時はあつたらしく、明日の朝から探索に出るアキにそれを見つけたら持ち帰ってくれと頼んでいる。

一緒にゴハンを食べられないのが残念だと僕が呟くと、ティファニーはいつもと違う優しい笑顔で『その言葉だけでおなかがいっぱいだ』と言っていた。

バスに乗る人間が1人増え、そのティファニーの作業スペースも必要なので、夕食後にバスの前部と後部の荷台を隔てていた鉄板とフェンスは取り除いてある。

今の見張りはアキ。次が明日アキと探索に出るジャニスで、その次が僕だ。

「ふうっ」

「眠れないっすか、マスター？」

「ん。なんか、状況に書いて行けてなくてね。ティファニーは寝ないの？」

「アンドロイドは眠らない。だから夢も観ないっす」

「……そっか」

「でも、夢が出来たっす」

「へえ。教えてくれる、その夢？」

「死んだと思つてたのに生きてて、3000の夜を1人で数えたつす。絶望してたはずなのに、今は笑つてる。だからずっと、死ぬまで笑つていたいつす」

「……オクトを片付けたら、もつと楽しい毎日になる。ねえ、もう1つだけ訊いていい？」

ティファニーが小さく笑う。

質問の多い奴だと、呆れているのかもしれない。

「なんつすか？」

「どうして、僕をマスターに？」

「そうですねえ。……マスターが、スペシャルだからです」

「スペシャル？ ゴメン、僕は言葉をあまり知らないんだ。アキに教わつてはいるんだけれど」

「時間が流れ過ぎて、当時の言葉は古代語のようになってるつすからねえ。いつか話すつす」

「アキもハッピーニューイヤーの意味は半年後まで教えてくれないつす言うし、みんなして意地悪だなあ」

「ハッピーニューイヤーの意味つすか？」

「うん。言つてなかつたつす。僕の名前は、ジョン・ハッピーニューイヤー。ハッピー

「ニューイヤーの意味を知るために暮らしていた街を出て、アキ達に会ったんだ」

「そうっすか。半年後が楽しみっすねえ」

「やっぱり教えてくれないか」

「アキの楽しみを取っちゃ悪いっすから。……その時、ティファニーも一緒ならいいな」
「一緒に決まってるじゃん。西海岸で、スカベンジャー・ハントをして暮らそう。きつと楽しいよ」

「スカベンジャー・ハント？ ……ああ、なるほど。ふふっ、そうっすね」

いつの間にか、僕は寝ていたらしい。

「ジャニスに揺り起こされ、2人におはようを言ってからバスの屋根に上がろうとする
と、ティファニーに軍用デバイスを渡された。」

「それと自分のボルトアクションライフルを持って屋根に上がる。ソードオフ・シヨットガンとハンドガンのホルスターは、付けっぱなしで寝ていたらしい。」

「まずボルトアクションライフルの装填を確かめてから、水筒の水を含ませたタオルで顔を拭く。」

「星がキレイだなあ…… ってそうじゃない。軍用デバイス」

「軍用デバイスはファストガード付きのレーザーグロブから、エルボーガードまでの途中にディスプレイというのが取り付けてあり、左腕にベルトで腕に固定できるように

なっている。ディスプレイの裏にあたる部分も、ベルトでしっかりと固定した。

勉強のためにディスプレイの文字を読みたい気持ちを押し込め、周囲の闇に目を凝らす。

「ただっ広い駐車場のど真ん中。クルマの残骸も少ない場所だから、見張りがしやすいな。さすがだ」

「そうっすねえ」

「ティファニー!？」

「はいっす」

「どうやってここまで」

「足がなくても、ないなりに動けるっすよ。隣、いいっすか?」

「もちろん」

「マスターは、夜目が利くっすね」

「いや。そうでもなかった、はず……」

ティファニーは、特に用事があつて上がつて来たのではないようだ。

お互いのいた街の事や、今までの旅の事。

たくさん話したので、見張りの時間はあつという間に過ぎた。

2時間の仮眠を取ったら、力仕事が続いている。

車内に戻って毛布を被ると、なぜか今度はあつさりと眠りに身を委ねる事が出来た。

宝物

「ジョン、朝よ」

「・・・ん。起きた」

「呆れるくらい寝起きがいいわねえ。あら、もう軍事用デバイスを着けてるんだ」
「うん。これでいいんだよね？」

「そうよ。そうしておけばジョンの行動を軍事用デバイスが読み取って、そのうちレベルを表示してくれるようになるわ。技能があれば、それもね」

「ないとわかってるけど、ほんのちよつと楽しみ」

朝食を摂ると、アキとジャニスはすぐに探索に出る準備を始めた。

目的はクリーブランドの繁華街なのだが、そこまでの道にも偶発的な戦闘などで死んだ当時の兵隊がいたはずなので、時間はいくらあっても足りないらしい。

カレンとティファニーはバスの屋根で、それぞれ見張りと自身の修理だ。

「テスト。どう、みんな。聞こえる？」

アキの声は、僕が腕に着けている軍用デバイスから聞こえている。ティファニーが修理してくれた軍用デバイス通信機能は、問題なく使用可能らしい。クリーチャーを呼ぶ危険もあるからと音は小さくしてあるが、はつきりと言葉が聞き取れる、

僕はティファニーの指示でバスの屋根から見えるクルマの残骸を漁りに来ているので、繁華街へと歩き出したアキとジャニスとの距離はすでに遠くなっていた。

「カレン。感度良好」

「こちらジョン。問題なく聞こえるよ」

腕のデバイスプレイに顔を寄せて言う。

「よしよし。これで二手に分かれてても、少しは安心できるな」

「そうね。何かあったら、すぐに連絡するって事で。ジョン。危なっかしいけどカレンも運転は出来るから、何かあったらバスを呼ぶわ。あまり離れないでね？」

「うん。まずは鉄集めだから、この駐車場から出ないと思う」

「ティファニーが朝ごはんの時に言ってたあれね」

「ベッドルームも作るから、期待してていいですよ。アキ」

「……呆れた。軍用デバイス同士の通信にも割り込めるの、ティファニーは。じゃあ、そつちも気をつけてね」

「アキもジャニスも、ムリだけはしないで」

「あつたりまえだよ」

「そうね。まだまだ行けるはもう危険、その心構えで進むわ」

バスから最も近いクルマの残骸。

その運転席は、車体がひしゃげているせいが開かなかつた。

「うえっ。いきなりの予想外」

「そんな時は助手席つすよ、マスター」

「なるほど。了解」

「革手袋はしたつすね？ 残骸の車内には割れたガラスなんかが多いんで、素手だと血だらけになるつすよ」

「うん。右は厚手のをちゃんと着けた。左は軍用デバイスがあるから大丈夫」

助手席のノブに手を伸ばす。

握り込んで引いても、ドアは開かない。

でもこのクルマには4つのドアがある。いや、最後部も入れれば5つだ。ガチャガチャとノブを引いて回ると、最後部のドアが開いた。

「……よし」

「いいつすね。1を聞いて2を知るのには才能つすよ、マスター」

「おだてても何も出ないよ。えっと、このトランクの床に収納されてるタイヤが必要な

んだよね?」

「それはハッチバックだから、ラゲッジスペースつすけどね」

「楽しみだなあ、性能が上がったバス」

「アキとジャニスに途中に修理工場なんかがあれば、工具を持ち帰るように頼んであるっす。それがないとキツイっすよ」

「そっか、あるといいなあ。……よいしょつと。タイヤと、剥き出しのまま入ってるジャツキに。タイヤレンチだけ、これ?」

「そうっすね。じゃあ、タイヤとクルマの近くに落ちてるボンネットを、バスまで運ぶっすよ」

「うん」

タイヤとボンネットを同時に持つのはキツイ。

でも、だからといってタイヤ1つだけ持って運ぶのは非効率的だ。

近くにある大きなクルマのトランクからタイヤを取ろうとしたが、今度は開くドアが1つもなかった。

「くっそ。もつたいない」

「マスター、運転席のガラスを見るっす。下の方に小さな突起がないっすか?」

「……ある」

「それがカギつす。上に引つ張れば、ドアが開くつすよ」

「ガラスを割ればいいのか。了解」

シヨットガンを抜き、銃床をガラスに叩きつける。

カギを引つ張ると、あつけなくドアは開いてくれた。

「うゝん。都市迷彩コンバットスーツを着てサングラスをした美少年が、ソードオフ・シヨットガンの銃床でガラスを割つて黒塗りのワゴン車を開ける。画になるつすねえ」
「それは是非とも拝見したいねえ。こつちは今、駐車場を出た。住宅街に続く、あまり大きくない道路だ。これじゃ、修理工場はしばらくくないね」

「クリーチャーは、ジャニス？」

「臭いはないわね」

僕の問いに答えたのはアキだ。

それでも気をつけてと伝えて、トランクを開けるレバーを探す。

3つ目のレバーを引くと、クルマの後ろから鉄の軋む音が聞こえた。

いい物がありますようにと願いながら、トランクまで歩く。

「へっ？」

「どしたつすか、マスター？」

「んーと、たぶんバイクつてヤツだと思う。ついこないだバスに置いてあつた雑誌で見

て、アキにスペルを教えてもらった」

「……マジっすか」

「待ってね。僕1人で降ろせるか試す」

「うっはーっ。バイクだつてよ、アキ。ジョン1人で降ろせなきゃ戻ろうぜ。可動品なら、お宝なんてモンじゃねえぞ！」

「ジョン。本で見たのと比べて、足りない部分とかはないの？ タイヤとか」

「ザツと見た感じじゃ、構成部品は足りてる。でも、雑誌のバイクとは感じが違うかなあ」

バイクは、広いトランクの右端に結びつけて固定されている。

「この鉄の板を使って降ろすのか。……ガタンつてなりそう」

「ヤバイって、アキ。1人で作業して、ジョンが怪我したらどうすんだよ！」

「ああもう。ジョンが心配なのは本当だろうけど、ジャニスもバイクを見たいんでしょ。わかったわ。戻るわよ、もう」

「よっしゃ。ジョン、少しだけ待ってろ。すぐに走って戻って手伝うぞ」

「わかった。ゴメンね、アキ」

「いいわよ。一目でも見なきゃ、ジャニスが探索に集中できそうにないし」

さっきのクルマに戻り、タイヤレンチを手に取る。

そのまま僕が歩き出すと、軍事用デバイスからティファニーの素つ頓狂な声が聞こえた。

「ありや。なにやつてるつすか、マスター？」

「ひっくり返つてるそのクルマから、タイヤを外そうと思って。軍事用デバイスに、やり方は載つてるんでしょ？ バイクがあつたクルマのトランクからタイヤを取ろうと思つてたんだけど、なさそうだからさ」

「タイヤを両手に一つずつ持つためにつすか。感心つすねえ。マスターは効率厨つす」
「なんとなくだけど、バカにされてる気がする……」

タイヤの外し方は軍事用デバイスのページを見るまでもなく、ティファニーが口頭で説明してくれた。

要はタイヤを固定しているボルトというのを、タイヤレンチで外せばそれでいいらしい。コツは一つのボルトを数回転ほど緩めたら、対角線のも同じくらい緩める事。

2つのタイヤを外し終わった所で、アキとジャニスに戻つて来てくれた。

「おお、マジバイク！」

「ジョンがウソなんて言うわけないでしょ。……それにしても状態がいいわね。そのまま動くんじゃないの、これ？」

「おっし、降ろしてエンジンかけてみるぞ。ジョン、手伝え」

「うん。でもまずは背中からキャリアーを下ろそう、ジャンス。そのままじゃトランクに2人は入れないよ?」

「おお、悪い悪い」

アキの手も借りて、慎重にバイクを降ろす。

僕には乗り物の知識なんてこれっぽっちもないが、このバイクならバスより速く走れるんじゃないかという予感のようなものを感じた。

「なんだ。メーター系が何一つ付いてねえぞ、これ」

「こんな美品なのにね。組立ての途中だったのかしら」

「単にレース用だったんじゃないっすか、それ」

「レース?」

「クルマやバイクで速さを競い合う競技っすよ、マスター。素人同士のレースなら人より速く走るために少しでも車体を軽くしようと、燃料計なんかを外す事も多かったみたいっす」

「スタンドがバイクに付いてなくて、地面に置くようになってるのもそれが理由か。ティファニー?」

「そうなるっすねえ。データベースのカatalogに、そのバイクを発見。SS250R・カスタム。オフロード仕様の間違いないっす。市販されてたフルカウルのオンロードバ

イクを買って、それをわざわざオフロード仕様で改造してつすから、趣味でレースに出てた人のバイクつすねえ。金持ちの道楽つす」

よくわからない。

でも、朝の陽を浴びる白いバイクが、とてもカッコイイのはたしかだ。

「お、ジョン。目が輝いてるな。もし動くようなら、これにはジョンが乗るか?」

「ええつ、いいよいいよ。そんなの悪いって」

「気になるんだろ、バイク?」

「……そりゃ、まあ」

「なら決まりだ。アタシは、バスを運転しなきゃなんねえんだ。カレンじや変な体勢にならなきゃ足が届かねえし、アキは白兵戦をやらせりやバカみてえに強いのに、バスの運転も出来ねえくれえドン臭いからな」

「はったおすわよ、ジャンス。……これくらいの大サイズのバイクならバスに積めるし、練習してみても乗りこなせそうならジョンが使うといいわ。ジャンス、エンジンが動くかたしかめて。早く探索に戻るわよ」

「あいよっ」

祈るような気持ちで、エンジンをかけるジャンスを見詰めた。

ジャンスが日焼けした足で何度か部品を蹴ると、眠りから目覚めたようにエンジンが

始動する。

「やったっ!」

「へっへー。今日から、これがジョンの愛機か」

「練習して、危なっかしくなったらよ?」

「なあに、運転なんてある程度までは慣れた。技能を得るには、また別のものが気になるけどな」

「ジャニス。運転が技能として軍用デバイスに認められるのに、必要なのは何?」

「あらゆる意味での才能、素質だね」

「えっと、あらゆる意味って?」

「クルマで言うなら、ミリ単位。いや、それ以上に細かいアクセルやブレーキの踏み込み操作。それを的確に使うための判断能力。他にも機械に対する考え方や知識で、車体に触れた時なんかの音も違う。軍用デバイスに目はないんだ。だから音や振動、ハンドルを握った手の筋肉の動きを読み取ってジョンの行動を判断する。機械を雑に扱う人間に、運転技能なんて出ないさ。こっち来てみな。こことここを持って。そう、それでいい。いくぞ。・・・ほら」

バイクにはタイヤが2つしかない。だから、支えていないと倒れてしまう。

僕だけでエンジンを切ったバイクを支えると、すぐにでもシートに跨ってみたい欲求

が湧き上がった。

その気持ちを押し込め、万が一にも倒したりしないよう、しっかりとハンドルを握る。
「雑に扱う事はないだろうけど、他は自信ないなあ……」

「大事なものは練習だよ、練習。軍用デバイスに技能が表示されなくなつて、バイクには乗れるんだ。少しでも巧くなりたいのなら、練習しかないね」

「頑張つて練習に使うガソリンも集めよ」

「そうしてくれ。そんじゃ行こうか、アキ」

「ええ。ジョン、バスの前にスタンドを運んでおくからね。倒したりしそうななら、カレンに手伝つてもらうのよ？」

「うん。わざわざ戻つてくれてありがとう」

2人を見送り、バスの方向にバイクを押しす。

「動いたっ！」

「そりや押せば動くつすよ。バイクつすから」

「僕1人で動かしたのが重要なんだよ！ わかつてないなあ、ティファニーは！」

「……はあ。押して動いただけで、このはしやぎつぷり。先が思いやられるつす」

男の子

バイクをバスの近くに置かれたスタンドに停め、タイヤを取りに戻る。今の僕に与えられた役割は、バスを改造するのに必要なクルマの鉄やタイヤを集める事だ。

そう自分に言い聞かせたというのに、10歩も歩かないうちに僕は振り返ってバイクを見た。屋根の上のカレンとティファニーが、呆れたような表情をしているのも見える。

「意外。ジョンは学ぶ事が好きな少し変わった男の子で、物に執着するイメージはなかった」

「男の子はバイクとか好きっすからねえ」

「……もしかして、ジョンはムツツリスケベ？」

「かもっすねえ。おそらくあのハッチバック車のラゲッジスペースに入ったら、これ幸いと1人で処理をおっぱじめるっす」

「ティファニー、ムービーの録画機能は？」

「バツチリ生きてるっす」

「最高級オイル10ガロン」

「請け負ったっす！ 青き性の暴走を余すところなく切り取って、白日の元に晒してやるっす！」

「しないよっ!?!」

まずはひしゃげてひっくり返っているクルマから、タイヤだけを外して回る。

一か所に集めて置いたそれをバスのそばに運び終わると、アキから最初の武器が見つかったとの報告が来た。

「アキ、それは？」

「バレルの曲がったアサルトライフル」

「……いらない」

「カレンが使わなくても、ジョンが使うでしょ。もう一丁見つけて、ニコイチ修理できたらだけど」

「修理工場はどうっすか、ジャニス？」

「まだねえなあ」

「工具なら、ジョンのバイクが積んであったクルマにたくさんあったじゃない」

「欲しいのはボンネットを切ったり、ボルトを通すための穴を開ける工具っすよ」

「そんなの、私とジャニスだけで運べるの？」

「物によるさ。判断はアタシがするから、とりあえず修理工場を見つけるのが先だね」

「了解。ジョン、水分はちゃんと摂取してね？ これから暑くなるから、こまめに水分補給する癖を付けなきゃ」

「うん。ちゃんと水を飲みながらタイヤを集めてるよ」

覚悟していたクリーチャーの襲撃がないので、思っていたより作業は進んでいる。

出来れば、お昼ゴハンまでにタイヤだけでも必要量を集めてしまいたい。

昼が近くなるにつれ、気温はドンドン上がっていく。疲れを感じたら汗を拭い、バイクを見ながら水筒の水を飲んだ。

「マスター。そのタイヤを運んだら、次は取れてるボンネットやドアを集めるっす」

「はーい。タイヤは終わったか」

「その前に昼食」

「こつちもお昼ごはんにしましょうか、ジャニス」

「やつとか。今んとこ、アサルトライフルが1にサブマシンガンが2、ポンプアクションのショットガンが1だな。インカムは2か」

「全部メチャクチャに壊れてるけどね。こんなの、本当に直せるのかしら」

お昼ゴハンはアキとジャニスが持って行った物と同じ、パンに野菜とお肉を挟んだお

弁当だ。

驚いた事に、使っているのはすべて缶詰。

ガソリンスタンドの店でたくさんの缶詰を手に入れたので、たまにならこんな贅沢も出来るらしい。

「美味しいね、カレン」

「夜はサハギンの塩焼き。そっちのが楽しみ」

「サハギン好きだねえ。僕もだけど」

「肉の方が美味いに決まってるなあ。なあ、アキ？」

「お米があればなんでもいいわ。バスに帰ったら、まずはお米を炊くわよ」

「このライス中毒者め」

お昼ゴハンが終わってからは、また黙々と材料集め。

タイヤは外したりトランクから下ろしたりしなきゃならなかったけど、ボンネットやドアは元から取れているのを探して運ぶので少し楽だ。

「マスター！」

「あれ、軍用デバイスの通信じゃない？」

「こっちつす」

その声に振り向くと、上下水着姿のティファニーが裸足で手を振りながら駆けて来る

のが見えた。

「もう修理が終わったの!？」

「マスター登録してリミッター解除したアンドロイドなら、このくらい朝飯前っす!

それよりどうっすか、このビキニ! 下はなんと、Gストリングっすよ!？」

「へー。で、手伝ってくれるの?」

「……枯れてるっすねえ。はいっす。ティファニーがボンネットやドアを引っぱがすので、マスターはそれを運ぶっす」

「引っぱがすっす、素手で!？」

「モチのロンっす!」

そう言うとティファニーはクルマの残骸に歩み寄り、ドアに手を、車体に足をかけて、いとも簡単に鉄製のドアを引き千切った。

「凄っ!」

「ドンドンいくっすよ!」

四肢を取り戻したティファニーの活躍で、作業は急ピッチで進む。

そのおかげでアキとジャンスが戻る前に、ほとんどティファニー一人で必要量の鉄板を集め終わってしまった。

「……僕、いなくてもいいじゃん」

「にやはは。マスター、軍専用デバイスをティファニーに差し出すようにして欲しいです」

「いっしょ？」

「はいっす。そのまま少しだけ動かないでくださいっす」

何をするのだろうかと思って見ていると、ティファニーの左手の人差し指が割れ、小さな機械が現れた。

「なにそれ？」

「これを、軍専用デバイスにこうっす！」

指先にあたる部分が、軍専用デバイスのディスプレイ部分に接続される。

目を閉じたティファニーがブツブツ呟くのを見守っていると、指は軍専用デバイスから離れて元のほっそりした人間の人差し指に戻った。

「で？」

「マスターの軍専用デバイスに、バイクの運転知識を得られそうなムービーを入れておいたっす」

「おおっ。ムービーって、動く写真だよね？」

「そうっすよ。ここからの作業はティファニーに任せて、マスターはそれを見て勉強しておくっす」

「そんな。それは申し訳ないよ」

「手伝うつもりなら、せめて素手でドアを薄い鉄板に加工できないとつす」

「すいません、ムリです」

「なら、大人しく勉強しておくつす」

「……わかった。カレンと見張りを交代しながら見ておくから、軍用デバイスの操作方法を教えて」

ムービーの再生や停止、巻き戻しなんかの操作方法を教わり、バスの屋根に上がってカレンと見張りを交代する。

両足を取り戻したので明日からティファニーは、単独で探索に出るそうだ。

バスの改造に必要な物は、自分で集める事にしたらしい。アキとジャニスが思ったよ
り武器を発見できないので、気を使ったのだろう。

危険だから僕も行くと言いかけたが、そうなるかとカレンが一人でクリーチャーに襲わ
れる可能性があるのと言葉を飲み込んだ。

素手でクルマのドアを引き千切るティファニーと、小柄で得意武器がスナイパーライ
フルのカレン。どちらと一緒に行動するべきかは、僕にだって判断できる。

「ジョン、おかげで休めた。交代」

「うん。じゃ、ムービーを再生つと。……なんだこれ、交通ルールの基礎知識？ 僕がバ

イクで走るのは荒野と廃墟だから、これは飛ばしていいかな」

「それだとジョンは、西海岸でバイクに乗れない」

「そうなのっ!?!」

「西海岸は、標識なんかがそのまま残ってる。管理局で世界が崩壊した当時と同じ実技テストに合格しないと、街での運転は許されない」

「なら、交通ルールつてのも覚えなさいといけないのか。大変そうだなあ」

「ジョンなら大丈夫」

アキとジャニスは、クリーチャーに出会う事もなく無事に帰還した。

ロボットも見かけなかったそうなので、まだヘキサゴンステイツに入っていない区域なのかもしれないとティファニーは言っている。

焼いたサハギンと大盛りライスを食べて眠り、僕とカレンは朝からまたお留守番。

それから5日ほどは、何事もなく過ぎた。

たまに来るクリーチャーは、エサを求めてずっと歩き続けているらしい灼かれしモノくらい。

おかげで、僕の交通ルールの勉強はかなり捗った。それだけでなく、ちよつぴり荒つぽい運転の知識も。

「ジャニス。今日はよろしくね」

「任せな。せっかくの休みだからねえ。見張りはティファニーがしてくるって言うし、思う存分バイクの運転を練習しな。最初は見ててやるからさ」

「うん。ついに乗れるんだね、僕」

今日はアキとジャンスの探索も、2日前から始まっているティファニーのバスの改造もお休み。僕とカレンは疲れてないからいいと言ったけど、見張りはティファニーがしてくれるらしい。

なので、僕は初めてバイクの運転をする事になった。

「嬉しそうねえ、ジョン」

「女より機械が好き、とかだとヤバイ。ティファニーは新品未使用の、性交渉可能な下半身を自分に移植してる」

「マジか!？」

「主人の性的サポートもアンドロイドの嗜みっすよ〜」

「いらぬいらぬ」

ティファニーは屋根の上で不満そうに口を尖らせるけど、必要ないのだから仕方がない。

バイクに跨がり、まずはエンジンをかけた。

「おおっ」

「初めてのキックスタートで成功か。やるなあ、ジョン」

「でもムービーで見ると自分でやるのじゃ、やっぱり違うねえ。動かしていい、ジャニス？」

「いいよ。好きに動かしな。コケて少しくらい壊したつて、ティファニーが直してくれるさ。あの子はあれで、いっぱいしのメカニックだからね」

「スタンドは足で蹴れば動くつすよ」

「そういえばスタンドを付けてくれたんだったね。ありがとう、ティファニー」

「西海岸でも乗るために、後でウインカーやミラーなんかも付けとくつすよ」

お礼を言いながら、ギアをローに。

ブレーキを放しながらゆっくり丁寧にクラッチを繋ぐと、バイクはグズったような音を出して沈黙した。

「……うあー」

「エンストだな。最初は仕方ないさ」

「そうつすね」

「軍用デバイスで見たムービー。レース中はすごく速いの、そうじゃない時は優しく滑らかにバイクを操る人がいてき。マネしたかったけど失敗」

「練習を怠らなきゃ、いつかジョンにも出来るさ。ほら、もう1度だ」

「うん」

さっきのエンストを思い出す。

丁寧というよりは、臆病というべき動作だったかもしれない。

エンジンをかけ、今度は恐れずにクラッチを繋ぐ。

「動いたっ！」

「やるわねえ、ジョン」

「こういうのを感じて言うのかな」

「駐車を一周りして来な。まだ道路には出るんじゃないよ？」

「うん。いつてきます」

アクセルを開ける。

バスでは感じた事のない加速感。

「凄いつ！」

セカンド。

ギアを上げた途端、前輪が浮き上がる。

ここで焦ってはいけないと、交通安全について講習をしていた白髪のお爺さんと言っていた。

「それにガイは、いつも前輪を上げながら加速してた。スタートでも、時にはコーナーか

らの立ち上がりだつて！」

軍事用デバイスのムービーにあつたレース映像。

ガイという髭面の若者はクレイジー、つまり頭がおかしいレーサーだと言われていたらしい。でも彼にはたくさんの応援者がいたし、僕も彼の走りが1発で好きになつた。

こんな風に、僕も走りたい。

そう思ったからこそ、軍事用デバイスでの勉強を真剣に続けていたのだ。

バス

「……呆れた。探索から帰ったら、バスが装甲車になつてゐるなんて」

「バスはバスつすよ。ただ切ったタイヤのゴムを鉄板で挟んだ防弾板を、車体に貼り付けまくっただけつす」

「う、運転席の視界は大丈夫かこれっ!?!」

背負っているキャリアーを下ろすのも忘れ、ジャンヌが運転席に走る。

朝から探索に出て帰ったばかりなのに元氣だなあ。

僕が初めてバイクに乗ってから、もう3日が経っている。その3日はバスの内装を改造するからと、ティファニーが廃墟から持ち帰ったテントで寝起きをしていたのだ。

あれから僕はカレンが見張りをしている時はバイクに乗って駐車を走り回っていたので、それなりの運転技術を身につけている、……はずだ。

「アキ、中を見たらもつと驚くと思うよ。保証するから、見て来て」

「怖いわねえ。カレンは中に?」

「うん」

屋根の上で見張りをする僕に、アキがうんざりしたような顔を見せる。

それでも、アキはバスのドアに向かった。

説明のためにその後を追うティファニーは、イタズラ成功とでも言いそうな笑顔。うん、嬉しそうで何より。

「まあ、驚くよねえ。命懸けの戦いが始まる前なのに、バスの中があんな風になってたら」

西海岸を襲う計画を立てているオクトを殺す。

言葉にするのは簡単だが、それがどんなに困難な事かはみんなが知っているはずだ。

西海岸にもエージェントやガーディアンはいるが、軍事ロボットはほとんどいないらしい。1000や2000のエージェントやガーディアンを呼びに行っても時間のムダ。それがアキ、ジャニス、カレンの共通した意見だった。

「3人、じゃない。4人は、僕が守ろう。……オクトを殺したその時、みんなが生きてるならそれでいい」

アキがバスを降り、夕食の支度を始めながら屋根を見上げる。

「驚いたでしょ?」

「絶句したわ。ベッドルームに、お風呂にトイレ。キッチンまであるのね、どれも狭いけ

ど」

「バスタブとトイレは直接パイプで外に繋いでるから、停まってる時に使うと大変らしいよ。逆にキッチンも、走りながら使うのは危険だつてさ」

「と、特にトイレは危険ね」

「アキはお風呂つてというのが大好きなんですよ？ 良かったじゃん」

「居心地が良すぎて、西海岸なんかどうでもよくなりそう怖いわ」

「このまま旅にでも出る？ 故郷に似たジパングつて場所に行くには、船か飛行機が必要なんですよ。それを探しにさ。ティファニーがいれば、ジパングまで行けるかもしれない」

「……何千人もの人々を見殺しにして？」

「うん。アキを責める人がいたら、僕が殺す。西海岸を思い出して哀しくなったら、抱きしめて朝まで眠る。それでどう？」

「素敵ね。……でも、それは出来ないわ」

微笑んだアキが、殺気さえ込められているような鋭い視線で西の空を睨む。

やっぱりか。

「残念」

「どうして急に、そんな事を言い出したの？」

「他人なんかどうなったっていいから、死んで欲しくないなあつて。アキもジャニスもカレンも、ティファニーも」

「……そう」

「でも、アキ達は西海岸の人達を見殺しに出来ない」

「そうよ。だから、私達に付き合う必要はないの。私達が戻らなかつたら、ティファニーと2人で旅に出なさい。西海岸に寄るのは、可能ならでいいから」

「それはないな。僕はアキとジャニスとカレンに死んで欲しくないんだ。ティファニーにもね。だから、そのために動く」

「どういう意味？」

「明日からはバスで探索でしょ。その時にわかるよ」

夕食の準備が出来る時、ティファニーが屋根に来て見張りを代わってくれた。

アンドロイドは睡眠も食事も必要とせず疲労もないからと、朝まで見張りをしてくれるのだ。それでも悪いので僕は夕食を食べると、眠くなるまでティファニーとお喋りをして行くのだが、彼女はそんな時間を嫌ってはいないらしい。

今日もそうしようかと思つて食事を平らげると、いつもは最後に食べ終わるアキがパッと音を立てて手を合わせた。

「ごちそうさまでした。ティファニー、本当に一番風呂は私でいいのね？」

「いいつすよ〜」

「よーっし。おっふる、おっふる♪」

「ごちそうさまでした。嬉しそうだねえ、アキ。つて、もう行っちゃった……」

「ジョンも後でカレンお姉ちゃんと入る」

「僕は最後に1人でね。お風呂は裸で入るらしいから」

「フラれたな、カレン。ああそうだ。これをやるよ、ジョン」

「ジャニスがテーブルに置いたのは、小さな箱だ。」

「タバコ？」

「そうだよ。やってみな、驚くから」

「へえ。いただきます」

「1本抜いて口に持って行くと、不思議な匂いが鼻に届く。」

「たしかこんな匂いのキャンディを口に放り込まれて、酷い目にあっただ。あれをやったのもジャニスだ。」

「前に食わせたアメ玉みたいには辛くねえぞ？」

「ホント？ あの日のゴハンは、口に残った香りで台無しだったんだけど」

「大丈夫だったの。1本貸してみな。ほら。……ふーっ。いい香りだ」

「ホントかなあ。……ふーっ。あれ、スースーする」

「だろ？ 今日の探索でそれなりに見つけたんだ」

「んー、悪くはない。でも、僕は普通のヤツの方が好きかなあ」

「なるほど。じゃ、こっちはアタシが吸うか」

生まれて初めてのお風呂は、悪くなかった。

芯まで体が温まると、なんとなく疲れた筋肉にいい気がする。

「お風呂はどうだった、ジョン？」

「いいね。毎日だと水とバツテリーがもったいないから、たまにしか入れないんですよ。

また入れるのが楽しみ。それじゃ、おやすみなさい」

「おいおい、いったいドコで寝る気だよ？」

「運転席の後ろに決まってるじゃん」

「ベッドは大きいから、4人で寝られる」

「えー。カレンがくつついて来て、くすぐったくて寝られない予感が」

「いいから来いよ、ほら」

「まあ、たしかに。ベッドがあるのに、通路で寝かせるのも……うん。これは仕方ない事ね」

いくら大きなベッドを近場の民家からテイファニーが運び込んだといっても、4人で寝るには狭いに決まっている。

なのに僕はアキとジャニスの胸に顔を挟まれ、カレンに半分乗つかかれながら、それでもいつしか眠りに落ちていた。

「……ん。朝か」

防弾板は、手動式に改造されたバスのドアにまで貼られている。

それでも前を見たり周囲を見たり、敵がいれば窓を開けて銃で撃てるように隙間がある作りになっているので、朝陽は差し込むのだ。

目が覚めたので3人を起こさないように運転席と後部座席へのドアを抜け、そのままハシゴで屋根に出た。

「おはようっす、マスター」

「おはよう。見張り、ありがとね」

「いえいえ。インカムを修理しといたっすよ」

「インカム？ ああ、なんか言ってたね」

「これっす。今日からバイクを使うつもりっすよね？ それならこれが必要になるっす」

「バレてたかあ。どうやって使うの、これ」

「ちよつと失礼するっす」

インカムは、頭に装着する道具らしい。

(聞こえるっすか?)

「わ。機械を付けた方の耳から声が聞こえる」

(はいっす。口の脇にあるマイクは雑音をカットしてティファニーやアキ達の軍用デバイスに声を届けてくれるので、バイクに乗りながらも話せるっす。それに小声でも拾ってくれるから、よほど近くに敵がいなければ使えるっすよ)

「軍用デバイスに繋がってる訳でもないのに、凄いなえ」

「まだマスターの分しかないっすけど、バスでの探索で範囲を広げれば全員分を用意できるとは思わなっす」

「それと武器が揃ったら、シカゴか」

敵は軍事ロボットと武装したアンドロイドに守られている、リミッター解除したアンドロイド。

どう考えても、簡単にオクトを殺せるとは思わない。

「怖いっすか?」

「アキ達やティファニーが死んだら、なんて考えると怖いね」

「自分が死んだら、とは思わないっすか?」

「思わないなあ。死は、いつ誰に訪れても不思議じゃないし」

「……若いのに達観してるっすねえ」

「小さな頃から、人を殺してばかりだからね。自分だけ殺されないなんて、都合のいい事は思わないよ」

「ど、どういう意味っすか?」

「そういえばティファニーには話してなかったか。」

「僕の一番古い記憶はベレッタでブルースに逆らう街の人間を撃ち殺し、走って逃げた父さんが設置したCのある道へ誘き寄せた時のものだ。」

「油断したのか鉄パイプで1発殴られて血だらけで走ったので、よく覚えている。」

「それを話すと、ティファニーの瞳が曇った。」

「嫌な気持ちにさせちゃったかな。ゴメンね」

「いえ。それより、マスターのお父さんは……」

「死んだよ。お酒を街から支給されているうちに、お酒がなきゃ暴れ出すようになってね。僕がお酒と女を買うお金を稼ぎに行ってる時に、このショットガンの持ち主だったミルクレイプ・チェインソウに鈍器で頭をカチ割られて死んだ」

「……そうっすか」

「バスの中から物音がする。」

「アキ達が起き出したのだろう。」

「バスの屋根には僕の膝より少し高いくらいの手摺りにまで防弾板が貼られていて、そ

ここに針金で空き缶が括り付けてある。ティファニーが氣を利かせて付けてくれた灰皿だ。

その横まで移動して、タバコに火を点ける。

「マスター。タバコを吸つてて、息が切れたりしないつすか？」

「ないねえ。街を出てからは、吸つてなかつたからかな」

「ちなみに、何歳から吸つてたつすか？」

「4歳かなあ。記憶があるのは、そのくらいからだし」

「……やつぱりつすか」

「何がやつぱり？」

「なんでもないつすよ。それより早く顔を洗わないと、またアキがうるさいつすよ」

「ははつ。じゃあ、下に降りようかな。探索の時、ティファニーは屋根？」

「そうつすね。今日中に繁華街まで行くなら、臨戦態勢つす」

「了解。じゃ、また後で」

水浴びと違い、洗顔なら水筒の水で済む。だがキッチンの水道という設備は貯水タンクに繋がっていて、バルブを捻ればそれだけで水が出るのだ。

キッチンはベッドルームの向こう。

車内に戻ってベッドルームに入ると、ジャンヌとカレンが抱き合うようにしてまだ

眠っていた。

「ジャニス、カレン、朝だよ？」

「んんっ」

「もう朝かよ。……こら、ひつつくんじゃねえカレン。アタシはジョンじゃねえぞ」

「ジョンにはこんなムダな脂肪は付いてない」

「おっぱいを揉むなつての。まだ酔つてんのか？ 見張りも運転もしねえでいいからつて、貴重なワインをガブガブ飲みやがつて。この野郎」

「ヤロウじゃない。脂肪よ、揉み出されろ」

「大丈夫そうだね。じゃ、先に顔を洗いに行くよ」

運転席とは反対側のドア。

「おはよう、アキ」

「ジョン。おはよう」

「珍しいね」

「何が？」

「アキが下着姿で歩き回るの」

「……きやあつ。ごめん、こ、こつち見ないで」

「了解。ベッドルームに戻つてるよ」

「本当にごめんね。パジャマを洗濯カゴに入れたんだけど、着替えを持って来てなかったのよ」

「今までとは違うもんねえ。……またビンタされるかと思った。クマさんパンツじゃなければ殴られないのかな。変なの」

「なにか言った?」

「なんでもない」

鉄の騎兵

朝食を済ませ、4人でテーブルや椅子を後部ハッチに運び入れる。

その作業を終え首にかけていたインカムを耳に装備する僕を、アキが不思議そうに見ていた。

「それ、軍専用デバイスの通信インカムよね？ 無線式の」

「そうだよ。今日からバイクだからね。僕が使わせてもらうよ」

「今日からバイクですって!?!」

やっぱり驚くか。

もしかして、反対もされるかな。

「どうするつもりなんだ、ジョン?」

「バスを使うのは、搜索範囲を広げるためでしょ。武器もインカムもいろんな場所で死んだ兵隊さんのをもらうから、バイクで走りながら見つけてこのザックに入れて持ち帰る」

「問題は危険かどうかよ？」

「クリーチャーがいねえ訳じゃねえからなあ」

「大丈夫」

「何が大丈夫なのよ、カレン？」

「ジョンはバイクの運転の練習じゃなく、バイクでの戦闘の練習をしていた。腕は上がってるから大丈夫」

カレンがそう言ってくれたが、アキとジャンニスはまだ心配のようだ。

「なら、最初はバスから見える範囲だけにするよ。それならいいでしょ？」

「私達は屋根にいるから、それなら少しは安心だけど」

「いいんじゃないか。危なっかしいなら、途中でバイクをバスに積めばいいんだし」

「……わかったわ。でも充分に気をつけてね、ジョン」

「うん」

夕方にはまたこの駐車場に戻って眠るので、焚き火などはそのままだ。

もしクリーチャーなんか壊されたら困る物の積み込みを終え、バイクに跨って出発を待つ。

タバコを一本灰にする前に、バスはゆっくりと動き出した。

「よし、ついに実戦だ」

吸い殻を指で弾いて飛ばし、ギアをローに。

バスの屋根のパラソルの下で心配そうに僕を見るアキに笑顔を見かけると、ぎこちなくはあるが笑顔を返してくれた。

バスが向かったのは、道幅の広い道。忘れられた時代の言い方だと、4車線の幹線道路だ。

(聞こえるか、ジョン?)

(うん)

(今日の探索は広い道だけど、いくらかクルマの残骸がある。それを避けたりするし道が塞がれてる可能性があるから、バスを追い越す時は事前にこの無線で教えな)

(了解。アキ、カレン。ティファニーも聞こえる?)

(ええ)

(屋根から見てガイコツや武器があったら、方向を指示して。僕が取りに行くから)

(それは助かるわね。それならお店なんかを見つけた時だけ、バスから降りればいいんだし)

(でしよ)

バスとバイクの、エンジン音と排気ガス。

それ以外の臭いや音がないかに集中しながら、のんびり進むバスを追いかける。

クルマの残骸や民家などもすべて探索すれば何か発見できるのだろうか、今は何より時間が惜しい。

(ジョン、対向車線の少し先。赤いクルマのそばに、コンバットスーツのガイコツが見えるわ。そこまで進んだらバイクを停めて、コンバットスーツの下にでも武器やインカムがないか見てくれる?)

(了解。軍用デバイスはあるとしてもいいわね?)

(地図表示機能、MAPってアイコンが消えちゃってるのはいいわね)

(わかった)

交差点でバスが停まる。

赤いクルマは、ちょうどバイクの左だ。

エンジンは切らずにスタンドを立ててバイクを降り、手を合わせてからコンバットスーツをめくる。

(武器やインカムどころか、軍用デバイスまでないねえ)

(そう。もう少し進むと、当時のガンシヨップがあるはずなのよ。そこは、私とティファニーで探索するわね)

(了解。なら僕は、その先のバスから見える範囲を)

(いいけど、くれぐれも注意してね)

ガンは銃、ショップはお店だ。

もし店内が当時のままなら、武器探しはそれで終わりかもしれない。

スピードは遅いけど、バイクで走り出すと風が心地良い。

そろそろ、本格的に夏だ。

(見えた。あれだな。店の前で停めるよ)

(お願い、ジャニス。悪いけど付き合っつてね、ティファニー)

(任してくださいっす)

アキとティファニーが、ガンと書かれた看板のさほど大きくない店に入っていく。

(ちよつと前に出るね、ジャニス)

(ああ。気をつけてな)

アクセルを開けてバスを追い越す。

道路脇には、不思議な形の木。アスファルトは傷みが少なく、とてもいい道路だ。建物もたくさんあって、僕が読める看板には洋服と書いてあった。

それにしても派手な色の店の前にあるベンチに座った、真つ白な顔に子供がラクガキをしたような人形は何なんだろう。

「お、コンバットスーツ発見。つて行き過ぎた!」

フットブレーキを蹴飛ばし、クルリと方向転換してコンバットスーツの横にバイクを

停める。

降りて手を合わせてからコンバットスーツをめくると、大き目の銃があった。

(どうだ、ジョン?)

(銃と軍用デバイス。盾にしたらしいクルマの下には、壊れてるけどインカムもあった。軍用デバイスとの地図表示機能は、……あー、ダメみたい)

(おお、ツイてるな。それにしても、運転が上手くなつたじゃんか)

(ありがと)

銃身がザツクからはみ出したけど、構わずに入れて背負う。

(あつ)

(どうした?)

(少し先に、パトカー。たぶんだけど)

(おお。期待できっかな)

(アキよ。店はカラッポ。ティファニーの話じゃ、ここはまだヘキサゴンステイツの支配地域じゃないけど銃があるのは明白だから、オクトの部下が来て持つて行ったんだろうって)

僕がバイクでパトカーのところまで走ると、アキとティファニーはもうバスに戻ったらしい。

パトカーは、ドアもトランクもすんなり開いた。

後ろに回って、トランクを覗き込む。

「わあ……」

銃だ。

しかも、傷1つないように見える。手に持ってみると、僕のショットガンよりかなり大きいのに、比べ物にならないほど軽い。

(ショットガンね。ポンプアクションの)

(これもショットガンなのか。メチャクチャ軽いよ)

(ジョンのとは素材からして違うもの。トランクの中に弾はない?)

(紙の箱が1つだけ)

(じゃあ、それも回収してね)

(了解)

ザックにショットガンなどを入れてみると、バスが追いついてきて屋根から中身の入っていないザックが投げられた。

僕が背負っていた物と交換しろという事だろう。

ハシゴを半ばまで下りたティファニーに、銃やインカムの入ったザックを渡す。

「これはっ!」

新しいザツクを背負いながら、僕はバイクに飛び乗った。

(前方の交差点、右から悪臭。先行する！)

急発進。

持ち上がる前輪をアスファルトに押さえ込みながら、ギアを上げる。

(待つて、ジョン！)

(単独行動の試験だとも思って、アキ)

スピードを落とさず交差点に突っ込む。

このバイクはオフロードレース用なので、こういった挙動はお手のものらしい。

オーバースピードで後輪が滑る。

慌てずハンドルを逆に切りながら、僕はクリーチャーを視界に入れた。

(足の長いクリーチャー。アキ達が何匹か殺したってやつだね)

(飛ばすぞ、しっかり掴まってるよ。にしても、ドリフトしながら報告かよ)

(事故?!)

事故じゃない。

クリーチャーがすぐそこなので、口には出さなかった。

足が長くて、腕も長い。形は人間に似ているけど、全裸で体毛のない砂色の肌。動き

が鈍いので、殺すのは楽だとジャンニスは言っていた。

交差点はもう抜けている。

直進する状態から体重を少しだけ右後方に向けながら、フットブレーキを蹴飛ばす。バイクが横になる。また後輪が滑っている方向とは逆にハンドルを切って、僕はバイクのタイヤからクリーチャーの足に突っ込んだ。

(危ないっ！)

(いや、あれは見た目ほど危険な事じゃないさ)

「グギャツ」

足を轢かれたクリーチャーがしゃがみ込む。

まるで人間みたいだと思いつつ、左手でショットガンを抜いた。

飛びかかられたらアクセルを開ければ逃げられる距離だけど、このくらいなら散弾のほとんどが命中する。何しろクリーチャーはもしバスに乗ったなら身を屈めるようにしなければならぬほどに、背が高いのだ。

「バアイ」

ズドンという射撃音の後に、ビチャビチャとクリーチャーの血肉が乾いたアスファルトに降る。

どんな化け物でも、散弾で頭部を吹っ飛ばされては生きていられないだろう。

周囲にこのクリーチャーの仲間がいまいか注意深く見回しながら、1発撃った弾を新

しい物に変えた。

(他にはいなそう。アキは何か感じる?)

(……ないわね。それにそのクリーチャーは、単独でしか見かけた事がないわ)

(そっか)

(それより、あんな危ない事をするならバイクは取り上げるわよ!)

(うええっ!?)

(はっはーっ。運転の腕もバイクに乗ってる優位性も見せよう、なんて欲張るからだよ)
(笑い事じゃないって。ジャンヌとティファニーなら、僕がそんなに危ない事してないってわかるでしょ!?) アキに言ってるよ!)

オフロードというのは、アスファルトで舗装されていない道という事だ。

ベツドを調達してきた後にティファニーが砂を運んでくれてそれを駐車場に撒いて練習したのだが、砂の上ではバイクは信じられないほど滑る。

そんなオフロードで速さを競うためのバイクだから、さっきの挙動くらいなんて事はない。

(とりあえず、この交差点の真ん中は見晴らしがいいわ。こっち来て上がってらっしゃい。水分と糖分を補給しながら、休憩にするわよ)

(……はあい)

頭部を失った足長クリーチャーは、食べられるかどうかからならしい。

そのままバイクで交差点の真ん中に戻ってバスの屋根に上がると、ニヤニヤしているジャンスが冷蔵庫で冷やした缶ジュースを放ってくれた。

お返しに、胸ポケットのタバコに火を点けてジャンスの口元に運ぶ。

「ねえ、助けてよ。ジャンス」

「どうすつかなあー」

「そのムダにでつかい胸でも揉みしただけ、ジャンスは一発で墮ちるつすよ」

「じゃあ、失礼してと」

「お、おいつ!」

「はいはい、そこまで。あんまりジャンスをからかわないの、ティファニーもジョンも」
「残念だったつすね、ジャンス」

「了解。……ふはあつ。やつぱり冷えてると美味しいねえ。冷蔵庫をキッチンに付けてくれたティファニーに感謝だよ」

丸くて中央から棒が伸びて、それでパラソルを支えているテーブル。

その席に腰を下ろすと、お皿に載ったロールケーキを渡された。これも缶詰だ。それをフォークでつつきながら、必死でアキにオフロードバイクの説明をする。

「まあオフロードレースがどんなものかはわかったけど、危険な運転をわざわざするの

は感心しないわ」

「さっきのは運転も上手くなってるんだよ、つて見せたくてああしたんだよ。次からは交差点の手前でバイクを停めて、背負ってるボルトアクションライフルで遠くから撃つ。危なくなったらすぐ逃げられるように、バイクから離れないし。ね？」

「そうねえ……」

結局、アキは僕の単独行動を許してくれた。

ただしクリーチャーや軍事ロボットがいれば、報告しながらなるべくそれとの接触を避け、何も発見しなくても1時間に1度はバスに戻るからだ。

笑顔で頷いて立ち上がる僕に、アキが苦笑を見せる。

大聖堂

(ちよつといいかな)

(どうしたの、ジョン?)

(今まで見た事ない雰囲気の大きな建物を発見。その前には、道路を塞ぐほどの戦闘車両)
(両)

(ジョンが向かった方向からすると。……この、トリニティ大聖堂かしらね。生き残った人類は、そこに立て籠もってクリヤーやオクトの配下のアンドロイド達と戦ったのかも。空港でも球場でも軍事施設でもなく大聖堂を選ぶなんて、神様に助けでも求めるような心境だったのかもね。生き残った人間達は)

(ならそこに向かえばいいんだよな、アキ?)

(ええ。向かってちょうだい。ジョン、わかっていると思うけど、あまり接近しないでね)
(わかってる。じゃあ、待ってるね)

道を塞いでいるのが戦闘車両なのは、ティファニーが軍用デバイスに転送してくれ

るムービーで見たので間違いない。

問題はそれがすべて薙ぎ倒されていたり、穴だらけだったりする事だ。

「ジャンスは戦闘車両を欲しがってたから、1台でも修理できるのがあればいいな」

そして僕がバスの運転を覚えて、2台の車両で西海岸に向かえばいい。バイクはバスに積めばいいから安心だ。

「そういえばアキ達は家があるって言ってたから、お金を貯めるまで僕はバスに泊めさせてもらうのかな」

ここはもう、ヘキサゴンステイツの支配地域。

だがティファニーの言葉通り、巡回する軍事ロボットは、昨日の朝に僕達をすんなり通してくれた。その前日は朝から雨でバスにずっといたので、距離的にはまだそんなに進んではいけない。

戦闘車両をそのままにしているという事は、普通のアンドロイドには修理不可能なだろう。

でも、こちらにはリミッター解除したティファニーがいる。

戦闘車両を並べた辺りや建物の中に、修理不可能と判断されて放置されている武器がたくさんあれば、それをティファニーが修理してくれるだろう。そうすれば、僕達の準備は終わりだ。

そうなれば、シカゴへ。

生きては帰れないかもしれない。

そう考えてまず頭に浮かぶのは、アキ達が死ぬなんて許せないという事。

(見えた。……良かったわ。ジョンが大人しく待っていてくれて)

(当然でしょ)

(最近のジョン、特にバイクを手に入れてからを見てるとねえ)

バスがバイクの前まで進んで停まる。

後部ハッチを開けてバイクを積もうとしていると、ティファニーが屋根から飛び降りて手伝ってくれた。どこかでお店でも漁ったのか、新しい水着に着替えている。

「ありがとう」

「いえいえ。とりあえず、休憩しながら様子を窺うそうつすよ」

「了解。でも軍事ロボットの姿が見えないから、クリーチャーはいないよね」

「どうつすかね。なんせアンドロイドを未配置の街つすから、油断は出来ないつすよ」

「なるほど」

考えても仕方がないので、大聖堂というのを見張るために屋根に上がる。

最前部まで移動させた椅子に腰掛け、アキは双眼鏡で、カレンはスナイパーライフル

のスコープで建物を見ていた。

「どう?」

「お疲れさま、ジョン。今のところ、クリーチャーの姿は見えないわね」

「どのくらい様子を見るの?」

「お昼までかしらね。昼食を終えても状況に変化なしなら、ジャニスとカレンをバスに残して接近しましょう」

「3時間くらいか。了解」

「マスター、よく冷えたスポーツドリンクです」

「ありがとう」

僕は双眼鏡もスコープ付きの銃も持っていないので、灰皿にしている空き缶の前に椅子を移動して、タバコを吸いながらスポーツドリンクを飲む。

「ティファニー、あの戦闘車両って直せないの?」

「時間をかければ可能じゃないっすかね」

「シカゴでオクトを始末したら、戻って来てジャニスのために修理してくれない?」

「バスはどうするっすか?」

「僕が運転を覚えるよ」

「シカゴから西海岸までの道にどんなクリーチャーがいるかわかんないっすから、それ

もいいかもしれないっすねえ」

「やった。ジャンスが喜ぶよ。教えてくる！」

雨水の溜まった空き缶に、吸い殻を放り込む。

バスの運転席のシートに立ってジャンスがRPGなんかを撃つためのハッチを開け、上半身を突っ込んだ。

「おわっ。逆さになってると頭に血が上るぞ、ジョン」

「ねえ。大聖堂つてのの前に、たくさん戦闘車両があるでしょ？」

「ああ。戦車に装甲車。護送車まであるなあ」

「オクトを殺したら、ティファニーがどれか修理してくれるって！」

「マジか！ あ。でもそうなると、バスがな。カレンじゃ不安だし……」

「僕が運転を覚えるって。楽しみだねえ」

「本気かよ、ジョン？」

「あつたりまえでしょ。でき、たまにでいいから僕にも戦闘車両を運転させてよね」

「それが目的かよ。まったく。……いいよ。運転も手取り足取り教えてやるさ」

「うんっ」

ならばと屋根のパラソルの下で、のんびりティファニーに転送してもらったクルマの運転に関するムービーを眺める。バイクとはかなり違って見えるが、根本は同じだろ

う。

これなら、大丈夫そうだ。

「お昼ごはんを用意するわ。見張りを代わってくれる、ジョン」

「了解」

双眼鏡を受け取り、カレンの隣の椅子に座って大聖堂の方向を見張る。

戦闘車両の残骸。

それと、灰色の何かが目立つ。

「カレン、戦闘車両の近くにある灰色のって何？」

「土囊。ホントは土を袋に入れていくつも積み上げ、それに身を隠して敵を迎え撃つ。

あれは土が雨で流れて萎んでないから、中は軍事用の特殊樹脂か何かだと思う」

「なるほど。……やつぱり生き物の気配はないね」

食事が出来ると、ティファニーが双眼鏡も使わずに見張りをしてくれた。

ハンバーガーを食べ終え、ジャンスとタバコを吸いながらアキの計画を聞く。

「アタシはバックでバスを接近させて、いつでも逃げ出せるように運転席で待機か」

「軍事ロボットとすれ違ってからクリーチャーは出てない。でも、気を抜かず見張りす

る」

「僕はキャリアーを背負って行くよ、アキ」

「そうね。ティファニーが中にある物を修理できるって判断したら、バスまで運んで直してもらおうのがいいわ。当時の人間達が皆殺しにされた建物で、泊まり込みで修理したとは思えないし。じゃあ、始めましょうか」

「おうっ」

後部の荷台からキャリアーを背負って屋根に戻ると、すでにアキとティファニーの準備は整っていた。

アキが軍用デバイスに口元を寄せる。

「それじゃ接近を開始して、ジャンス」

「あいよ。まずはUターンだからな。落っこちねえように掴まってな」

まだこの辺りはクルマの残骸が少ない。

ジャンスの鮮やかな運転でバスがUターンすると、そのまま尻を大聖堂に向けて進み始める。

見る間に近づいてくる、独特な形状の建築物。

神に祈るための場所だとアキは言ったが、神というのはゴテゴテに飾りつけた壁の建物が好きなのだろうか。

砲塔というのがなくなったり、キヤタピラというのがメチャクチャに壊れてしまっている戦車の手前で、バスは停まった。

「行きましょう。油断はなしよ、2人共」

「うん」

「はいっす」

屋根を下り、戦車と戦車の間から建物の入口に向かう。

装甲車は損傷が少ない物が多そうだが、それでも運転席が潰れてなくなっていたり、フエンダー部分がごっそり吹っ飛ばされていたりする。

「……おかしいわね」

「何が、アキ？」

「壊れた武器やインカムはあるけど、遺骨がないのよ。土嚢の裏にもね」

「アンドロイドが片付けたのかな」

「人間を、ゴミクズか害虫としか思っていないオクトの部下がつすか？」

「だってガイコツないもん。ねえ、アキ」

「雑談はそこまで。大聖堂は、クリーチャーがいて当たり前だと思つてて」

「わかった。つて、ちよつと待つて。こんなトコに、地下鉄の駅がある！」

「ええっ？」

「は？ ああ。これはそういう名前の店つすよ。駅じゃないっす。しかも意味は地下鉄じゃなく、サブマリンサンドイッチを好きに作れる店つて意味っす」

「ま、紛らわしい……」

交通ルールを覚えるため、僕はたくさんの方の文字をアキとティファニーに習った。だから間違いないと思ったのに。

「でも地下鉄っすか。バスに戻ったら検討しましょうっす、アキ」

「……シカゴへの侵入経路？」

「そうっす。一考の価値はあるっす」

「そうね。ティファニーの作業中にでも、当時の路線図を見ておくわ」

土嚢が多くなっている。

ひしやげたヘルメットに、壊れてしまった銃。

アスファルトには、爆発で抉られたとしか思えない痕もあった。

階段。

その上に、大聖堂への入口がある。

アキがドアの前で目を閉じて耳を澄ますが、首を横に振ってドアをゆっくりと引いた。

「生き物の臭いはないね」

「ええ。踏み込むわよ」

アキを先頭にティファニーが続き、最後に僕が大聖堂に入る。

「そ、そんなっ！」

「こんな事だと思っただつすよ」

「どしたの。って、うわあ……」

僕達が目にしたのは、広い部屋の中央に高く積まれた夥しい数のガイコツ。

小さいのも多い。

それらを見下ろしている彫刻が、神なんだろうか。

「神なんていないんだね」

「そう言いたくなるのもわかるわね、こんな光景を見せられると……」

「アサルトライフル発見っす」

「こんなの見てなんともないの、ティファニー？」

「同情はするっすけどね。世界が一部の人間のせいまで崩壊するのを、どうし

て止めてくれなかつたんだって気持ちもあるっすから」

「そうじゃなくて、なんて言うか。ミルクレイプ・チェインソウの濁った目で見詰められ

てるみたいに嫌な気分になる。ここ……」

「気分が悪いならキャリアーを置いて外に出てなさい、ジョン。クリーチャーはいない

し」

「じゃ、キャリアーはもらうっす」

「あ、ありがと。……なんか吐きそう」

2人の案じる声を背中に受けながら、小走りですぐ外に飛び出す。

階段を下りてその一番下に腰を下ろし、ゆっくりと呼吸を整えた。

水筒を呷る。

「なんだろ、あの嫌な感じ」

アキとティファニーに悪いなと思いつつも、タバコを啜って火を点ける。

肺に溜めた煙を何度か吐き出すと、少しだけ気分が良くなったような気がした。

それでも中に戻って、積み上げられたガイコツの山の周りの床に散乱していた銃やインカムを集める気にはなれない。

「お待たせ。大丈夫、ジョン？」

「早かったね。ゴメン、手伝えなくって」

「ティファニーが手早くやってくれたから。それより、気分はどう？」

「さつきよりは、かなりマシ」

「そう。ならバスに戻ったら、ベッドで少し休んでなさい。バイクで単独行動なんか始めたから、疲労が蓄積してたんだと思うわよ。今日と明日、ジョンはお休みね」

「そんな」

「これはパーティーのリーダーとしての決定。不服なら、ジョンはもうバイクの運転禁

止

「…………う。わかった」

バスに戻ると、アキにそのままベッドルームに押し込まれる。

バイクを運転できないなんて考えたくもない。

仕方がないのでベッドに倒れ込むと、柔らかなスプリングの向こうまで体が沈んで
いつているような気がした。

人の性

「ジョン、晩メシだぞ。起きられるか？ ああもう、ホルスターも外さねえで寝るなんて。よっぽど疲れてたんだな」

「ジャンニス？」

「そうだよ。起きられそうか？ ムリなら寝てていい」

「……ゴハンは食べる」

「ならここに持って来てやる。それまで寝てろ」

ありがたいを言う前に足音が響き、ドアの閉まる音が聞こえた。

うつ伏せのまま寝てしまっていたので、寝返りをうって枕にぼーつとしたままの頭を載せる。

「なんだろ、頭が重い。体が熱い。また血の涙、出ないよね……」

コンバットスーツの袖で目頭を擦ってみるが、血は付いていなかった。

目の上に腕を置き、何も考えずに飯を待つ。

「持つて来たぞ。はあつ、そのままかよ。まずは着替えだな。ホルスターから外すぞ」
「自分で、やる」

「いいからそのまま寝てろ。なんなら隅から隅まで、濡れタオルで拭いてやるぞ。にし
し」

「お願いしたいかも」

「……重症だな、これは」

ホルスターが外されていく。

最後にベレッタが体から離れた瞬間、僕は飛び起きた。

「な、なんだっ!？」

ベレッタをホルスターごとひったくる。

ジャンヌ。

胸の大きな美人。いつも肩と胸元が丸出しの薄着なので、胸が特に目立つ。

その胸に触れたいと、なぜか強く思った。

「ど、どうしたジョン」

「……ねえ、胸に触ってもいい?」

「はあつ!?! な、何だいきなり。つて、うおっ!」

ジャンヌが見ているのは僕のズボン。それも股間だ。

精通は済んでいるのでたまに大きくはなるが、こんなに痛いほど膨張したのは初めてかもしれない。

「ああ、だからジャニスの胸が気になったのか。僕」

「あ、い、やや。じゃ、じゃあメシはここな。じゃあ、そういう事で！」

「どういう事なの。って、もう行っちゃった。……ダルいけど、体がゴハンを欲しがってる。食べなきゃ」

ベッドの隅に置かれたトレーには、炊いたライスを煮たオカユとミソスープ。それにいくつかのおかずが並んでいた。

股間が痛いけど、ズボンを脱いで誰かが来たら気まずい。

位置を調整してからいただきますをして、ゆつくりと食事を始める。

「なんで収まんないんだろ。それにジャニスの胸とアキのお尻、カレンの唇が目に見えぶや。……なんで唇？」

なぜだろうと考えているうちに食器はすべて空になり、僕はタバコに火を点けた。

初めて廃墟を探索した夜に飲んだお酒が飲みたい。

そして……

「ええーっ!？」

ティファニーまで含めた4人の裸を想像している自分に驚き、思わず大声で叫んでし

まった。

屋根から足音。

マズイと思つて僕が取つた行動は寝たフリ。アキの言う狸寝入り。急いでタバコを消してベレッタを抱きしめ、出来るだけ自然に寝ている人間を真似る。

「大丈夫っ！　つて、寝ちやつてるじゃない。嫌な夢でも観て叫んだのかしら」
せめて、股間が収まるまで一人にして！

そう強く念じながら目を閉じる。

アキが出て行つてもそうしていると、僕はいつの間にかまた眠つていたらしい。

ドアの開く音が覚める。

いや、まだ僕は寝ているのかもしれない。

それでもアキ達の小声のやりとりは聞こえるし、服を脱いだりそれをベッドに置く音も聞こえている。

起きようと思えば起きられるけど、体はまだ眠っている状態。

これはまた便利な事を覚えたなあと、心の中で苦笑する。

「強化、ねえ」

「まだわかんないって、ティファニーが言つてたでしょ」

「でも悪意に反応したのは事実。そして敵がいらないとなると、ジャンスの脂肪なんかで」

「それが眉唾なのよ。ナノマシンなんかはまだわかるわ。それで食欲や性欲を抑えたり、反対に安全な場所ではストレス解消のためにそれを増幅させたりも、まあなんとかね。タバコを好むのに息が切れないのも、そのおかげなんですよ。でも、悪意に反応して何なのよ。まるでアニメの主人公じゃないの！」

「うるせえって、アキ。ジョンが起きちまうだろ」

「う、ゴメン」

アキの言っている意味は、僕にはほとんど理解できない。

大切な事なら、起こして話してくれるだろう。

でもそれをしないのだから、まだ寝てていいはずだ。

意識を保ったまま、僕は眠り続ける。

「ジョンも寝てるし、今日はタオルで体を拭くだけにしましょうか」

「だな。明日からティファニーが武器を修理してる間、地下鉄の偵察に行くんだろ。タ

フなスカベンジャー・ハントになりそうだから、早く休まねえと」

「いつてらっしやい。ジョンの世話はカレンお姉ちゃんがする。下の処理も」

「抜け駆けしたらパーティーから追い出すわよ、カレン」

アキの声には真剣さが滲んでいる。

「だな。それとティファニーにも要注意だ。こないだ言ってたが、下だけじゃなく口も

使えるらしいぜ。まあ、胸はねえけどよ。ジオンはおっぱいが好きみてえだからなあ、むふふ」

カレンとティファニーの唇。

ジャニスの大きな胸。

次に瞼の裏に浮かんだのは、いつか見たクマさんパンツに包まれたアキのお尻だった。

「そんなんでリードしたつもりになるな、泣き虫ジャニス」

「んだと、嫌われ者のガキ大将が！」

「はいはいそこまで。やめなさい、まったく」

「と言いなからエロい下着を穿くんじゃねえよ、アキ」

「……だって、ねえ？」

「まあ、シカゴで死ぬ前に押し倒して欲しいって気持ちは、みんなおんなじなんだろうなあ」

「でもジオンだけは」

「そうね、カレンの言う通りよ。見た事もない西海岸のために、ジオンが死んでいいはずがないわ。いざとなれば、なんとしてもジオンだけは逃がすわよ」

「だな」

「うん」

僕がアキ達を置いて逃げたりするはずがない。

起きてそう宣言しようかとも思ったけど、アキが体を拭きに、カレンが洗濯をしに行ったらしいのでやめておいた。

残ったジャニスとベッドに上がり、僕に近づいてくる。

軋むベッドの音。

僕の額に柔らかい何かが触れたのを感じると、ジャニスは小さく笑った。

「アキもカレンも、だよなあ。特等席のベッドを譲られたのか。……はあつ。む、胸に触っていいかだなんて、まったくコイツは」

ごめんなさい。

心の中で謝ると、ジャニスは切なげな吐息を漏らした。ジーンズのチャックを下ろす音がそれに続く。

ヤバイ。

普段なら気にもしないけど、今日はヤバイ！

意識を失え。気絶じゃなくて、深く眠るんだ。自分に言い聞かせているうちに、僕は眠りに落ちてゆくのを自覚して安堵した。

「……ふう。朝、か」

アキ達の寝息が聞こえる。起こさないようにベレッタだけ持って運転席へのドアを抜け、そのまま屋根に上がった。

テーブルいっぱいには部品を並べて、ティファニーがもう銃器の修理を始めている。

「朝から精が出るね、ティファニー」

「おはようつす。ちゃんと童貞は捨てたつすか、マスター？」

「まさか」

「やっぱりつすか。ダメなマスターつすねえ。3人は、命を捨ててでもオクトを殺る気なんすよ。男も知らないまま死に行かせるつもりつすか？」

「3人は死なないよ。僕が守るもの」

「それでも人が死ぬのが、戦争つす」

「なにそれ？」

「大きな戦いつす。国と国が戦ったりする事つすよ」

なぜかはわからないけど、心のどこかが滾るような単語。

スペルを訊くと、ティファニーは僕の軍用デバイスに指先を差し込んだ。スペルなら、テーブルに指で書くフリをすればいい。わざわざ転送したなら、これはムービーなのだろう。

インカムを着けて、それを再生する。

(戦争、それは人の性なのか……)

その声と共に、大きく文字が映される。簡単なスペルなので、忘れる事はなさそうだ。次に映ったのは、コンバットスーツを着た若い男達。いや。少数だけど、女の人もいる。

彼等は偉そうな大男の号令で、一齐に動き始めた。

キビキビした動き。

音声は聞き取れるが、単語はわからないものが多い。

「ねえ、訓練って練習の事?」

「そうっすよ。最初のそれは陸軍の新兵訓練っす。次がジャングルの戦場に行つた新兵の戦闘。次がジャングルの特殊部隊で、次からは市街戦をする特殊部隊や人質救出作戦っすね」

「なんか、勉強になりそう」

「……でしようねっす」

タバコも吸わずにムービーを見続ける。

なぜ、この若い男は死んだのか。なぜこの時、土囊の陰に身を伏せなかった。

そんな事を自分なりに考えながら、巻き戻しを繰り返したりしてムービーを見る。

「おはよう。ちよ、ちよつとティファニー! ジョンに何を見せてるのよ!」

「ああ、戦場に行った軍事ロボットが撮った映像つすよ。どこまで見たっすか、マスター？」

「戦闘車両と、アタックヘリコプター？　つてので敵地に突入。今、目標を殺して離脱中のいいトコだから黙ってて」

「……ジョン」

僕が満足して顔を上げ、インカムを外すと、アキ達は朝食を作り終えてそれを食べている最中だった。

ティファニーは前の方にもテーブルを置いて、見張りをしながら修理をしている。

「あ、おはよう。えっと、昨日はゴメンね」

「もう体調は大丈夫なの？」

「うん。頭もぼーつとしてないし、平気だと思う」

「そう、良かったわ。でも念のために今日は、あまり動いたりしないようにね」

「わかった。アキ達は地下鉄の偵察だよね」

「ティファニーに聞いたのね。そうよ。向かいの大学に、ちょうど駅があるの」

「ジョンはティファニーとお留守番」

「カレンも行くんだ？」

「ええ。ティファニーはリモッター解除したおかげで、熟練兵士並みに動けるらしいの。」

武器もいいのをたくさん手に入れたから、任せてくれって」

「ふうん」

ティファニーなら、散歩くらいは自由にさせてくれるだろう。

運良くクリーチャーを見つけたら、ムービーで見た特殊部隊とやらの動きを真似てみるチャンスだ。

朝食が終わってしばらく休んでいると、まずアキが腰を上げた。気合が入った表情のジャニスと、いつもと同じ無表情のカレンがそれに続く。

「じゃあ、ティファニー。くれぐれもジョンを頼むわね？」

「任されたっす」

「大人しく待ってんだぞ、ジョン。土産があれば好きなのやるから」

「お土産はカレンお姉ちゃんがいい？」

「そうだね。怪我をしないで帰ってくれるのが、何よりのお土産かな」

不満そうなカレンをアキが急かし、3人が屋根から車内に移動する。

やがて完全装備の3人がバスを降り、屋根に手を振りながら交差点の向こうに向かった。キャリアーを背負っているのはジャニスだけなので、やはり目的は探索ではなく偵察なのだろう。

単独行動

「さて、と」

「もう行くつすか?」

「昨日、午後からずっと寝てたでしょ。体を少しだけ動かしたいんだ。いいよね?」

「そんな事だろうと思ってたつすよ。なら、軍用デバイスを出つす」

「何するの?」

「通信チャンネルを追加するつす。マスターとティファニー専用の。何かあれば、それで連絡してくださいつす。じゃないと、アキ達が心配するつす」

「……なるほど。了解」

通信チャンネルの追加というのはすぐに終わったので、ベレッタのホルスターを身に着ける。

「ソードオフシヨットガンの代わりに、今日からこれを腰に装備するつす。修理が終わったばかりの新装備つす」

「2つも？　大きさはカレンの銃くらいだけど、変わった形」

「PDWつす。カレンのはサブマシンガンつすね」

「あ。これ、ムービーで特殊部隊が使ってたのだ」

「だから使い方はわかるつすね？」

「うん。ありがと」

「まだあるつす。これは背負うか、両手で持って進むつす」

次にティファニーがテーブルに置いたのは、かなり大きな銃だった。

スナイパーライフルよりは短いけど、とてもベレッタやPDWのように片手では撃てそうにない。

「おっきいね。スコープまで付いてる」

「アサルトライフルつす。2つ上下に並んだ下の銃口は、取り外し可能なショットガン。マスター用のスナイパーライフルもあるつすけど、あれは走りながらのサーチ・アンド・デストロイには向かないつすからね。狙撃でロボットをぶっ壊すのに最適な対物ライフルは1丁しかないんで、それはカレンさんに譲った方がいいと思うつす。アサルトライフルのマガジンがこれ、30発入りが6つ。PDWはこれ、50発入りが6つつす」

「それだけでかなりの重さだよねえ……」

「それと左脇にはベレッタつすから、右にもハンドガン。ベレッタと同じオートマ

ティックで、口径の大きいマグナムつす。マガジンは7発入りを3つ。それらはこのバッグに収納して、腰に装備するつす」

「……腰の後ろが全部マガジン入れになっちゃうじゃん」

「弾切れで死ぬよりいいつす。わかってるつすか。マスターが死ぬば、アキ達も死ぬつすよ?」

そうか。

ティファニーは、僕の気持ちを察して……

「愚痴ってゴメン。ありがたくいただくよ」

「右脇のマグナムと左腰のPDWはバイクに乗りながらも使いやすいように、銃の左に薬莖が排出されるようにカスタムしてあるつす。右手はアクセルを離せないんで、射撃は左手になるつすからね。左に排莖されれば、顔の前を薬莖が横切ったりしないつす」

「おおつ、それはスゴイ!」

「ふふくん♪ 見落としかわぎと置いて行つたかはわかんないつすけど、弾薬箱はかなりあつたつすからねえ。遠慮しないで撃ちまくるつす」

「よしよし、これだけあれば」

マガジンを平たいバッグに詰め、腰の後ろに来るように装備してからPDWというの

を身に着ける。次にマグナム。最後にアサルトライフルを持ち上げると、子供でも背負っているんじゃないかと思うほどの重量感だ。

「ん。重いけど、動くのに支障はないかな」

「シカゴのオクトの根城に突入する時は、アサルトライフルかマグナムをパルスガンに変更つす。本当はベレッタと交換がいいすけど、思い入れがあるんすよね？」

「……うん。これだけは手放したくない。ゴメン」

「それでいいす。武器は信用できる物じゃないと、意味がないすから」

「じゃあこの子達を信用できるようにするために、ちよつといつてきます」

「昼はどうするつすか？」

「水筒の裏つかわりに、ビスケットでも入れてくよ。じゃあ、夕方前には帰るね」

「気をつけるつすよ」

ベッドルームでクローゼットに掛けてある水筒を手に取り、ポケット状の布地に個包装のビスケットをいくつか入れる。キッチンでそれに水を詰め、Cを入れていつものバッグと一緒に腰に装備すれば、準備は完了だ。

バスを降りティファニーにひと声かけてから、アキ達とは逆の方向に歩き出す。

（言い忘れたけど、アキ達が早目に探索を切り上げたら急いで戻るつすよ？）

（了解。ありがとう）

(ブレイク・ア・レッグっす!)

(ヤダよ。なに言ってるんのティファニー!?)

(幸運を祈る古い言葉っすよ)

(……そういえば、ムービーでも言ってたかも。ありがとう)

バスで進んできた道の1つ向こうも、それなりに大きな道路だった。

右か左か束の間考え、どっちでもいいかと道を渡らなくていい左を選ぶ。

「今日も暑くなりそうだなあ」

サングラスは忘れたけど、わざわざ戻るのも面倒だ。

通りの右も左も、大きな駐車場。

悪臭はないし、小鳥の鳴き声と少しの風の音しか聞こえない。

道の向こうの駐車場を見ると、そこを通ればもう1つ向こうの道に出られそうな感じ

だった。

「行ってみよっかな。目的地なんてないし」

道を渡って、駐車場に入る。

キャンプをした所と違ってクルマの残骸が多い。

なのでアサルトライフルを背負って、PDWを持った。

ムービーでは狭かったり障害物が多い場所でアサルトライフルを構えていて、急に襲

われた時にアサルトライフルの大きさが仇になつて死んだ人もいたのだ。

それにPDWをアサルトライフルの代わりに持ち歩いている特殊部隊もあつたので、威力的にも問題はないはず。

ブーツの底で割れたガラスを踏む嫌な音が、澄み切った夏の空に吸い込まれてゆく。慣れない武器を使おうとして緊張しているのか、顎の先から汗が一滴落ちた。

「道路が見えた。でも、気を抜くんじやないぞ？ 安心した表情を浮かべた途端、眉間を撃ち抜かれた人がいたじやないか……」

クリーチャーには出会わず、駐車を抜けた。PDWをアサルトライフルに持ち変え、また左に進む。

少し歩くと、信じられない光景が僕の目に飛び込んでくる。

「ウソ。道路の下に、ものすごく広い道路が……」

道路の下に道路。

なぜこんな事をする必要があつたのだろう。

少し怖いなと思いつつも下の道路を観察すると、クルマの残骸が隙間なくあつて、そのガラスはほとんどが割れていた。

「逃げようとした人が、大きな道路に集中しちゃったのか」

そこにクリーチャーが現れて人を襲い出したとしたら、怖いなんてものじやない。

少し歩いて道路の上の道路が終わると、僕は安堵の溜息を吐いた。

そう簡単に崩れたりしないとわかっている、あんな場所を歩くのはなんとなく怖いものだ。

「……道路の上の道路が崩れないって信じるように、世界を壊す人なんかいないって信じちゃったのかな。忘れられた時代の人は。信じてもいい人間なんか、僕はアキ達しか知らないってのに」

道路の向こうに、僕でも読める看板がある。

バーガー。

その後ろにKから始まる単語があるけど、それは知らない。

大昔の人は、どんな場所でハンバーガーを食べていたんだろう。興味があるので、道を渡ってみる事にした。

(調子はどうっすか、マスター?)

(歩き続けてるけど、クリーチャーがないんだよねえ)

(今ってドコかわかるっすか?)

(大聖堂から2つ道を渡った。ハンバーガーのお店を、覗いてみようと思って)

(……なるほど、ここっすね。その辺りだと、近くに図書館なんかもあるっすよ)

(本を集めた公共の施設だっけ。本はいくらでも欲しいけど、持ち帰ったらアキ達に遠

出したのがバレるなあ)

外出、それも完全武装で戦う気満々の遠出がバレたら、間違いなく怒られる。

僕は夕方前に帰って水浴びをして、バスの屋根でムービーを観ていた事にするつもりなのに。

(図書館の向かいがエレメンタリー・スクールつす。軍が救出に向かった可能性は高いつすから、寄ってみてもいいかもつすねえ)

(エレメンタリー・スクール?)

(マスターより幼い子供達の勉強場所つすよ)

(おお。ならアンドロイドに殺される前に、そこでクリーチャーと救出部隊が戦闘になった可能性は高いね。行ってみるよ)

(気をつけるつすよ)

バーガー屋さんは、外から見ると限りでは清潔そうな場所だった。

その先にも、同じようなお店がある。

「これ、ガソリンスタンドだ。でもバスに積んであるポリタンクには、もうガソリン入れであるからなあ。素通りか」

(言い忘れてたけどエレメンタリー・スクールはガソリンスタンドを右折つすよ、マスター)

(おお、危ない。ありがとう)

右に曲がって次の道を渡ると、左は雑草の生い茂る広い場所だ。右には、集合住宅のような建物がある。大昔は普通の人でも銃を持っている事が多かったそうなので、スカベンジャー・ハントの途中ならすべて見て回る事になるのだろう。

それを考えると、スカベンジャー・ハントはかなり大変な仕事だ。

右手に大聖堂とは比べようもないけれど、少し装飾された感じの壁の建物。

「これが図書館か。なら、エレメンタリー・スクールつてのは向かいだね」

道路からエレメンタリー・スクールに入る前に、アサルトライフルをいつでも撃てるようにする。取り外し可能なショットガンもだ。

焦らず、ゆっくりと歩を進めた。

青々とした雑草の切れ目から僕を見る動物か何かの置物に見送られ、いくつか見える割れた窓なんかじゃなく、なるべく広そうな入口を探す。

「あった。トンネルみたいな入り口だね。おっと、臭うな。この臭いは……」

もしかしたら軍事ロボットは、臭いを感知できないのかもしれない。

ムービーでアサルトライフルにショットガンを付けるのは、切り込み役の優秀な人だった。鍵を壊したり、角を曲がった出会い頭に敵を発見したらぶっ放したり、ショットガンはそういう使い方の武器であるらしい。

トンネルのような入り口からエレメンタリースクールに足を踏み入れると、いよいよ臭いは強くなった。

暗い。

でも、問題なく辺りは見渡せる。

ショットガンを撃てる体勢で、ジリジリと廊下の曲がり角に接近。

廊下に飛び出せる位置で歩を止め、足場をしっかりと確認した。カラス片などはないが、紙クズなどは散乱している。

深呼吸。

何がいてもショットガンを撃つ。

そう決めて、飛び出した。

「隠れてても臭いでバレバレなんだよっ！」

巨体。

ショットガンを撃つ。

飛び散る肉片の左右とその後ろにも、手足の長いクリーチャー。

ショットガンじゃ間に合わない！

アサルトライフルのトリガーを引きつばなしにした。

轟音が連続する。

「君達は群れないんじゃないのっ!？」
マガジンの30発はすぐになくなった。
クリーチャーはまだまだいるのに、だ。

帰還

「くっ。……ここは退くべきっ！」

一目散に逃げ出す。

僕が一番近い位置の足長クリーチャーは銃こそ持っていないが、長くて太い木の棒を手持っていた。あんなので叩かれたら、僕なんて片手でも即死だろう。

トンネルのような入口の向こう、夏の陽射しの下に戻ると、僕は冷静になったのか、ようやく本来の目的を思い出す。

走りながらマガジンを交換したアサルトライフルを背負い、PDWを抜いた。

「次はこれを試さなきゃ。構えは、たしかこうだったよね」

片手で撃てるほどの大きさでも、アサルトライフルのようにしつかり両手で構える。

ティファニーがPDWを2つも僕に持たせたのは、緊急時には両手でワンマガジンをぶっ放せという意味もあると思う。でもそれ以外の余裕がある時は、アサルトライフルほどの銃を3丁も持っていれば弾切れの心配や、銃が破損した時のリスクが減るからだ

ろう。

そしてこんなに多くの武器と弾薬を携行しても役に立てると判断してくれたのが、何よりも嬉しい。

「そうだ。トリガーを引きつぱなしじゃ、まるで新兵じゃないか。特殊部隊は、たしかこう撃ってた」

足長クリーチャーは動きが遅い。

入り口に向かって歩く先頭に銃口を向け、一瞬だけトリガーを引いた。

タタツ！

「違う。これじゃ2発だ。もっかい！」

それでも2発の銃弾を顔面に受けた足長クリーチャーは、吹っ飛んで起き上がったは来ない。

やはり小さなPDWでも、威力は充分だ。

タタタツ！

3発。

思った通りにPDWは弾を吐き出してくれた。

「よしっ、この調子！」

撃っては走り、撃っては退がる。

マガジンを交換して左のPDWと交換し、そのマガジンを撃ち切ってようやく足長クリーチャーは残り3匹に。

移動し過ぎて、もうエレメンタリースクールが遠くなっている。

「最後はこれ。マグナム、だっけ。ムービーじゃこんなの撃ってる人はいなかったなあ。・・・ああ、アサルトライフルがあるのにハンドガンは使わないか」
ベレッタと同じ構え。

そういえば、僕はベレッタの射撃訓練をした記憶がない。

なぜだろう。

思いながら、トリガーを引いた。

ドオンッ！

「っー」

音と反動がハンパじゃない。

筋なんかは痛めていないようだけど、銃声がバスにいるティファニーまで届いたんじゃないだろうか。

「ハンドガンで上半身に穴が空くって、何の冗談？ この威力なら、パルスガンを持つより良いんじゃないのかな」

しっかりと反動に備えて、もう1射。

「よし、次は片手で。ちょっと怖いけどバイクの運転中とか、PDWの弾が切れたりした時にベレッタと一緒に使うならやるしかないよね」

ドオンッ！

わざと左手で撃つてみたが、思っていたほどの衝撃ではなかった。

「うん、これならバイクで走りながら撃てる」

（やっつてるっすねえ、マスター。どうっすか、新装備は？）

（全部試したけど、どれも大満足。ありがとうね、ティファニー）

（いえいえっす。試射が終わったなら、もう戻った方がいいかもっすよ。アキ達が、無線にマスターが参加しないのを怪しんでるっす）

（……うあ。それはヤバイね。エレメンタリースクールの中を漁ってないけど、戻ろっかな）

（それがいいっす。マスターは1人でベッドルームで手仕事中心で言ったたら、カレンさんが今すぐ引き返すって騒いでたっすから）

（なに言ってくれちゃってんのさ）

来た道をそのまま引き返してもつまらないので、エレメンタリースクールの前の道を直進。大聖堂を発見する前にバイクで通った、大きな通りまで歩いてみる事にする。

「ガソリンスタンドの交差点を真っ直ぐで、あの道に出るはずだよね。……へえ。大聖

堂ほどじゃないけど、変わった形の建物が2つもある。知識があれば、見るだけで楽し
いんだろなあ」

思った通り、その道を行くと大きな通りにぶつかった。

交差点の向こうには、建物の中に並んだクルマが見える。

「あれがクルマ屋さんかあ。ホントにお店で売ってたんだ、クルマって。こっちは、湯気
の出てるカップの看板？ ならここは、コーヒーとかを飲ませるお店かなあ。……お
お、中はキレイ。忘れられた時代の素敵なカップとか、アキが喜びそう。でも、早く帰
らなくっちゃ」

また道路の上の道路を渡る。

そしてその手前にあるビルの1階にも、コーヒーのお店があった。忘れられた時代の
人は本当に、コーヒーが大好きだったらしい。

バイクで通った時にはそうだと気づかなかった道路の上の道路を渡り切ると、バスと
その屋根で手を振るティファニーが見えた。

「おかえりなさいっす、マスター」

「ただいまー。準備してから屋根に行くねえ」

「はいっす。あ、弾薬箱は荷台っすから、補充してくださいっす」

「はい」

それならばとまずは荷台に行き、冷蔵庫を倒したような弾薬箱から、撃ち切ったマガジンにそれぞれの弾を詰める。

バイクを見ると運転がしなくなるけど、今日は休んでいる約束なのでなんとかガマンした。

ベッドルームで汗を拭き、下着だけ着替えて屋根に上がる。

「ただいま、ティファニー」

「おかえりなさいっす。テーブルにゴハン置いといたっすよ〜」

「おおっ、ハンバーガー。ちようど食べたかったんだよねえ」

「だと思っただっす」

いただきますをして、ハンバーガーにかぶりつく。

僕が荷台にいる間に、温め直してくれたのだろう。キッチンには電子レンジという便利な調理器具があつて、アキがそれを見てとても喜んでいた。

ラップの確保が最優先つて言つてたけど、地下鉄で見つけられてるといいな。

「忘れずにチャンネルを戻すつすよ、マスター」

「……ほうらつら」

「アキがいたら『物を口に入れたまま話さないっ！』つて怒声が飛んでたつすね」

「だねえ」

(ああもう、またヘビのクリーチャーよ！)

(撃ちまくれっ、カレン！)

(残弾が心許ない。アキ)

(そうね。これを始末したら帰りましょうか)

(大変そう。弾を持って援護に行こうか、アキ?)

(ジョン、起きたのね)

(やつと終わったか、ジョン)

(おかずは誰の下着? そう、カレンお姉ちゃんの……)

おかずがなにを意味するのは知らないが、カレンの口調からしてロクな事ではないと思う。

(んー。どうも地下にいるクリーチャーは、野放しみたいなのよね。たぶんだけど、アンドロイドやロボットは食べられないからじゃないかしら。シカゴまで地下鉄のレールの上を進む事も出来るけど、この感じじゃ戦闘音がかなり出るわ)

(なら、地上を進むしかないか)

(そうね)

(それなんつすけどアキ、大荷物を持ってシカゴをうろつくのはさすがにキツイつすよ)
(ええっ!? そんな事を言われたって、武装して人前に出られる訳ないじゃない。それ

に車両で走ってたら、すぐに外部からの侵入者ってバレるんでしょ？」

（そうっすよ。だから、方法は2つ。隠し持てる武器だけでオクトを殺るか、車両で急襲してオクトを殺るかっす。地下鉄でせめてシカゴの中だけでも移動可能なら、夜間に駅から出て奇襲って手もあつたんっすけどねえ）

目的の達成が困難になったか。

僕なら戦闘車両を修理してシカゴに突入するが、アキ達はその時間すら惜しいだろう。いつオクトが西海岸への攻撃を始めるかなんて、僕達にはわからないのだ。

（……すぐに答えは出せないわ）

（当然っす。ちなみに武器やインカムなんかの装備、それと戦闘車両を修理するなら、その弾を集めるまで含めて約10日くらいかかるっす）

（ふうっ、ヘビの排除完了っす。まあバスに戻ってゆっくり考えようぜ、アキ）

（それがいい）

（そうね。じゃあ、戻りましょう）

アキがすぐに帰ると言ってから、無線が切れる。

「ティファニー、戦闘車両を使うならどれになると思う？」

「戦車は足が遅いから論外、こっちは少人数なので兵員輸送車ほどのスペースはいらない。選ぶのは戦闘装甲車っすね、たぶん。アキもジャニスも」

「そのの戦闘が入ってるムービー、ある？」

「もちろんっす。装甲車での市街戦、それと小隊で敵施設へ急襲するムービーを転送するっすね」

「お願い」

タバコを吸いながらムービーを見る。

軍用デバイスの画面ではタイヤが8つもある装甲車が猛スピードで街を駆け抜けながら、大男が屋根の大きな銃で敵を撃ち殺していた。

「ジャニスの使ってる銃みたいだ」

「あれは軽機関銃、それは機関銃っすから」

「親戚みたいな感じかあ」

「まあ、親みたいなものっすね」

次はクルマより少し大きな4輪車。

「普通のクルマみたいのものあるんだね」

「2本目のムービーなら、警察の装甲車っすね。速度を取るか、武装の充実を取るか。ジャニスは前者で、アキは後者っぼいっす。マスターならどっちっすか？」

「当然、速度！」

「……だと思ったっす」

「だって装甲車が発見されてオクトに連絡される前に襲わないと、奇襲にならないじゃん」

「そうっすねえ。電話は使えないんで一般人になら発見されてもいいっすけど、治安部隊は無線機を持つてるっすから。突入は夜明け前くらいにするにしても、速度は欲しいっすねえ」

ムービーを見ながら、装甲車を使う場合に僕がするべき事を考える。

運転がジャニスなら僕が機関銃で、ジャニスが機関銃なら僕が運転だろうか。

そしてオクトのいる建物に突入するなら、装甲車を守る役割はどうするべきか。どうしたって、逃げる足は必要だ。

そうだ。アキが姿を消し、僕が建物に突入して大暴れする間にオクトを探すのはどうだろう。いや、それだとアキが危険すぎるか。

「んーっ、むむむ……」

「悩んでるっすねえ」

「まあ、僕が悩んでも意味ないんだけどねえ。でも考えておくのは、ムダにならないと思うんだよ」

「その通りっすねえ」

それから1時間ほどで、難しい表情のアキをしたアキを先頭に3人は戻って来た。

汗を流してから上がってくるそうなので、クルマの運転と機関銃の撃ち方のわかるムービーを見ながら屋根で待つ。

「うーっす、ただいま」

「おかえり、ジャニス。つてもうビール？」

「そうだよ。ほら、ジョンも飲みな」

「もう、仕方ないなあ」

「珍しく素直だな？」

「実はちよつと飲みたかつたんだ。昨日も」

「……そうか。カンパイだ」

「うん」

軍用デバイスの中のムービーをジャニスと見て、運転や機関銃の操作を質問する。

そうしているとカレンが屋根に来て、ただいまと言いながら僕の膝の上に座った。

「おいこらカレン、ジャマだったの。今アタシはジョンに、運転と機関銃の撃ち方を教えてんだぞ？」

「こんなにひつつかないで教えればいい。偶然をよそおつてムダに大きいおっぱいを当てるなんて卑怯」

「ジョンの軍用デバイスを見ながらなんだから仕方ねえだろ！」

計画

珍しい事に、最後に屋根に来たアキも手に缶ビールを持っていた。

音を立てて乱暴に椅子に座り、アキが缶ビールを呷る。

「荒れてるなあ、アキ」

「そりゃ荒れもするでしょ。私は、シカゴに潜入するのが簡単な事だと思ってたのよ。ちよつと考えれば、わかるはずなのにね」

「まあ、まだ動くに動けねえんだ。気楽に考えようぜ。そうだ、ジョンならどうやってオクトを殺る？」

それはムービーを見ながら、ずつと考えていた事だ。

「……まずシカゴのアンドロイドの生活圏の手前まで進み、ティファニーを偵察に出す。オクトのいる建物までの道に障害はないか、治安部隊に妙な動きはないかを見たら、明け方まで待機してもらおう。明け方に僕達は突入開始。姿を消したアキを僕がバイクに乗せて、オクトのいる建物へ。アキは姿を消したまま階段で上へ。ティファニーと合流

した僕が入り口で暴れ回れば、オクトのいる階は特定しやすいと思う」

「んでオクトを殺る、か」

「うん。そこまですれば治安部隊はおそらく戦闘車両でオクトのいる建物に駆けつけるから、無線でタイミングを合わせて背後か横からジャニスとカレンの装甲車がそれを叩く。そこで僕とティファニーが階段でアキと合流。その前にアキが発見されたり、苦戦しそうなら逃げ出して南から西海岸方面へ。潜伏場所を決めたら、僕がジャニスとバイクでバスを取りに戻る。その間、アキ達にはオクトの軍事ロボットが動かないか見てもらう」

「それは軍事ロボットを迎え撃つため、ジョン？」

「暗殺に失敗すれば、戦争。そう決めて動くしかないと思う」

「戦争って……」

本当なら西海岸まで行って、エージェントとガーディアンまで戦争に参加させたい。

一般人でも、武器さえ貸してもらえらるなら戦うという人だっているはずだ。負ければ、西海岸の人間は皆殺しにされるのだから。

そして僕達は、特殊部隊として軍事ロボットを効果的に潰していけばいい。

「……なんか、作戦として悪くねえな」

「でも、アキとジョンとティファニーが凄く危険」

「私はまだいいわ。ジョンとティファニーは、オクトの拠点に配置されているアンドロイドと軍事ロボットを正面から相手にするのよ。そして脱走や反乱に備えて基地かどこかにいる治安部隊に、背後から襲われるの。危険ななんてものじゃないわね」
やっぱりそう来たか。

「じゃあ、軽装でシカゴ潜入。PDWとハンドガンを装備した僕とティファニーが、オクトのいる建物に入る。アキは最後まで姿を消したままね。止められたらオクトに会いたいって言って、万が一会わせてもらえたら姿を消したアキが一撃。断られたら、そのアンドロイドを殺して、出会うアンドロイドを皆殺しにしながらオクトを探す。……正直、これの成功率は低いと思う」

「もしそれでやるとして、アタシとカレンは？」

「無線で呼ばれたら装甲車で迎えに来て、僕達を回収」

「そして離脱って訳ね。どうやらジョンは、どう動くにしても装甲車は修理するべきって意見のようね」

「戦争になるとしたら、僕達は特殊部隊として動くのがいいと思う。それには、足の速い戦闘車両が欲しい。バスはどこかに置いてベースにするんだ。急襲してオクトを殺すにしても、接近と離脱には足の速い戦闘車両が必要でしょ。時間がないと焦って失敗して打つ手を失うより、充分に準備を整えて、失敗してもやり直す前提で作戦を開始した

い」

誰も、何も言わない。

そんなに的外れな話だったかと顔を見回すと、3人は神妙な顔で頷き合ってからティファニーを見た。

「まだまだつすよ。マスター。ちなみに誰が死んでもいいからオクトを殺すなら、どんな作戦つすか?」

それは、考えるだけは考えた。

でも、あまりに危険すぎる。全員がだ。

「口に出す事すら迷うような作戦なのね」

「言えよ、ジョン」

「言うだけなら問題ない」

「……ティファニーを偵察に出して、オクトの外出を待つ。出て来たなら、拠点から遠く離れてから装甲車で襲う。成功ならすぐ逃げる。失敗なら僕とカレンはバイクで、オクトが逃げ帰る拠点への道に。スナイパーライフルで仕留められないなら、バイクで突っ込んでマグナムで撃ち殺す。これは装甲車での襲撃と、スナイパーライフルでの狙撃を逆にしても使える作戦。その場合は、準備に少し時間がかかるけど」

「オクトが出て来ないなら?」

人間なら、家から出ない人なんていない。生きていけないからだ。

でも、相手はオイルさえ補給できていれば砂を舐めてでも動いていられるアンドロイド。当然、何日待っても外出しない事態も考えておくべきだろう。

「国境の見通しのいい場所の高い建物を選んで、そこに狙撃でロボットを倒すのに最適な銃を持ったカレンを配置。ティファニーと姿を消したアキが、アイテムボックスに水と食料を入れるだけ詰め込んでシカゴ潜入。僕とジャニスは装甲車で軍事ロボットや治安部隊に戦闘を仕掛ける、カレンの狙撃バックアップを受けられるように立ち回ってね。最初は数体の軍事ロボットや小隊が来るだけだと思うけど、僕達が敵を倒し続ければ戦力は集中させてくるはず。でもそれには、時間がかかるでしょ。仕掛けるのはシカゴの近くだから、オクトがいる拠点のアンドロイドや軍事ロボットが回される可能性は高い。そこを、アキとティファニーが狙う。可能なら、アキとティファニーの突入に合わせて僕達とカレンも合流。誰か1人をアキとティファニーの援護に向かわせる。残る2人が装甲車で治安部隊を引っ張り回して、オクトの拠点からの離脱は状況を見て方法を決めるって感じ」

「戦争を仕掛けながら、暗殺も狙うって作戦ね」

「これだと、全員が死ぬかもしれない」

「戦争のやり方はもちろん、戦争をするって発想すらアタシ達にはなかったのに

……」

自分でも不思議だけど、戦争のやり方ならいくらでも頭に浮かんでくる。

「他にもあるけど、アンドロイドを巻き込んだじゃうからねえ」

「どういう事？」

「大昔の爆弾かミサイルで、建物ごとオクトを木っ端微塵」

「さすがに、それは……」

「過激だなあ、おい」

カレンが立ち上がる。

どうしたのだろうかと思っているとカレンは車内に消え、たくさんのビールと缶詰、それにスナック菓子を持って戻って来た。

「おお、気が利くなあ」

「こんなに贅沢していいの、アキ？」

「今日くらいは、良しとしましょうか。全員、好きなだけ食べて飲んで。ティファニーはオイルでいい？」

「カレンたんが言ってた最高級品つす！」

「そうね。じゃあ、飲み直しましょうか。乾杯」

「カンパイ！」

ビールは、あつという間になくなった。

今も冷やしているそうだけど、とても間に合わないらしい。

なので茶色の匂いのキツイお酒がグラスに注がれて配られたのだが、それを飲み始めてからのアキ達は手に負えない状態だ。

ジャニスは僕がなにか言う胸に僕の顔を強く押し付けるし、カレンはツマミだと言つて僕の股間に顔をうずめてはグラスを傾ける。

一番酷いのは、アキだ。恥ずかしいけどジョンになら、なんて言いながらただでさえ短いスカートを捲り上げているのだ。

「笑つてないで何とかしてよ、ティファニー！」

「イヤつす。カレンたん、マスターのはまだ反応しないっすか？」

「まだ。でも頑張る」

ヤバイから頑張らないでと叫びたいが、それを口に出したら何かが終わりそうな気がする。

僕は冷や汗を流しながら飲んでいたのでせっかくのお酒でもあまり酔えず、酔い潰れた3人をベッドルームに運んでから運転席の後部座席で1人で眠った。

「あら、ベッドにいないと思つたらこんなトコで寝てたのね」

「……おはよう、アキ。顔洗つて歯磨きしてくる」

僕が洗顔と歯磨きを終えて完全装備に着替えても、ベッドのジャンスとカレンはピクリとも動かない。心配になったので口元に耳を寄せてみると、どちらも呼吸はしっかりしていた。

なので、放っておく事にする。

屋根に上がってテーブルに着くと、アキがコーヒーをくれた。

「ありがとう」

「苦味に慣れたら夏でもホットコーヒーなんて、ジョンもこの国の人なのねえ」

「ジャンスとカレン、しばらく起きそうにないよ」

「人の事は言えないけど、かなり酔ってたから仕方ないわよ」

「アキは昨日の記憶、あるの？」

「……そういえば、ウイスキーを飲んで少ししてからの記憶がないわね。飲み過ぎたかしら」

「安心したよ。ティファニー、今日の作業は？」

「銃器とインカムの修理つすねえ。それも夕方には終わるつすから、装甲車を直すのかどうかは今日中に決めて欲しいつす」

「ジャンスとカレンにも相談してからだけど、修理してもらおう事になると思うわ」

「了解つす」

「10日だけ、装甲車が直るまで。今のうちに街を回りたいけど、ジャンスとカレンは起きそうにないなあ」

あんなになるまで飲んで、昼まで起きて来ないかもしれない。それに起きたとしても、二日酔いで見張りなんてムリだろう。

「街を回るって、何か探すの。ジョン？」

「バイクだけならまだしも装甲車が加わるから追加のポリタンクを探しておきたいし、軍事ロボットの見ている物をアンドロイドも見られる訳じゃないでしょ？ アンドロイドが見落としての武器とか、もつとあるはずなんだよね」

「なるほど。それもそうね」

「行くならバイクっすか、マスター？」

「そのつもりだったよ」

「なら、アキを乗せて行ってくればいいっす。見張りは修理しながらでも出来るっすから」

「いいの？」

「もちろんっす」

「アキ、どうする？」

「私が行かなかったら、1人で行くって言うんでしょ。行くなら朝ごはんを食べてから

ね」

「わかった。ガソリン補給して、バイクの点検しとくね」

ハシゴを使って屋根から下り、荷台からバイクを降ろしてガソリンを入れる。

点検は念入りにやったが、どこにも異常は見られない。万全の状態だ。

最後に布で磨き上げたバイクを見ながらタバコを吸っていると、屋根からアキの呼ぶ声が聞こえる。

屋根に戻るとテーブルには、おむすびとミソスープが並んでいた。

「わあ、おむすび大好きだ」

「こないだ作ったら、喜んでくれてたみたいだから。そこのお店で手に入れたマヨネーズを使ったツナマヨと、缶詰のオムレツを具にしてみたわ。さあ、食べましょう」

「うん。いただきますっ」

おむすびは、どちらもかなり美味しかった。

「お肉の入ったミソスープも美味しかったあ」

「スカベンジャー・ハントに出るなら、力をつけないとね。足りる？」

「うん。ごちそうさまでした」

「アキ、新しい銃とインカム。ここに置くつすよ」

「銃か。……射撃、苦手なのよねえ」

「だから反動が小さいけど貫通力のある実弾銃と、ハンドガンタイプのパルスガンつす。パルスガンはロケットやアンドロイドを一時的に行動不能にするから、剣を使うアキとは相性が良いはずつすよ」

「それは助かるわね。あら、マガジンは？」

「上にある四角いバツテリーつすよ」

「なるほど。ありがとうね、ティファニー」

「洗い物はやつとくつすから、いつてらっしやいつす」

「あら嬉しい。ありがとう」

「じゃあ行つて来るけど、何かあつたら無線で呼んでね？ それと2人乗りなら、アサルトライフルはジャマになるから置いて行く。良かったら使つて。まあ、クリーチャーの臭いはないけど」

「はいつす」

忘れられた時代の街

2人で屋根から降りて僕がバイクに跨ると、アキはなぜか不安そうな表情になった。「あ、もしかして僕の運転じゃ怖い?」

「そうじゃなくて、バイクに乗るのが初めてなのよ。ティファニーがミラーも付けたみたいだけど、スカートの中とか見えないわよね?」

昨日たつぷり見せられましたとも言えないので、笑顔で大丈夫だと言っておく。

なるべく安全運転はするけど足をタイヤに巻き込まれないようにだけ気をつけてと言うと、アキは真剣な顔で頷いてからリア・シートに乗った。

「それじゃ、行くよ?」

「お願いだから、ゆっくり走ってね。正直言うと、自転車ですら怖いのよ」

「はいはい。じゃあ、走りまーす」

バイクなら、バスでは通れない大聖堂前の交差点も抜けられる。戦闘車両の残骸や土嚢を避けながら進み、とりあえず直進してみることにした。

ノロノロ運転だが、直線に出ると僕のお腹に回されたアキの腕に力が入る。

(あら、銀行。ATMもあるわね。こんな時じやなきや、お札をこっそりいただくのに)
(アキのインカムも問題なく使えるね。ATMって?)

(大昔、銀行に預けてるお金を機械で引き出してた物よ)

(そういえば西海岸じゃ、昔のお金をそのまま使ってるんだっけ。ならオクトを殺した後にお金を集めて回れば、僕達は大金持ちか)

(それがそうじゃないのよ。西海岸で使えるのは、管理局が使用を認めた登録貨幣だけ。こういう廃墟で見つけたお金を黙って使えば、犯罪になっちゃうのよ)

(なら、なんで持ち帰るのさ?)

(管理局のカウンターに持って行けば、西海岸で使えるお札と交換してくれるのよ。まあ、レートはボツタクリだけどね)

(ふーん。都会って面倒なんだなあ……)

ポリタンクの入手は、こうして走っていればアキが場所の目星をつけてくれるだろう。帰りにそれを持ち帰って、装甲車が完成したら一人で出かけた時に見つけたガソリンスタンドにでも行けばそれでいい。

今は、忘れられた時代に戦闘のあった場所を探すべきだ。それも、大規模な戦闘のあった場所を。

(スーパーマーケットだわ。お酒も置いてたみたいね)

(飲み過ぎなければ、楽しくていいんだけどね)

(やつぱりこつちもクルマの残骸は放置。空港前の道路は、アンドロイドを捨てて行くから片付けただけみたい)

(バスより大きな車両を使つてると厄介だねえ)

ムービーには、バイクをぶつけたくらいじゃビクともしないんじゃないかと思える車両も映つていた。そんなのとやり合うなんて、考えたくもない。

(軍用でもなきや、どうにでもなるわよ)

(へえ。ねえアキ、右にある派手な看板つて何?)

(どれどれ。……ああ、あれは劇場の看板ね)

(劇場?)

(歌や踊り、お芝居なんかを楽しむ場所。西海岸にもあるわよ。裏通りの方だと下品なジョークを言うコメディアンとか、服を脱ぎながら踊る女の人も出てるらしいわ。だからジョンは、近づくのもダメ。右にあるビルの一階には、カーショップも入つてるわね)

(どれもこれも、街全体が宝の山だよねえ)

(私達がオクトを殺した後、シカゴのアンドロイド達が敵にならなければ、西海岸と取引なんかも出来るでしょう。アンドロイドと、人間。手を取り合えれば、いつかこの大陸

は安心して暮らせる場所になるかもしれないわ)

そんな日が来るなんて思えないけど、大昔の人達だって今の僕達の生活なんか想像もしなかっただろう。

なにがあるかわからない。それが、ヒストリーというものなのかもしれない。

(そのためにも、オクトは殺さなきゃね)

(ええ。なにがなんでも、ね……)

左前方のビル。

その前に、大きなクルマが横倒しになっている。それでも、その横をバスが通れる道幅があるので安心だ。

その手前でバイクを止めると、アキは迷わずに降りた。

ギアをニュートラルにしてスタンドを立て、エンジンをかけたまま僕もバイクを降りる。

アサルトライフルは持って来ていないので、PDWを抜いた。

「バックアップお願い」

「任せて」

「その銃を使うのは初めてでしょ、平気？」

「……だ、大丈夫」

アキが日本刀をいつでも抜ける構えで、ゆっくりと車両に近づく。夏の風に、クリーチャーの臭いは混ざっていいない。

それでも、動くものを即座に撃ち抜くつもりでそれに続く。アキはまず、クルマのトランクに手をかけた。上から下へ、ドアを開けるつもりらしい。

銃口をトランクに向けながら、ビルや道路にも気を配る。

鉄の軋む音。

それから、鉄がアスファルトを叩く。

「……何もなさそうね。軍事車両みたいだから期待したのに」

「でもこのクルマが、ここまで何かを運んだのは事実だよ」

「荷台の左右はシートになってるわ。軍の部隊をここまで運んだのなら、目的はホテルね。お偉いさんでも来てて、その時にクリーチャーが街に溢れたのかしら」

「中を探すなら、バイクのエンジン止めとくよ?」

「地下鉄には、見た事もないヘビのクリーチャーがいたわ。軍用ロボットは、外に出て来ないクリーチャーは放置してるみたいなのよ。かなり危険だから、ここは素通りしましょ。部隊を突入させて未帰還だったとしても、装備は室内戦用だし。アサルトライフルなんかは、もう充分あるわ」

「わかった」

バイクに戻り、またのんびり走り出す。

右を見ても左を見てもビル。圧迫感のせいなのか、まるで2人の巨人に見下されているような気持ちになってくる。

そのまま直進していると、前方に奇妙な細長い何かが見えて来た。

(アキ、なにあれ?)

(わからないわ。芸術作品か、あるいは何かの記念碑か)

(行ってみる?)

(進行方向だし、少し見てみましょうか)

細長い何かに近づくと、てっぺんに人間の形をした物が見えた。

(上に人間の置物が載ってる)

(私にはまだ見えないわ。目がいいのねえ。それじゃ、何かの記念碑かもね)

どうやら、僕達には関係のなさそうな物のようだ。

少しがっかりしながら進むと、細長い記念碑という物の土台まで見えて来た。関係ないなんて、とんでもない間違いだったかもしれない。

(彫刻が見えたわ)

(アキ、その下)

(え?)

（土嚢が壁みたいに積まれてる。きつと、あそこでクリーチャーかアンドロイドを迎え撃つたんだよ。土嚢が崩れてないから、相手はクリーチャーかな）

ビルが途切れた広く見晴らしの良い場所に、記念碑はある。

相手が誰であれ、迎え撃つにはいい場所だ。しかもこの視界なら、ムービーで見たRPGやロケットランチャーも活躍できる。

あの陣地がオクトの部下に漁られていないなら、それらがある可能性も高い。ウキウキした気持ちでバイクを止め、土嚢の壁に歩み寄った。

「崩して入っちゃおうよ？」

「私がやるわ。射撃が苦手だから」

「わかった。そういえばアキ、力があるんだったねえ」

「ジョン、またビンタされたいならそう言いなさい？」

「理不尽な……」

「女の子に力があるなんて言うのは、罵倒してるのと一緒。覚えておきなさい」

「……はい」

僕がPDWを構えると、アキが土嚢を崩し始める。

まず見えたのは、記念碑の土台。

そして土嚢のこちら側に落ちて転がった、人間のしやれこうべだった。

「立てかけたアサルトライフルに、眼窩が引つかかっていたみたいね」

「そんな状態で放置されてたって事は、最後の生き残りの人かな」

「そうかもね。偶然そんな体勢で死んだか、座り込んでアサルトライフルで自分の頭部を撃ったか」

「しゃれこうべの後頭部に穴が空いてる」

「そう。先に手を合わせせてもらおうね」

「うん」

アキはしゃれこうべだけでなく、記念碑を囲んだ陣地にも手を合わせた。

交代で僕も手を合わせ、崩れた土嚢に近づく。

「中はガイコツだらけよ。また具合が悪くなるといけないから、ジョンはここで待たな
い？」

「いや、なんでかはわかんないけど、ここは平気。嫌な感じがあまりしない。なんて言う
かなあ。覚悟して戦って散ったんだらうから、逆に褒めてあげたい、みたいなの？」

「……そう。この記念碑は、ソルジャーズ・アンド・セーラーズ・モニュメント。兵士達
を称えるための碑よ」

「へえ、今の僕みたいにかあ。偶然なんだろうけど、なんか感慨深いね」

「偶然ならね」

「なにか言った？」

「いいえ。臭いはしないわね。狭い簡易陣地だし、隅々まで見ましょ」

「うん」

中にはいくつものガイコツが転がっていた。それと、たった一匹分のクリーチャーらしきガイコツ。

それを避けて歩くのだが、コンバットスーツの下に隠れていたらしい軍事用デバイスを踏んでしまった。もう部品取り用の予備もあるので地図表示機能が生きている貴重品でもなければ僕達には必要ないらしいが、悪い事をしてしまったような気分になる。

「ジョン、見てあれ」

「……やっぱりあったか、RPG。しかも10発くらいあるね」

「フェンスを出た夜は、RPGって何って言うたのね。ティファニーのムービー？」

「うん」

「ジョン、これだけは言うておくわ」
アキが振り返って向き直り、今まで見たどんな表情よりも真剣な瞳で僕の目を見詰める。

「なにかな？」

アキの汗が、整った顎先から落ちる。

その小さな染みを見て、夏が嫌いになりそうな気がした。

「ジョンが戦えなくなつたつて、戦わなくなつて私達は仲間よ。いつまでも一緒。ジャニスとカレンも同意見。それだけは、忘れないで」

「ん。わかんないけどわかつた」

「忘れなければそれでいいわ。RPGは、装甲車が完成したら取りに来ましょう」

「だね。こんなには運べない。でも、1発くらいは持つて帰りたいな」

「じゃあ、私のアイテムボックスに入れておくわ。飲み物とお弁当以外は置いてきたから、1本なら入るはず」

「ありがとう」

RPGが置かれていた場所の対角線には、思った通りロケットランチャーもあった。

他には、地雷や手榴弾がありがたい。

すべて装甲車が完成してから取りに来る事にして、簡易陣地を出る。

バイクに乗つて次の交差点まで進むと右に大聖堂のような建物があったので、僕は思わず右折していた。

(アキ、左前方。大聖堂に似てない?)

(教会みたいね。土嚢も戦闘車両もなし。ちょうどいいから、あそこでお昼ごはんにしましょうか)

(うん。お弁当、なに?)

(悪いけど、またおむすびよ。具は違うけどね)

(やった。もしかして、中は焼きサハギン?)

(ええ)

(早く食べよう。もうここでもいいから)

(あらあら。運良くオープンカフェのテーブルと椅子もあるし、そうしましょうか)

パラソルの壊れたテーブルでおむすびを食べながら、午後の予定を話し合う。

アキはこのまま郊外に向かい、簡易陣地を探すべきだと言った。欲しいのは、軍用ロボットの残骸らしい。それがいくつかあればティファニーが修理して、僕達の戦力として使える。

戦争になれば、軍用ロボットは心強い味方だ。すぐに賛成して、最後のおむすびを飲み下す。

僕が水筒を呷ると同時に、インカムから爆発音が聞こえた。

「な、何事なのっ!?!」

(こちらティファニー。装甲車から軍用ロボットが降りて、いきなりロケットをぶちかましてきたっす!)

緒戦

バイクに走る。

僕がエンジンをかけると同時に、飛びつくようにしてアキガリア・シートに乗った。急発進。

前輪が浮いてアキが小さく悲鳴を上げるが、構わずに加速を続ける。

ローからセカンド。

そのまま交差点を左折しながら、サードへ。

(ティファニー、状況を)

(装甲車を修理したら車両の音を拾ったんで大慌てでジャンスとカレンたんを叩き起こし、バスの屋根に。そしたら封鎖された道の向こうに、装甲車が現れたつす。で、ドカーン。現在軍用ロボットは大聖堂前の車両の残骸を盾にして、メチャクチャに撃ちまくってるつす)

(退路は絶たれてないんだね?)

(はいっす。カレンたんが対物ライフルで1体を倒したら、軍用ロボットは亀が首を甲羅に引っ込めるようにして右手の小銃だけ撃ってきてるっす)

(バスの損傷は?)

(なしっす!)

(よし。すぐに僕が装甲車と軍用ロボットの背後を取る。そのまま少しだけ耐えて)

(了解っ、任せたっす!)

来た時はのんびり走ったが、その気になって飛ばせば数分で大聖堂に戻れる。

後は、アキをどうするかだ。バイクを停めた場所で待っていると、簡単には領かないかもしれない。

(アキ?)

(RPGはいつでも出せるわよ。装甲車にぶち込んでやるわ)

(ダメダメ。バイクを停めたら、RPGは僕にちょうだい)

(まあ、ジョンの方が上手く撃てるわね。それで私は?)

(バイクで待っ)

(イヤよ)

(やっぱりか。……姿を消して、僕の後ろに。見えないと撃っちゃうから、決して前には出ないで。途中で急に止まるから、気をつけてね。それとRPGを撃つから、真後ろも

ダメ)

(どうする気なの?)

(装甲車は、軍用ロボットじゃ動かさないでしょ?)

(あ……)

(出来るだけ姿は消したままで、危ない時はパルスガンを上手く使って)

(わかったわ)

大聖堂が小さく見えてくる。

迷わず歩道に乗り上げながら、エンジンを切った。

ブレーキはかけない。そのまま行きにアキがATMがあると聞いたビルに、バイクを隠すようにして停める。

降りるとアキは、何も言わなくてもRPGを出してくれた。

「……怪我なんかしたら許さないわよ?」

「もちろん」

「約束だからね?」

「わかってるって。アキこそ、今夜はお酒は禁止ね。ガマンできなくなっちゃいそうだからさ」

アキの耳に口元を寄せて言う。

口をポカンと開けて顔を真っ赤にしたアキが、音もなく姿を消す。記憶がないというのは、どうやらウソだったらしい。

RPGを担いで、身を屈めるようにして走り出した。

見えている装甲車とその向こうの軍事用ロボットは、こちらに気づく気配などまるでない。まるでマヌケな鴨だ。

(ティファニー、タイミング合わせて出られる?)

(任してくださいっす、狙いは?)

(撃ち漏らした軍事用ロボット。RPGを1射。そのまま僕は、装甲車の運転席を狙う)

(いい作戦っす)

(じゃあ、よろしくね。……ブレイク・ア・レック)

(マスターこそ、ブレイク・ア・レックっす!)

見る間に装甲車が、軍事用ロボットが近づいてくる。

ムービーで、これを撃つ兵士は何度も見た。使い方は、頭に入っている。

心配なのは狙った場所に飛ぶかどうかだが、僕には根拠のない自信があった。

走りながら安全装置を解除。

(撃つぞっ!)
叫ぶように言いながら止まり、トリガーを引いた。

狙いは、戦闘車両の残骸を盾にしている軍用ロボットの中央にいる機体。シユボオツ！

そんな聞き慣れない音を発しながら、煙を引いてロケットが飛んでゆく。弾頭がなくなつたRPGを捨て、僕はまた走り出した。

(ジヨ、ジヨン!?)

アキは着弾を待つてくれるだろう。

爆発で飛散する鉄の破片を恐れないで突撃なんて、普通の人間にはムリだ。着弾。

とんでもない爆発音。

熱を孕んだ風が、僕の顔に襲いかかる。

でも、それがどうした。

(いくつすよー。オラオラ、ポンコツは道を開けやがれっす！)

ティファニーの笑い声。

飛んで来るクルマの残骸の破片。

躲せる。

首を捻つて小さく動かした顔の横を、それは通り過ぎた。

風の唸り。

肌に粟が立ち、得も言われぬ快感が背筋を駆け登る。

・・・ここが、僕の生きる場所だ！

アキの悲鳴はない。血の臭いもない。大丈夫、アキは無事。

確信しながら、装甲車のハッチに跳びつく。

クルマよりずっと小さな窓の向こうで、男が驚いている。

ハッチを開けながら鎖骨の辺りに装備しているナイフを抜き、そのまま男の首に突き立てた。

髪。

くすんだ金色のそれを掴んで力一杯引きながら、ナイフを抉りつつ後ろに倒れ込む。

(ジョン!?)

大丈夫。

言う前にハッチからもう1人、助手席にいた男が転がり出てきた。

ナイフを投げる。

それが胸に突き立っても男は怯まず、アサルトライフルの銃口を僕に向けた。

マグナムは間に合わない。首を振じ切ったアンドロイドの体を盾にして、なるべく体を縮こめる。

銃声も衝撃も来ないのを訝しんでいると、何かが地面に倒れ込むような音。

(パルスガンだからまだ死んでないわよ、ソイツ！)
(ありがとうっ)

跳ね起きてマグナムを抜く。

「バァイ」

動けない男の後頭部に、銃弾をブチ込んだ。

(ティファニー、状況を)

「ここにいますよ、マスター！」

笑いを含んだティファニーの声。

ナイフをアンドロイドの死体から引き抜いて装備し直しながらそちらに目をやると、軍用ロボットの頭部を素手で引き千切るティファニーがいた。

「どんな馬鹿力してるんだか。残りは？」

「これで最後っす」

「ジャニスとカレンは無事？」

「はいっす」

(アキはバスに戻って出発の準備。時間はかけられないよ)

(わかったわ)

「ティファニー、バスと合流まで装甲車の運転してもらっていい？」

「当然つす。バイクを取りに行くつすよね、乗ってくださいいつす」

「ありがとう」

右に回らず、左から装甲車に乗り込んで助手席に移動する。

すぐに乗り込んだティファニーはエンジンがかかったままなのでギアをバックに入れ、見事なUターンをしてからバイクを隠したビルへ向かった。

1発しか撃っていないけど、マグナムのマガジンを新しい物に変える。

「運転は任せて良さそうかな」

「はいつす」

「タイヤが4つの、小回りの良さそうな装甲車。でも武装は後部座席の機関銃だけ、か」

「ライト・アーマーつすね」

「なにそれ？」

「装甲と武装を犠牲にして、速度と兵員輸送能力を両立した装甲車つす」

「なるほどね。あ、バイクはそのこのビル陰。バスまで先導するね」

「はいつす」

急いでバイクのエンジンをかけ、装甲車でも着いて来れるスピードで迂回してバスを
目指す。

辿り着いたバスでは、アキとカレンが後部ハッチを開けて待っていてくれた。

「バイクの積み込みは任せて。これからどうするのがいいと思う、ジョン？」

（せめてRPGやロケットランチャーがないと、戦争にならない。記念碑まで戻ろう。ジャニス、バスは装甲車に着いて来て）

（わかった）

「さっき倒した軍用ロボット達を回収する時間はなさそうね……」

「本当なら、記念碑まで戻るのも危険なんだ。悪いけど諦めて」

「もちろんよ。それにしても、いきなり状況が動くなんてね」

走ってバスの運転席からベッドルームへ。

僕のアサルトライフルは、安全装置をかけてベッドの上に置かれていた。

それを背負って、また走って装甲車へ向かう。僕が助手席に乗り込むとティファニーは、笑顔で新しいタバコの箱を渡してくれた。

「わ、助かる。タバコまで頭が回らなかった」

「だと思っただつす」

「アキとカレンがバスに乗り込んだ。行こうか。来た道に戻って、この大通りを左折したら後は真っ直ぐ。バスも通れる道だから、そのまま記念碑まで」

「了解っす」

タバコを吸いながらこれからの事を考え始めると、ティファニーが灰皿を引いて出し

てくれた。バスの運転席にある物に似ている。

クリーブランドからは、すぐに離れるべきだろう。

問題は、そのルート。

使った事のある道とわかりやすい道は、危険かもしれない。

「……まさか、こんな形で戦争が始まるとはね」

「先手を取られて、それを跳ね返して。でも装甲車をいただいたつすから、初戦はマスタアの勝ちつす」

「最後に勝たなきゃ意味がないのが戦争でしょ」

「まあ、そうつすねえ」

（アキ、軍用デバイスの地図でクリーブランドを出るルートを探してくれない？）

（わかったわ。来る時に使ったエリー湖沿いの道は、待ち伏せされてる可能性があるのね）

（僕がオクトなら襲撃の成功を確信していても、何体かの軍用ロボットを移動させとくかな）

タバコを2本灰にすると、記念碑の簡易陣地に到着した。

ティファニーと装甲車を降りて、急いでRPGとロケットランチャーを回収する。

「地雷は全部、装甲車に。他は半々で」

「はいっす〜」

「カレン。こっちはいいから、バスのキッチンから飲み物や缶詰を装甲車に運んでくれる?」

「わかった」

簡易陣地と装甲車を何度も往復し、後部座席のさらに後ろにある兵士6人ほどを運ぶためのスペースに武器を運ぶ。飲み物や缶詰もそこだ。

それが終わると、アキがバスではなく装甲車の後部座席に乗り込んだ。

「アキ。装甲車の機関銃を任せていいなら、僕はバイクで動くけど?」

「ムリムリ。パルスガンを命中させたのだから、マグレなんだから。日本のJKが機関銃大好きっていうのは幻想よ! ペガサスファンタジーよ!」

「はあ。なら仕方ないか。で、ルートは?」

助手席に乗り込む。

「来た道に戻る形で直進して、右折。道が見えたら言うわ。野球場を右に、墓地を左に見ながらヘキサゴンステイツの勢力圏から出る感じになると思う」

野球場が何かは知らないが、墓地ならわかる。

縁起の悪そうなルートだけど、非常時なんだから仕方がない。

「出すっすよ、マスター?」

(お願い。行くよ、ジャンス)

(おうよっ!)

装甲車が走り出す。

どこで見つかってどこまで観察されていたのかは知らないが、ティファニーが装甲車を修理し始めてすぐの襲撃だ。相手の準備は整っていると思っておいた方がいいだろう。

次の勝負は、今から向かう脱出ルートをおクトが読んでいるかどうか。

「……読まれてたら、キツイ戦いになるね」

「そうっすねえ」

「どうやって発見されたと思う? 僕はムービーで見た凄く小さな偵察機が怪しいと思うんだけど」

「無人偵察機を運用となると、オクト並みの人材がかなりの人数必要になるっす。偵察ドローンあたりじゃないっすかねえ」

「あの空に飛ばすオモチャみたいな、小さな機械かあ」

「あれなら、オクト1人でも飛ばせるっすから」

「よし、シカゴに行ったら街中に『オクトは暇人』ってラクガキしてやる」

「いいっすね。手伝うっすよ」

覚悟

しばらく直進すると、アキが右折する道をティファニーに指示した。

クルマの残骸はあるけどそれなりの道幅があるので、なんとか進めそうだ。

「地雷を仕掛けたくなる道だけど、僕達がここを逃げ帰る可能性もあるしなあ」

「そうっすねえ。リモコン操作の爆薬でもあれば、捨てる気で仕掛けてもいいっすけど」

「地雷と対人地雷しかないからね」

「ここはガマンっす。マスター、クレイモアはいくつあるっすか？」

「8だね」

「ムダ使いはできないっすねえ。お、プログレッシブ・フィールドが見えたっす」

「あれが野球場ってやつか。アンブツシユがあるなら、あの辺りかな。アキ、席を交代。

僕はいつでも機関銃を撃てるシートにいたい。戦闘になったら、出来るだけ姿勢を低くしてね」

「マスター。後部座席の後ろの小隊を乗せるスペースには、マスターのスナイパーライ

フルもあるっすよ?」

スナイパーライフルを撃った事なんてない。

それでも僕は、ムービーで見たどんな兵士よりも腕の良いカレンの狙撃を何度も間近から見ている。

やれるんじゃないか?

「……良い事を思いついた。さり気なく速度を落として。もしドローンを見つけられたら、僕とカレンがタイミングを合わせて撃ってみる」

「じゃあ、地雷を仕掛けたフリでもしましょうっす」

(いいね、任せた。少し止まるよ、ジャニス。カレンはスナイパーライフルを持って、屋根にいつでも飛び出せるようにしといて)

(あいよ)

(わかった。何でも撃ち抜いて見せる)

装甲車が止まる。

後部座席の機関銃手席に移動し、道の前後を警戒するフリをしながら空にドローンを探した。

(いた。西の空。高度はそんなでもない。アキ、スナイパーライフルを撃てる状態で僕の手握らせて。狙撃を気取られたくないんだ)

(わかったわ)

(ジョン。西の空に何かいて、それを撃ち抜けばいい?)

(うん。飛んでるのは、ドローンっていう偵察用の小さな機械。5つ数えたら、2人同時に狙おう)

(1人でいい)

(いや、でもさ)

(1人でいい。狙撃なら、負けない。ジョンにだって)

(……わかったよ。じゃあ、タイミングも任せる。お願いね)
(うん)

僕の出番はなさそうなので、タバコを出して啜える。

火を点ける前に、銃声が響いた。

西の空。

ドローンが落ちていく。

(さすがカレン！)

(まだ)

(えっ?)

もう1発の銃声。

落下していくドローンが、弾けたように軌道を変えながら真つ二つになった。

(……マジ?)

(はっはー。いいか、ジョン。アンタが何者でどんなに成長したとしても、カレンは狙撃、アタシは運転、それにアキは白兵戦。これだけは、何があっても負けない。だからその3つが必要な時は、迷わずアタシ達に任せな。いいね?)

(頷くしかないね。で、相談があるんだけど)

ドローンが他にも飛んでいないか探しながら、僕は迷っている。

落下中のドローンを狙撃するという神業に驚いて忘れていた、啞えたままのタバコに火を点けた。

(なにかしら)

(言ってみな、ジョン)

(大丈夫、カレンお姉ちゃんもジョンが好き)

(ありがと。ドローンは落とした。でも、この道の先には軍用ロボットが待ち受けている)

(なるほど。ルート変更ね)

(うん。それもシカゴに、つてのはどう?)

(なっ!?)

(ええっ！)

(ジョン、大胆)

地雷を仕掛ける芝居をするために装甲車を降りたティファニーが、苦笑しながら僕を見上げています。

煙を吐きながら笑顔を向けると、ティファニーも笑ってくれた。

「なんすか、マスターは『クレイジー・ジョン』とか呼ばれたい願望でもあるっすか？」
「いいね。ガイみたいでカッコイイじゃん」

「……やれやれっす」

(この近辺にアンドロイドがいるなら、ドローンを失ったオクトが損害を出す覚悟で僕達の行く手を偵察させる可能性もある。あまり時間はないよ)

(なんでそんな提案を、ジョン?)

(先手を取られた時点で、どうしようもないほど僕達は不利になった。あつちは僕達を始末するまで好きなだけアンブッシュを仕掛け、奇襲だっていつでも出来る)

(ええ。でもドローンを落としたから、それはそう簡単には出来なくなっただわ)

(なら、オクトはどうすると思う?)

(そうね……)

タバコを指で弾き飛ばす。

足元のスナイパーライフルを持ち上げて前方をスコープで覗いてみたけど、これなら自分の目で見た方が先に敵を発見できそうだ。

（可能な限り広範囲に軍用ロボットを配置して待ち伏せをしつつ、ってそういうえばティファニー。オクトは、あなたがアンドロイドだって見抜いたと思う？）

（今の人類が素手で軍用ロボットを引き千切れるなら、バレてないかもしれないっすねえ）

（愚問だったみたいね、ごめんなさい。可能な限り広範囲に軍用ロボットを配置して待ち伏せをしつつ、西海岸への攻撃が覚られたと知って準備を急がせると思うわ。私達を逃さなければ、西海岸にシカゴからアンドロイドが攻めて来るって知られる事はないんだし）

やっぱりそう考えるか。

（なら、シカゴは？）

（手薄になるってのかよ。逆に守りを固める可能性だつてあるんじゃないのか？）

（そう言うジャンヌスがオクトだったとして、偶然発見した僕達がたった5人で本拠地に突入して自分を殺そうとしている、なんて考える？）

（そりゃ、……ねえな）

（でしょ。おそらく装甲車を修理し始めた途端に襲いかからせたのは、西海岸にオクト

の計画を知らせるのを遅らせるため。バスだけなら、簡単に始末できると思ったんでしょ)

(そしてオクトは今、こちらを見失っている。アキ、ジャニス、ここは攻めるべき)

(だなあ。アタシは賛成だぜ)

(……ああもう。私だってそう思うわよ！ それでジョン、作戦は?)

決まったか。

賭けに近いけど、今はこちらに運がある。

装甲車で軍用ロボットを運んできたアンドロイドが軍人としての知識を持っていたら、戦闘車両の残骸の向こうから戦闘を仕掛けたりはしない。おそらくは、オクトの命令か静止が間に合わなかったのだろう。セオリー通り後方から攻撃を受けていたなら、ジャニス達はバスを捨てて逃げ出すしかなかったか、下手をすれば最初の攻撃で即死だった。

そしてドローン。それに気づけて、それを撃ち落とすほど凄腕のカレンがこちらにはいた。

ツイているうちに大きく賭けなければ、大勝なんて夢のまた夢。

(どこかにバスを隠して、バイクと装甲車でシカゴに突っ走る。今からこっちに向かわされる治安部隊がいるとすれば、クルマの残骸のない空港前の道を使うだろうからね。

後は、前に話した作戦の第一案)

(今から準備して、夜にはシカゴね。了解。バスは、さつき見かけた立体駐車場に置きましよう)

(しやあつ、燃えてきたぜ!)

(対物ライフルと、サブマシンガンと、パルスガン。……スナイパーライフルが持てない)

(装甲車に積んどけばいいです。じゃ、戻るつすよ)

(お願い)

来た道に戻って記念碑の近くの立体駐車場という場所の奥にバスを隠し、装甲車に移したRPGをアサルトライフル代わりに背負う。

そうした上でバイクの点検を始めると、僕に歩み寄る足音が聞こえた。これは、アキの音だ。

「私はもう後ろに乗ればいい、ジョン?」

「ジャニスとカレンが待機する、シカゴのアンドロイドの生活圏ギリギリで乗り換えればいいよ。もし敵の治安部隊が別ルートで走ってた時のために、僕はRPGを背負うし」

「了解。ごめんなさいね、こんな事に付き合わせて」

「これから住む街を守るなら、僕が戦うのは当たり前でしょ」

「……ありがとう。じゃあ、私は装甲車に乗るわね」

「うん」

エンジンをかける。

「僕はみんなを守りたい。力を貸して、……TT」

「バイクの名前つすか、マスター？」

「うん。今、決めたんだ」

「いい名前つす」

「ティファニーは機関銃手？」

「ジャンスとカレンさんの待機場所まではそうつすね」

「アキ達を頼むね、何があっても」

「……それが、マスターの願いなら」

頷く。

ティファニーもしっかり頷いてから、装甲車に向かった。

ギアをローに。

途中で治安部隊と出くわせば、無線でオクトに連絡される前に始末しなければならぬ。そのためのRPGだ。

「センシャまで出してくるようなら、TTで至近距離まで接近してRPGをぶちかましてやる」

後はティファニーに、アキ達を守ってもらうしかない。

見上げた装甲車の機関銃手席で、ティファニーは哀しそうに僕を見ていた。

(準備完了だ。ジョン)

(了解。装甲車ならバスとは違って、道路が塞がっても悪路なんかを走れるよね)

(よっほどじゃなければな)

(じゃあ、行こう)

シカゴまでのルート選びは、アキとティファニーに任せる。

アキ以外は地図表示機能の死んでいる軍用デバイスしかないし、文字だってティファニーが一番良く知っている。僕は言われた道を先行し、治安部隊がいなか確認しながら進むのだ。

橋を渡って、西へ。

覚悟だけはして出発したけど、それはムダだったらしい。

進むのは広い道でクルマの残骸が多く、装甲車でもギリギリだったりするからだ。

ティファニーは6時間もかからないはずだと言ったが、僕達がシカゴに入ったのは深夜0時を過ぎた頃だった。つまり、8時間は走り続けていた計算になる。

車両で身を隠すには最適だと、僕達はまたシカゴの立体駐車場にいた。

「アタシとカレンは、ここで待機か」

「ここがベストっす。1つ向こうの通りからは、アンドロイドの生活圏。その交差点を右折して直進するだけで、オクトのいるビルの前まで行けるっすから」

「そのビルまでは？」

「飛ばせば5分っすかね」

「アンドロイドの生活圏って、思ってたより狭いのね」

「今はそれがありがたいけどね。ティファニー、お願いだからムチャはしないでよ？」

「はいっす。真っ暗だから発見される危険は少なくて、逆に治安部隊の車両はヘッドライトで遠くからでもわかるっすから」

「電気はないの、シカゴって？」

「燃やすゴミもなくなつて、発電所がマトモに動いてないっすからねえ」

言われてみれば、こっちの立体駐車場にはゴミがない。クリーブランドの方は、空き箱や空き缶なんかが風に揺れていたのに。

オクトはわざわざ周辺の街からゴミを集めてまで、ハツデンシヨを動かす気はないのか。

「じゃあ、いつてくるっす」

「気をつけてね。何かあればすぐバイクで迎えに行くから、その時は僕とティファニーで治安部隊を引つ張り回してから逃げ出してやろう」

「そうならないように、気をつけて行くっす」

水着ではなく普通の服を着たティファニーが、手を振って立体駐車場を出て行く。

装甲車に積んでいたポリタンクを出してバイクに給油しようとする、ジャニスが手伝ってくれた。

「ありがと、ジャニス」

「いいさ。でも、そんなギリギリまで入れなくてもいいんじゃないかい？」

「……バイクで逃げる状況もあり得るから」

「そうかい」

ガソリンは燃える。そして、爆発する。

それも、アキ達が教えてくれた事だ。

TT。

バイクに名前なんて付けたのは、みんなを助けるためなら僕と一緒に灰になつてもらうと考えていたからかもしれない。

僕は、最低の人間だ。

突入

（こちららティファニー。目標地点まで治安部隊の姿なし。これより合流まで身を潜めるっす）

（了解。姿を消したアキを乗せてすぐに向かう）

「気をつけろよ、ジョン」

「危険ならジャニスとカレンお姉ちゃんを早目に呼ぶ。約束」

「うん、もちろん。ジャニスとカレンも気をつけてね。装甲車を玄関に横付けしたら、いい的になるんだから」

「わかってるさ。ジョンの指示通り、対戦車兵器を持ち出されたらすぐにジョン達の後を追う。な、カレン？」

「ん」

最後の一本かもしれないと思いつながら根本まで灰にしたタバコを、立体駐車場の地面で踏み消す。

アキ。

頷き合う。

TTに跨ると姿を消したアキがリア・シートに乗って、しっかりと僕の胴に手を回した。

「行くよ」

「ええ。私の事は気にせず、飛ばしていいわよ」

「ありがと」

立体駐車場を飛び出す。

最初の交差点を右へ。

電気がなくてエレベーターというのが使えないので、オクトは5階建てくらいのビルに住んでいるらしい。

(静かだ。アンドロイドの生活圏なのに)

(それに真っ暗ね。ゴーストタウンみたいで気味が悪いわ)

(ロウソクも貴重品っすからねえ)

(この闇に包まれた街で、アンドロイドはどうやって夜を過ごしてるのよ?)

(ただ朝を待つつす。闇の中で、じっと)

(……殺した方がいい人間はいる。アンドロイドも同じだね)

(エンジン音が近いつす。オクトのビルに治安部隊がいるなら、そろそろ出てくるつすね。……ここつす、マスター)

歩道でティファニーが手を振り回している。

エンジンは切らずに、その前でバイク、T Tを停めて素早く降りた。

音もなく空中に現れたR P Gを掴んで、アサルトライフルと交換して背負う。アサルトライフルは手に持って、弾がなくなれば捨てるつもりだ。

ティファニーの前に現れたのは、ポンプアクションのショットガン。いつだったか、僕がパトカーのトランクから見つけた物らしい。

「行くよ、ティファニー!」

「はいっす!」

ティファニーが上着を脱ぎ捨てる。本で見た忘れられた時代のお嬢様のようなだったのに、上着を捨てた途端、ナイトクラブでポーズを取る女の子みたいな印象になった。

……胸が小さいのに露出が多すぎだつて。

ホルスターにはマグナムとハンドガンタイプのパルスガン。?にたすき掛けにされた弾帯。三つ編みを揺らしながら走るティファニーが不敵に笑う。

「お願いだから死なないでね、2人共……」

耳に届いたそんな呟きに、返事は返さない。

アキも答えを期待して発した声ではないだろう。
ビルの入口。

そこから出て来たアンドロイドを、走り出した勢いを乗せて蹴り飛ばす。
ガラスの割れる音を、僕のアサルトライフルの射撃音が掻き消した。武装をしていないアンドロイドは、即死だ。血の代わりに流れるオイルが臭う。

ビルに踏み込む。

アキの足音は、階段を探すためにすぐに離れていった。

無事でいて、僕が行くまで。

声には出さずに祈りながら、アキの足音が向かった方とは別のドアから顔を出した女を撃つ。

「銃も持たずに、何しに出てきたんだろこの人」

「平和ボケしてるっすよ。敵なんて来るはずがないと思ってるから、ケンカか何かだろうって顔を出したんっす」

「……出て来なければ、やられなかったのに」

店舗のカウンターののような机を越え、耳を澄ませる。

右。左からもだ。

「ティファニー、左お願い」

「がってんっす！」

アサルトライフルのショットガンは、グレネードランチャーに変えてある。トリガーの位置を確認して、アンドロイドか軍事用ロボットが現れるのを待つ。男。

その胸からオイルがしぶき、細かな部品の欠片が散る。

アサルトライフルを3発だけ撃つてから、左を確認した。

ティファニーは至近距離まで飛び込み、軍事用ロボットの頭部を粉砕している。あれでは軍事用ロボットに後続がいても、グレネードランチャーでの支援は不可能。

「バレバレなんだってのー！」

撃たれた男とタイミングをズラして玄関ホールに飛び出したのは、コンバットスーツを着てヘルメットまでした兵士だ。

心臓に3発、キツチリと叩き込む。

「ボディアーマーつす、マスターー！」

防弾チョッキ。

そんなものもあつたなあと思いつつながら、僕は敵兵の銃口とその向こうの腕を見ていた。いや、勝ち誇つたような笑顔と、勝利を確信した瞳まで見えている。

まだ。

まだだ。

コイツは新兵のように練度が低いので、撃つまでに時間がかかるらしい。それでも、僕より早くこの兵はトリガーを引ける。

「今っ！」

伏せながらアサルトライフルを撃つ。

驚く兵の放った銃弾は、僕のいた場所を虚しく通り過ぎた。

兵は何が起こったのかもわからないまま、顔を撃ち抜かれて絶命している。

「……銃弾を躲すとか、人間やめてるっすねえ」

「なんか出来そうな気がした。ようやく武装した兵が来るか。動きが鈍いねえ、シカゴの治安部隊ってのは」

「そろそろっすよ、マスター？」

「じゃ、仕掛けてからだね」

玄関ホールのかかしにC、クレイモア対人地雷を仕掛けてビルから出る。

まだ、他の場所にいる治安部隊が戦闘車両で駆けつけるには早い。そしてあれだけ銃声が響けば、ビルの中にいる連中は残らず異変に気がついただろう。

アキが戻るなら無線でそう言うてからなので、間違える心配もない。

「マスター。1番、起爆準備っす」

「あいあい」

起爆コードでCに繋がる起爆スイッチは8つある。

その一番右の起爆スイッチを持って、ティファニーの合図を待った。

「今っす」

「チツク、タツク、どかーん」

ドーン！

カチ、カチ、カチ。そうやって起爆スイッチを3度ノックすると、玄関ホールから爆音が聞こえた。

「狭いから、今ので他のCがイカれてないといいな」

「そうっすねえ。あ、5番を起爆準備っす」

「あいあいー」

「起爆っす」

「チツク、タツク、どかーん」

ドーン！

「さつきから何なんすか、その気の抜けた掛け声」

「んー。親子の思い出？」

「なんすかそれ」

「子供の頃、こうやって戦争みたいな事してたんだよね。んで、Cの起爆って楽しそうだしよ。父さんにやらせてって言ったら、じゃあ一緒にやろうかって。その時に教えてもらった掛け声」

「殺伐とした事をしてるのに、お気楽な親子っすねえ……」
アキからの連絡がない。

それを心配しているうちに起爆できないCが出たので、敵を玄関ホールまでしつかり引き寄せてからティファニーとタイミングを合わせて手榴弾を投げ込んだ。

「来た。エンジン音っす、マスター。どうやら恐れていた戦車ではなさそうっすね」
(ジャニス、車両がこっちに接近中)

(やっとな番か。もう出ていいかい?)

「ティファニー、距離は？」

「近いっす」

(いいよ。地図は頭に入ってるよね)

(任せろっ！)

ここからが本番だ。

僕とティファニーが死ぬとすれば、今から敵車両を潰すまでの間になる可能性が一番高い。

ビルの中へ走る。

(玄関ホール。ドアの向こうに手榴弾、行くよ?)

アキの返事はない。

それは了承の意味だ。

玄関ホールにドアは3つ。右に僕が、左にティファニーが走る。

お願いだから、このタイミングで中央のドアから来るのはやめて欲しい。

ピンを抜き、レバーを握った手榴弾をドアの向こうに投げ込む。

それが爆発するより早く、中央のドアへ。

ドオンツ！ ドオンツ！

同時に中央のドアに辿り着いたティファニーが手榴弾のピンを抜いたので、僕がドアを蹴り開けた。

カウンターののような場所に、身を寄せて隠れる。

ドオンツ！

爆発音で耳がおかしくなりそうだ。そう思うと同時に、僕は玄関の向こう、ジャニスとカレンが来るはずの道で2台分のブレーキが鳴るのを聞いた。

(なんだこれ、急に音がクリアに。……まあいいや。ジャニス、敵の車両はそっちの進行方向に尻を向けて停車。数は2)

(カレン、ロケットランチャー用意！)

(してある)

敵の車両がどんな物かはわからないが、ロケットランチャー1発で2台の車両を破壊するのはムリだろう。あれは次を撃つまでに時間がかかるし、撃つた物を捨てて車内から新しいロケットランチャーを取り出すにしても、物が大きいので手間取るはずだ。

手前は、僕がやるしかない。

「ティファニー、玄関ホールを少し任せる」

「車両から敵が降りてるっすよ。先にそれを殺つた方が良くないっすか!？」

「それだと戦闘車両の武装で撃たれる。まあ、なんとかなるって」

言いながらアサルトライフルをカウンターのの上に置き、RPGの安全装置を解除した。

左手にはPDW。

「RPGの片手撃ちなんて、特殊部隊でもやんないっすよ?」

「車両はかなり近い。命中するでしょ」

「……マスターがどんどん人間やめてくっす」

(ジャンス、そっちとタイミングを合わせてビルに近い方を僕がやる。爆発するかもしれないから、巻き込まれないでね)

(あいよ。カレン、撃つ前に教えてやれ)

(わかった)

足音。

ビルの外だ。

車両から降りた兵は、玄関の手前で歩を止めたらしい。

連中も、無線機は持っている。タイミングを合わせて玄関ホールに突入して来たら厄介だ。少し早いけど、やるか。

玄関に移動する。

(敵がタイミングを合わせての突入を考えてそう。前のはもうやるよ)

(こつちも見えた。ジョンのバイクの先に、かなり大きな装甲車！)

T T、爆発に巻き込まれて壊れちゃうかな。

玄関から顔を出せば、確実に撃たれるだろう。1人や2人の銃撃ではない。それでも、足は止めなかった。

(男は度胸ッ！)

飛び出す。

大きな装甲車。花壇の向こうに、10人ほどの兵士。

R P Gを装甲車の機銃に、P D Wを兵士達に向け、同時に撃った。

「えっ」

撃ったRPGは捨てた。

落ちていくRPGが、酷くゆっくりと見えている。

それに敵のアサルトライフルの銃弾が当たって、闇に火花が舞った。

僕が撃っているPDW。

先頭の兵士の顔を銃弾が抉り、アンドロイドの顔の中の機械が剥き出しになる。飛び散る少量のオイル。

ゆっくりとした時間の中で、RPGが着弾して爆発する敵の装甲車。

急いで玄関ホールに戻りたいのに、僕の体もゆっくりとしか動かない。

それでも、兵士達は見えているので最後まで弾を命中させられた。

爆発した装甲車の破片が僕に迫る。

それから守ってくれそうなのは、逃げ込もうとした玄関の壁だけ。

装甲車の破片が僕の頭部を粉碎するか、壁を抉るか。

どちらが早いのだろう。

見た感じでは、ギリギリのタイミングだ。

「間に合え！」

叫んだ瞬間に視界が赤く染まり、僕は玄関ホールに倒れ込んだ。

「マスター!？」

ティファニーが駆け寄って来て、僕を担ぐ。

もう時間は、本来の速度を取り戻したらしい。

カウンターの向こうの床に下ろされたので、まずPDWのマガジンを交換した。

それをホルスターに納め、立ち上がってカウンターの上のアサルトライフルを手にする。

ドガアアーンッ!

カレンの撃ったロケットランチャーだろうか。

(ジャニス、状況を!)

「マスター、目から血が!」

「赤いサングラス程度にしか感じない。いいからティファニーは、ドアから来る敵を警戒。足音からして、何人か来てるよ!」

室内戦

銃声。

アサルトライフルなんかの音ではない。この耳をつんざくような音は、どちらかの装甲車に搭載されている機関銃だろう。

(よし、後ろの装甲車はもう動けねえぞ。今、カレンが機関銃を撃ちまくってる)

(了解。ティファニー、玄関ホール任せたよ?)

アサルトライフルのマガジンを交換し、またカウンターを乗り越える。

玄関から覗き込むと、壊れた装甲車を盾にして、カレンの機関銃の弾から身を隠す兵達が見えた。

数は、18ほどか。

血の涙のせいで赤いフィルターがかかったような視界でも、その数まではつきりとわかる。

アサルトライフル。

銃だけ玄関から出して、グレネードランチャーを撃った。

シユポントツという気の抜けた音で、こんな時だというのに笑い出してしまいそうになる。こんな気の抜けた音の兵器で、何人もの兵が死ぬのか。

ドカアンツ！

すぐに引つ込んで、ベルトからグレネードランチャーの弾を抜いて装填。急造の弾薬ポケットなので、弾はあと2発しかない。

（気をつける、ジョン。こっちは出来る限り射線を確保してんだ。カレンの機関銃に撃たれたらどうする！）

（ごめん、次からは声をかけるよ。で、倒し切れそう？）

（キツイな。あつち是对車両兵器を持って来てねえらしくて、反撃すらしてこねえ。必死で隠れてやがるんだ）

（……カレン、3秒後に射撃中止。ジャニス、僕が敵兵を片付けたら玄関前に装甲車を横付けにして）

（わかった）

（あいよ！）

心の中で3数える。

さっきのグレネードランチャーで、何人減らしたんだろう。

アサルトライフルを背負い、PDWを抜く。両手にだ。

背後から、ショットガンの銃声。

ティファニーを信じて、視線すら向けない。

玄関から飛び出す。

敵。

12人に減っている。

PDWを撃ちまくった。

敵兵の向こうに、倒れてすらいないTTT。

「さすがだよ、TTT！ 戦場じゃ命を捨てたヤツこそが生き残るってねっ！」

敵兵がアサルトライフルを僕に向ける。

階段の下に飛び下りながら、トリガーを引く。

接近して来るジャニスの装甲車。

その機関銃手席から、カレンが飛び降りた。

加速するクルマから飛び降りたというのにカレンはつんのめったりもせず走り、装甲

車の陰にいる敵兵の背後からサブマシンガン撃ちまくる。

僕も負けじと、PDWを撃ちまくった。

敵の動きが見える。

体が軽い。

片手でPDWを撃っているというのに、反動も苦にならない。

狙いが外れないのだ。

撃たれないように小刻みに動きながら、僕は自分が笑みを浮かべているのを自覚した。

敵の残りは、3。

カレンがりロード。

僕はPDWのトリガーを引きつばなしにはしていない。指切り射撃を自然と出来るので、まだ弾はある。

残る3人をスクラップにすると、カレンが死体の上を跳び越えて走り寄ってきた。

「ジョン、怪我！」

「いつもの血の涙だから平気。それより僕もりロードするから、カレンはティファニーの援護を」

「くっ。わかった」

少しでも早く。

そう思いながら、片方のPDWを口に咥えてりロードする。

急ブレーキの音。

（中央のドアは、装甲車の機関銃で狙えそうだな。任せろー！）

（カレン、ティファニー、機関銃の射線には気をつけてね。それとジャニス、まだ敵車両が来る可能性は高い。次は、ロケットランチャーなんかも持ち出してくるはず）

（リロードを終えたPDWはホルスターに戻す。）

（ここからはまた、アサルトライフルだ。）

（わかっただけであらう。カレンの方が落ち着いたら、ロケットランチャーを玄関に運んで待ち構える）

（だね。カレン、交代するよ）

（マスター、敵が来なくなっただけです）

（アキは小声も出せない状況か。ジャニス、カレン、少し早いけど僕達はアキを追っていい？）

（もちろんだ。そうしてやってくれ）

（アキをお願い）

（任せて。行こう、ティファニー。アキと同じく、中央のドアから突入だ）

（室内戦はショットガンが活きるっすねえ）

（残弾が心許ないなら、今のうちに装甲車から持って来なよ）

（まだ弾帯に、しこたまあるっす）

2人、肩を並べて玄関に向かう。
静寂。

まだ何も終わってはいないというのに、やけに静かだ。
視界は、いつの間にか元に戻っている。

(アキ、今から向かう。だからムリしないでね。合流したら僕達の肩を叩いて無事を知らせて、それから後は後ろで流れ弾が当たらないようにしてて。オクトまでの道は、僕とティファニーが拓く)

(マスターとティファニーなら楽勝っす)

中央のドア。

僕が右、ティファニーが左に立つ。

ティファニーが自分を指差し、ドアの向こうの右に指先を向けた。
頷く。

ドアを蹴り開けた。

駆け出すティファニーと交差するように廊下の左に飛び出して、闇にアサルトライフルの銃口を向ける。敵の姿は、ない。

「クリア」

「こっちもクリアっす！」

「まずは階段だ」

「構造を把握できていたら良かったんですけどねえ。ごめんなさいっす」

「気にしないで。行こう」

ティファニーはオクトを止めたいと思ってはいただろうが、ここシカゴにいた頃はヤツをどうにか出来るなんて考えた事もないだろう。下調べしていなかったのは、ティファニーのミスではない。

人気がない廊下を進む。

ティファニーは、先頭を譲る気はないようだ。

（マスター、アキと合流まで銃は使えないっすよ？）

（……そうか。流れ弾が怖い。アキが声を出せないのは、敵がすぐ近くに居るからなんだもんね）

（そうっす）

ティファニーがショットガンを背負う。

軍用ロボットも素手で倒すほどの怪力だ。アンドロイドなんて、殴っただけで殺せるだろう。

僕もアサルトライフルは背負い、右にナイフと左にマグナムを持った。

（あった。階段っす）

(アンブツシユ、あるよねえ)

(どうつすかねえ。かなり殺つたんで、敵はそんなに多く残つてないと思うつすよ。そしてここを攻められる想定なんてしてなかったみたいつすから、対地雷や爆薬の用意もしてないはずつす)

(そうだといいいなあ。階段、僕が駆け抜けるからティファニーの判断で動いて)
(助かるつす)

階段を上らず向こうに駆け抜けたら、敵がいれば銃を撃つくらいはするだろう。そして治安部隊の兵は、そんな敵を正確に撃てるほどの腕ではない。

分の良い賭けのはずだ。

指を3本立てる。

2本にして、つま先に力を込めた。

1。

走る。

階段の幅なんて、大した距離ではない。

すぐに駆け抜けて振り向くと、銃撃がなかったからかティファニーが階段に突入するのが見えた。急いでそれに続く。

踊り場で足を止めたティファニーが、上階を睨んでいる。

(アンブツシユはなしか)

(オクトを守るために、戦力を集中させたっすかね)

(なんにしてもとりあえず、敵を探さないとね)

(そうっすねえ)

(ザリッ)

(なんだこれ。……あ、もしかしてアキ?)

(ザリッ)

(そうか。インカムのマイクを指で擦ってるっすね。それなら、敵に気づかれるほどの音は出ないっす)

(ザリッ)

無事でよかった。

でも、合流を急がないと。

(アキがいる階の数だけ、インカムを擦って)

ザリッという音が5回。

どうやら、アキは最上階にいるらしい。

(5階だね?)

(ザリッ)

(すぐに向かう。銃は使っても平気、アキに流れ弾が当たったりしない?)

(ザリッ)

(それは助かるな。行こう、ティファニー)

(はいっす)

(ザリッ、ザリッ)

(ああ、アンブツシユがあるって言いたいの?)

ナイフとマグナムを戻し、背負っていたアサルトライフルに持ち換える。

(ザリッ)

(それは5階の廊下に出てすぐ?)

(ザリッ)

(よくわかるっすね、マスター)

(僕ならそこで仕掛けるからね。踊り場から撃ち下ろすのもいいけど、それだとあつちも危険だろうし。アキ、アンブツシユは爆発物?)

(ザリッ、ザリッ)

(それ、ノーって意味だよね?)

(ザリッ)

爆発物はない。

なら、アキが巻き込まれる心配はないだろう。

(アンブツシユの人数は?)

(ザリッ、ザリッ)

(たった2人。階段へ移動には、そいつらがジャマなのか。もしかしてアキ、敵に挟まれてる形? オクトがいそうな部屋の前の敵と、アンブツシユを仕掛ける敵兵に)

(……ザリッ)

一瞬の逡巡は、動きが取れなくなった後悔からだろうか。

でもそうになると、シヨットガンでも持つてアンブツシユを仕掛けているアンドロイドの向こうからも撃たれるかもしれない。そう思いながらティファニーを見ると、わかっているとも言おうように頷いていた。

(わかった。でもそれじゃオクトを守っている敵が銃を撃つたら、アキが危ないんじゃないの?)

(ザリッ、ザリッ)

(柱の陰にでもいるんじゃないですか。ほら、玄関ホールにもあった、壁に一体化してる大人が身を隠せるくらい)

(ザリッ)

(なるほどね。じゃあ、そこから動かないで。銃は使うけど、柱のある方には撃たないか

ら)

ザリツという音を聞きながら、階段を注意深く進む。

5階でアンブツシュは確定だが、そこまで敵がいけないとは限らない。

3階、4階と何事もなく進むと、5階への入り口が見えた。それとかすかに、『来た』という囁くような声。

耳を指差すと、ティファニーが頷く。

そしてティファニーは自分の顔を指差し、両手を伸ばして何かを引つ張るような仕草を見せた。敵をこっちに引き摺り出すという事だろう。

相手に危険なやり方だ。簡単に頷ける事ではない。

でも迷っているのは、アンブツシュの2人に怪しまれる。

ポンポン。

そんな感じでティファニーが僕の肩を叩き、笑顔を見せる。

心配するなと言いたいのだろう。

悩みながらも頷くと、ティファニーはバスの屋根に上る時のように気軽な足取りで階段を上がった。

(ザリツ、ザリザリツ)

今までになかったインカムの擦り方。

待って、そう声を出す前にティファニーは階段を上がり切り、2人の敵兵を僕の方にぶん投げた。

上から、肉で肉を叩くような音。

それにシヨットガンの銃声が重なる。

「くそっ！」

階段を転がる兵を足で止め、顔面にアサルトライフルを3発。

もう1人は死んだ兵に当って止まったので、そのまま後頭部を撃ち抜いた。

階段を駆け上がる。

僕の目に飛び込んで来たのは、倒れたティファニーにのしかかる、2人の兵士。

また、視界が赤く染まった。

「ざけんじゃねえ、クソがっ！」

その兵の顔面を蹴り上げる。

もう1人。

驚いて僕を見上げるその兵を、アサルトライフルの銃床で下から上にぶん殴った。

銃声。

時間が遅く感じる。

またか。

廊下は1方向に長く伸びているだけ。そこかしこに明かりがあるのは、床に置かれたフラッシュライトか。

蹴った兵士、殴った兵士。その向こうにはティファニーのショットガンでやられたらしい、頭部がなくなった死体が見える。

そしてさらにその先には、テーブルを倒して盾にしている兵士達。

そのうちの1人が構えているのは、カレンのと同じ対物ライフルだ。

時間は遅く流れても、僕が速く動ける訳じゃない。

銃弾が迫る。

このコースなら、弾は僕の眉間を撃ち抜くだろう。

巧いじゃないか、狙撃。うちのカレンには敵わないけどね。ミスター、ポイント・ブラנקとでも呼ばせてもらうかな。

「ゴメン。後は頼んだよ、ティファニー……」

ポイント・ブランク

せめて、敵を睨みながら死のうか。

6人の兵士達。

対物ライフルを撃った男は命中を確信してるだろうに、表情を引き締めたままだ。愛想がないよ、ポイント・ブランク。

ガキ一人居ったって喜べないって？

冗談じゃない。僕は何人も、何十人も、何百人も殺したりトル・Bだぜ？

笑え、笑えよ。ポイント・ブランク。

違う。驚けなんて言ってるやないだろうが。何を見て驚いてるんだ。

……ああ、立ち上がったテイファニーか。

テイファニー!?

僕の前に立ち塞がってはいけない。

ダメだ。

ダメだよティファニー。
ダメだつてば。

「ティファニーッ！」

時間が本来の流れを取り戻す。

砕け散ったショットガン。ティファニーの体の破片。

どちらが僕の頬を抉ったのかはわからない。

でも、そんなのはどうでもいい。

落ち着けよ心臓。焦るんじゃない。

……僕はただ、あいつらを殺したいだけなんだ。

「うおおおっ！」

走る。

銃口を見れば、射線は一目瞭然だ。

アサルトライフルの連射を躲した僕を見て、兵士達が驚いている。

銃口が動く。

ティファニーやアキに流れ弾が行ったらどうすんだ、クソが！

壁。

ずいぶんと丈夫そうでありがたい。

銃口が僕を追う。

そうだ、それでいい。

走るスピードは落とさない。

ジャンプ。

撃たれているけど、蚊ほどにも気にならない。

壁を、蹴った。

1歩、2歩、3歩で、机の向こうに届く。

全力で、跳んだ。

「壁を走ったっ！」

「バケモノかつ!？」

「ただの人間だつての」

横に薙ぐようにしてアサルトライフルのトリガーを引く。

殺れたのは、3人だけ。

アサルトライフルを捨て、ナイフとマグナムを抜いた。

まだ立っている兵の1人の脳天にナイフを突き立て、着地。

「ひいっ……」

マグナムで、怯えた声を漏らした兵を撃ち抜く。

怯えるくらいなら、銃なんか持つな。隣のおっさんを見習え。

「よう、ポイント・ブランク」

「……私の名はウインストンだ」

「へえ。それでポイント・ブランク、抵抗はしねえのかよ？」

「何をどうすれば、君を殺せると言うんだ？ 最初は血の涙を流す天使だと思ったが、今

の動きはまるで悪魔だ」

「じゃあ、死ねや。バア……」

「待つつす！」

振り返れば、隙を突かれる。

だから動きはしていないけど、僕はその声を聞いて今までにないほど安堵していた。

「生きててくれたか……」

「右腕を肩まで持つてかれたっすけどね」

「生きててくれたなら、それでいいよ」

「ありがとうっす。ダッドはそう言うてくれないんすね」

「ティファニー……」

今、ティファニーはなんて言った？

ダッド？

ポイント・ブランクが、ティファニーの父さん!?

「今すぐ逃げろ、ティファニー。拾った命を、なぜ捨ててに來た。振り返らずに逃げるんだ。私はおまえに死んで欲しくないから、自分でおまえを撃ちに行つたんだぞ!」

「……やつぱり、そうだつたんつすね」

「だからお願いだ。すぐに逃げてくれ。装甲車を奪つたんだろう? この少年となら、逃げ切れるかもしれない。船を探して海を渡れ。この世界に崩壊していない国などないだろうが、島国などはすでに安全になった所もあるはずだ」

「逃げないつすよ。オクトを、止めに來たんすから」

「アレはリミッター解除した正真正銘のバケモノなんだぞつ!」

「リミッターなら、ティファニーだつて解除済みつす」

「なん、だと……」

そうか。

ポイント・ブランクさんは、ティファニーがリミッター解除したのを知らないから、オクトには勝てるはずがないと思つていたのか。

ポンつと肩が叩かれる。

いい香りが、ふわりと僕の鼻先を擦つた。

アキだ。

血の臭いは、僕からしかない。無事で良かった。

「出来ればティファニーの父さんは殺したくない。行かせてくれるね、ポイント・ブランクさん？」

「……貴様か」

「何が？」

「ウチのかわいい愛娘を、まだジュニアハイスクール生のティファニーを、嫁になどしたのは貴様かっ！」

「えっと、ティファニー？」

「ごめんなさいです。ウチの両親、血なんて繋がってないのに親バカなんっす」

「はあ……」

「まさかティファニーを、オモチャにしてるんじゃないだろうな？ いろんな意味でいいオモチャを手に入れたぜ、とか言いながら涙を流すティファニーを朝まで激しく……」

「いだっ！」

「いい加減にするっす。マスターはいつでも優しいっす」

「……その言い方だと誤解されるよね、ティファニー？」

ポイント・ブランクさんが僕を睨む。

怖いから対物ライフルを握り締めないで欲しい。

「時間がないっす。こんな事して遊んでてオクトを逃したら、悔やんでも悔やみ切れな
いっす」

「オクトは逃げないさ。役立たずの私達が全滅したら自分で侵入者をなぶり殺すと言っ
て、ドアの向こうのパーティー会場で待っている」

「そっすか。マスター、覚悟はいいっすね？」

「もちろん」

「……わかった。なら、私も行こう。リミッター解除したなら片手でもティファニーの
方が強いだろうが、盾になる事くらいは出来る」

「ダッドはこの隙に市民を避難させるっす」

「娘をバケモノと戦わせてる間にか？」

「そうっすよ。シカゴで暮らすアンドロイドを逃すなら、今この時しかないっす」

「しかしっ!？」

話が長くなりそうなのでタバコを啜える。

アンドロイドがタバコを吸えるのかは知らないが、ポイント・ブランクさんにも差し
出してみた。

「ああ、すまないね。ちょうどやりたかったんだ。……くつ。タバコなんかで許しても
らえると思うなよ、貴様っ！」

「ああもう。うっさいおっさんっすねえ」

「ティファニー!？」

「いいからママと一緒に、市民の避難を始めるっす!」

「ティファニー。そんなに心配なら、父さんと母さんにはクリーブランドを指してもらえば?」 記念碑の近くの立体駐車場にあるバスで落ち合うって事でさ」

「なるほどっす。ダッド、ママを連れてクリーブランドのソルジャーズ・アンド・セーラーズ・モニュメント近くの立体駐車場に行くっす。防弾板を貼り付けまくったバスがあるっすから。2、3日すればティファニー達も行くっす」

「……約束だぞ」

「はいっす」

ポイント・ブランクさんが、ティファニーを抱きしめる。

気持ち的には、ティファニーも一緒に行かせたい。でも、ティファニーはそれを拒むだろう。

タバコを捨て、辺りを見回す。

アキの姿はない。

万が一にもオクトに存在を知られない用心か。

アキはどうしても、姿を消したままオクトを一撃で殺すつもりのようなだ。

「いたぞっ!」

振り返る。

ジャニスだ。自分の身長より大きな対物ライフルを抱えたカレンもいた。

「無事かつ。ジョン、ティファニー!」

「ジャニス。カレンも。来るなら言ってくれたらいいのに」

階段から姿を現した2人が駆け寄ってくる。

「銃声が止んでも、無線が来ねえからだ。かなり厄介な状況だろうと思って、急いで来たんだよ」

「予想してなかった状況ではあるけど、別に厄介ではないかな。紹介するね。こちら、ティファニーの父さんのポイント・ブランクさん」

「はあっ!？」

「渋いけど、ジョンの方が好き。おっさんはかわいくない」

「……ウインストンだ」

「別れを惜しんでから、オクトが待つてるそのドアの向こうのパーティー会場に突入予定だったんだよね。ポイント・ブランクさん、増援って呼んでる?」

「ウインストンだ。戦車の足に合わせているから遅れているが、そろそろ到着する頃だと思っ」

「それ、任せていい？」

「ああ。皆、オクトには嫌々従っていたただけだ。シカゴからの逃亡に反対するのは少数だと思う」

「じゃあ、クリーブランドでまた会いましょう」

「名を、聞いてもいいか？」

「ああ。ジョンです。ジョン・ハッピーニューイヤー」

ポイント・ブランクさんが目を閉じる。ティファニーを抱きしめたままだ。

「いい名前だ。ファースト・ネームも、ファミリー・ネームも」

「意味を教えちゃダメっすよ、ダッド？」

いい顔でティファニーが笑う。

出会った頃より、ずいぶんとキレイになった。

「わかったよ。娘を、ティファニーを頼む。ジョン」

「さつき、ティファニーには命を救われました。今度は、僕が守ります」

ポイント・ブランクさんが頷く。

「では、クリーブランドで待つよ。気をつけるんだぞ、ティファニー？」

「はいっす。ダッドも気をつけて」

ポイント・ブランクさんが歩き出す。

ジャニスとタバコを吸いながら見送ったが、彼は振り向かなかった。

「いい父さんだね」

「だな。ジョンがいなかったら誘惑するトコだ」

「ダメだよ？ ジャニスは僕のだから」

「ツ!? ……言うじゃんか。特におっぱいは、だろ?」

「とーぜん。さ、行こうか。待たせちゃ悪い」

「だな」

「カレンお姉ちゃんもジョンの?」

「そうだよ。ティファニーも、クマさん。パンツのあの人もね」

息を呑む音。

オクトにバレたら困るからやめて欲しい。

ゆっくりと、パーティー会場とやらのドアに歩み寄る。

みんなを僕のものだと言ったのは本心だ。

……それでも、僕の命はここに置いてゆく。

素手で軍用ロボットを粉碎する、リミッター解除したティファニーと最低でも同じ強さのオクトが、このドアの向こうにはいるのだ。

少年よ、静かに眠れ

「じゃあ、開けるよ？」

「はいっす」

「対物ライフルぶちかます」

「最初はアレだぞ、カレン。忘れんなよ？」

ドアを開ける。

明るい。

天井にガラスのような材質のきらびやかな装飾がいくつもあって、それがライトのように光っているらしい。電気はないと言ってたけど、バスのキッチンのようにクルマやバイクのバッテリーでも使っているのだろう。

広い部屋の隅には、テーブルや椅子が積み上げられている。

なのでパーティー会場は、遮蔽物のない状態だ。

「やれやれ、やっとご登場か。招待もされていないのにパーティーに来る不粋者は、時間

すら守れないから困る」

「手土産を持つて来たから許しなよ、オールド・マン？」

初めて見るオクトは、黒いスーツ姿の白髪の老人だった。

特に武装をしているようには見えない。それなのにこうも余裕があるのは、それだけ自信があるからか。

白手袋に蝶ネクタイ。胸で揺れる大きなペンダントが気障つたらしい、いけ好かない気取った年寄りだ。

「鉛弾の手土産は遠慮したいねえ」

「喰らってみりや、案外気に入るかもしんねえぜ？」

クールになれ、ジョン。戦闘もカードも、クールになれた方が有利なんだ。

父さんのそんな声が聞こえた気がした。

でも、血の滾りが止まない。

この爺さんを殺さなければ、多くの人間が不幸になる。そう思うと、語気の荒さを抑える事が出来ないのだ。

「あんな思いはもうごめんさ」

「へえ。さすが、イカレてると経験豊富でいらっしやる」

「そうだね。初めて銃で私を撃つたのは、当時のマスターだ。ウィンストンの娘、人間を

信じてはいかん。アンドロイドが傷つくだけだ」

「人間以上にイカれた爺さんに言われても、信じられねえってんですよ」

「言ってくれるじゃないか。……バイオ・テロ発生当時、テレビやラジオでは軍や警察が苦戦しているからと、国中のリミッター解除したアンドロイド達に助力を要請した。あそこで私達が介入すれば、世界はこんな風にはならなかったはずだ！」

「……アンドロイドのマスター達は皆、他人より自分を守るように言ったんっすね」
なるほど。

で、それでも人々を助けに行こうとしたオクトは、自分のマスターに撃たれたのか。
話が長くて助かる。

パーティー会場は広いので、アキがそろりそろりと接近する時間は必要だ。

「だから、かろうじて生き残った西海岸の人間も殺すって?」

「そうだ。人間など、このテラには必要ない。アンドロイドがこの星を治めてこそ、文明世界は復活するのだ！」

「バカじゃねえの、爺さん?」

「なんだとっ!」

「そんな大昔の人間が間違いを犯したからって、僕達には関係ないじゃん」

「おまえ達を野放しにすれば、また悲劇は起こるのだ。絶対に!」

「なら、悲劇が起こつてから殺せば？」

「それでは遅いのだ！」

アキの匂いはもう遠い。

そろそろだろうか。

話してもムダのようだから、出来ればポイント・ブランクさん達の避難が始まる前に殺してしまいたい。それが可能なら、手間が省ける。

「もらったッ！」

「……甘い」

アキが姿を現す。

オクトに斬りかかり、その日本刀を2本の指で挟んで止められた体勢でだ。

「アキ、離脱っ！」

アキが跳び退る。

「くらえ」

カレン。

構えているのは対物ライフルだ。

ティファニーの腕を肩まで吹き飛ばしたのと同じ銃。

これなら。

ドオウンツ！

命中。

カレンが的を外すなんてあり得ない。たしかに命中だ。

「くくつ、あーっはっは！ こんな玩具で私を殺せると、本気で思っているのかい？」
てのひらを前に出したオクトが笑う。

どんな素材で出来ているのか、そのてのひらは対物ライフルの銃弾を弾き返したららしい。

「まだまだあつー！」

ジャニスの軽機関銃。

爆発が絶え間なく起こっているような射撃音。

それが数十秒も連続しても、ジャニスは撃つのをやめない。

さすがに、これほどの連射なら。

そう思ったのは、僕だけではないだろう。

銃声が止み、軽機関銃の銃口で硝煙が揺れる。

オクト。

右の白手袋がなくなっただけの、きつきと変わらない姿だ。

オクトが握っていた拳を開くと、バラバラと軽機関銃の弾が絨毯に落ちる。

誰かの喉が、ゴクリと鳴った。

「う、受け止めたつてのかよ……」

「さすがバケモノ」

「じゃあ、こうよっ！」

アキ。

再度の斬り込み。

僕も駆け出した。

P D Wを、左右の手に抜く。

「付き合うつすよっ！」

ティファニーが僕に並ぶ。

視線の先には、アキの剣戟を余裕の表情で躲すオクト。

あんな鋭い連続攻撃を掠らせもしないなんて、本当にバケモノか。

「至近距離からならどうだよっ！」

アキとオクトの間に割り込むようにして、2丁のP D Wから銃弾をバラ撒く。

「ぬうっ……」

腕を交差させるようにして、オクトが動きを止めた。

効いてる!?

P D Wの弾はまだ残っている。

それでも、僕はトリガーを引くのをやめた。

「良い判断つす、マスター」

「任せたよ、ティファニー！」

走る速度を調節していたティファニーが、横手からオクトに迫る。

片腕でのパンチ。

それでも軍事用ロボットの頭部を一撃で粉碎するのだから、当たればオクトだって無事ではいられない。

「やれやれ、とんだジャジャ馬だ。ウインストンと一度、娘の教育について話し合っておくべきだったな」

「負け惜しみを言うなっす！」

決まる。

案外あつけなかつたけど、僕達の勝ちだ。

「コード・ジエノサイド、起動」

オクトの体がブレる。

驚いた表情のままオクトを殴ろうとしていたティファニーは、反対に頬を殴られて壁に向かって吹っ飛んでいった。

「デメエっ！」

「ティファニー!？」

壁に激突するティファニーを見たので、1歩遅れた。

アキ。

至近距離からのパルスガン。

オクトが、くつくつと嗤う。

「だから甘いっ！」

またオクトの姿がブレて見える。

それほどの高速移動。

そして、そこからの蹴り。

ただっ広いパーティー会場を、アキが吹っ飛んでいく。

ティファニーと違って、アキは生身の人間だ。あの速度で壁に激突すれば、それだけで致命傷になるかもしれない。

「アキっ！」

P D Wを捨てて走る。

僕なら間に合うはずだ。足が、体が軽い。

空気が溶けたバターになったような感覚。

それを切り裂いて、走る。

「間に合えっ！」

入口から見て右の壁に激突しかけたアキを、すんでのところで受け止める。

「ギリギリ間に合ったか。アキ、大丈夫!?!」

「ううっ……」

アキは壁にこそ激突せずに済んだが、オクトの蹴りでかなりのダメージを負ったらしい。

美しい表情は歪み、その引き結んだ唇の端から真っ赤な血が垂れていた。

「クソが！ クソが！ クソがっ！」

「はっはっはっ。お怒りだねえ、スペシャルズの末裔。ここのテーブルや椅子を片付けておいたのは、君と一騎討ちをするためさ。女子供の出る幕じゃないんだよ。さあ、始めようじゃないか」

「訳のわかんねえ事を……」

あんなスピードで動く相手と、どう戦えばいいと言うんだ。

一騎討ちの申し出はありがたいが、勝つための方法が思い浮かばない。オクトはアキの日本刀や、対物ライフルの銃弾すら受け止めたのだ。

「ジヨ、ン」

「アキ、話さなくていいから。ジャニス、手当てを！」
「こ、れ……」

アキが日本刀を僕に差し出す。

それを受け取ると、パルスガンも渡された。

「あいつ、パル、スガンは避け、た。それ、と日本刀、血は出て、ないけど、初撃、は、少し斬つ、た、手応、えが」

「……わかつた。借りるよ」

殺す方法があるなら、殺すだけだ。

スピードが違い過ぎる？

あれより速く動けばいいだけだろ。

目で追えないだろうって？

じきに慣れるさ。慣れさせる。

「回復、し、たら、助けに……」

「すぐ終わらせるから大丈夫。ゆっくり休んでて」

絨毯に優しくアキを横たえて立ち上がる。

僕のアキを蹴ったヤツなんて、許せるはずがない。

許せねえ、だから殺す。男は、それでいい。

「ブチ殺してやるよ、オクトツ！」

日本刀の切っ先を向けて叫ぶ。

これは誓いだ。

オクトは、僕がブチ殺す。

また視界が赤く染まったが、それでこそ戦闘準備が整ったのだとまで思えた。

「スペシャルズの血涙か。そこまでしなければアップデートも出来ない人間とは、やはり未完成の生き物なのだねえ」

「さつきから、意味のわかんねえ事をベラベラと……」

「おや。伝えていないのかい、ウィンストンの娘？」

「マスターはマスター。ジョン・ハッピーニューイヤー。それ以上でもそれ以下でもないです」

「ティファニー！」

壁に叩きつけられて崩れ落ちていたティファニーが、立ち上がろうとしている。

「動かなくていい、ティファニー！ じっとしててっ！」

「ハッピーニューイヤー？ くくっ、愉快的名前じゃないか。実にかわいらしい」

「ありがとよ」

「死ぬ前に教えておこうか。スペシャルズとは、人間によつて改造されたおぞましい存

在だ。体内に取り入れたナノマシンの奴隷と言つてもいい」

「ナノマシン?」

「目に見えないほど小さな機械さ。普通はそんな物を体内に大量に入れれば拒否反応で死ぬんだが、稀に生き残る者がいるらしい。その者達はナノマシンに食欲や性欲まで管理され、戦場に出れば敵を殺すために、脳までイジられては血の涙を流すのさ。かわいそうに。同じ人間を改造して兵器として使うなど、人間は畜生にも劣るねえ?」

「……逆にありがてえさ。テメエを殺せるなら、脳みそ全部だつてくれてやらあ」

「兵士の中の兵士、1人でも軍隊、人類の秘密兵器などとまで言われながら、文明の崩壊を止められなかった役立たずの末裔め! オマエだけは、この手で八つ裂きにしてやらねば気が済まぬっ!」

「だから大昔の人間のミスと僕達に、なんの関係があるつてんだよ」

走る。

剣なんて使つた事はない。

でもベレッタと鉄パイプなら、物心つく前から振り回していた。

左手のパルスガン。

持ち上げると同時に、オクトがブレて見えた。

蹴りが来る。

日本刀で、真正面を薙いだ。

「残念、下だよ」

ボディーブロー。

「があっ！」

その突き上げる一撃は、対物ライフルの銃弾すら弾き返す右腕で放たれた。

踏ん張ったつもりでも、数メートル吹っ飛ばされている。

無意識で吐いたツバに、血が混じっていた。いや、違う。僕が堪え切れずに吐き出し

たのは、塊のような血そのものだ。

ムビーでも、こんな風に血を吐く兵は多くいた。

内臓破裂。

出来るだけ早く手術とやらをしなければ、ほとんど死んでしまうらしい。

でも、それがどうした。

オクトを、勝ち誇った表情で僕を見ている爺さんを殺すまで、それまで生きていらればそれでいい。

「足んねえぞ、ナノマシン。まだだ。もつとだ……」

目の奥が痛む。

針の束でも突っ込まれているような、鋭い痛み。

「いいぜ、もつとだ……」

血涙が頬を伝い、顎先からしたたる。

「言っておくが応急処置はまだしも、ナノマシンに神経系をブーストされるとそれだけ寿命を縮めるぞ?」

「命ならこの部屋のドアの前に置いてきた。僕はテメエを殺せりや、それでいいんだよ……」

「何人も女を侍らせておいてそれか。これだから人間の、特に男というのは性質が悪い」
「おぎやあつつつたら、タマ付いてたんだよ。僕は悪くねえな」

オクトに歩み寄る。

絨毯に落ちた血の涙がブーツに踏まれて、クチャリと音を立てた。

「良い事を教えてやろう。どんな訓練でも、徴兵時のアツプデートを終えたアンドロイドに勝てたスペシャルズは、いない」

「へえ。なら僕が初だな。まあアツプデートだのナノマシンがブーストだの、人間以下の2人がどうなろうと、今の人間には関係ねえけどよ」

「……誰が人間以下だと?」

「テメエだよ、爺さん。人間はな、学んで成長するんだ。ティファニーを見ろ」

「ウインストンの娘がどうした?」

「アップデートなんてされてねえ。なのに出会ってから、どんどんいい顔で笑うようになった。さつき父親を見送った時の笑顔なんて、僕は見惚れたね。テメエにそんな成長が出来るか?」

「私には成長する必要などないっ!」

「なら、ナノマシンののおかげでも成長できる僕の勝ちじゃねえかよ」

「ほざけっ!」

パルスガン。

避けるからには、命中すればオクトとてタダでは済まないのだろう。

撃たれる前に、オクトが動く。

「いいぜ、ナノマシン……」

右に回ったオクト。その眼窩を、日本刀で突いた。

「なにっ!」

首を捻って躲される。

まだだ。

突きを放った刃を横にして、そのまま渾身の力で薙いだ。

「ちいっ」

オクトが跳び退る。

「もらったー！」

ジャンプ中なら、パルスガンの追撃は避けられまい。

トリガー。

指をかけた瞬間、目の前が真っ白になった。

「んだっ!？」

目が見えない。

仕事をしやがれナノマシン。さっきの突きだつて、もう少し鋭ければ殺れていたぞと心の中で悪態をつく。

音。

左前方だ。

目を閉じたまま、撃った。

「くっ。目は見えないはずだというのに！」

「そこか」

パルスガンは試射もしていない。

マガジン代わりのバッテリーはどれだけ保つのだろう。

ただ、視力が回復するまではこうして時間を稼ぐしかない。

足音。

オクトは右に回ろうとしている。
撃つ。

それを避け、足音が大きくなった。

「……死ねよ」

日本刀で音のした方向を斬り上げる。

手応えはあった。

(ね、斬れるでしょ？ その日本刀は特別製だから、斬れないはずがないのよ。あ、話さなくていいわ。オクトは今、混乱している。姿を消して近づくから、合図をしたらオクトの頭上に日本刀を投げて。仕留められなくても、致命傷に近いダメージは負わせられると思うわ)

返事の代わりに、血の涙を拭くフリをしてインカムを擦る。

「私にオイルを流させるとは、バケモノか……」

「テメエよりヤマトモさ」

声を頼りにパルスガンを撃つ。

今度は、飛び込んで来てはくれない。それどころか、オクトは動きを止めたようだ。

もう少し耳が聞こえれば、足音をなるべく出さずパルスガンを躲したオクトの場所もわかったのに。

「頼むよ、ナノマシン。脳みそだけじゃない。僕のすべてを、くれてやるからさ……」
ぱたり、ぱたり。

僕の血涙が落ちる音がする。

ぱたり、ぱた……

キシッ。

そんな音を、僕の耳はたしかに拾った。

「……ありがとう」

(今よ！)

日本刀を投げる。

アキの囁くような声もはつきりと聞こえた。

パルスガン。

撃つ前から、命中するとわかる。

「があっ！」

「……ザミアミロ」

「死になさい、哀れなアンドロイド。緊急コード・1868。貫いてっ、兼定！」

細かな機械や、コードを詰めた袋を突いたような音。

「グッ、ガアッ」

「殺ったわ！」

「……し、死ねるかあつ！」

「きやつ」

オクトの位置から、アキの悲鳴が離れる。

ヤロウ、また僕のアキを……

「動け体！ 人間を根絶やしにせねばテラが終わる！ あの女のように、人間はすべてを裏切るのだ！」

「裏切らねえ人間もいるんだつての」

アキとかジャニスとかカレンとかな。

目はまだ見えない。

それでも、すらりとマグナムを抜く。

動けないなら、てのひらで銃弾を受け止めたりは出来ないだろう。

口を開く度、そこに銃弾をブチ込んでやる。

「動け！」

ドオンッ！

「人間をつ！」

ドオンッ！

「それ以外のすべてのためにつ！」

ドオンツ！

「やら、ねば……」

ドオンツ！

「……子供達を見殺しにしろというのか！　もういい、私は行く。……な、なぜ撃った、

ジン

ドオンツ！

「愛して、いたのに……」

ドオンツ！

もうオクトの声はない。

何も見えないし、何も聞こえない。

静寂。

それでも、撃った。

「……」

酷く、静かだ。

ドオンツ！

もう、力が入らない。まだ撃ちたいのに、トリガーさえ引けない。僕は立ってるんだろうか。それすらもわからない。

「……オクトはもう死んでるわ、ジョン」

そつと腕を押さえられる。

デイリンケン・パスの広場を思い出した。

アキ。

違う世界から来た、僕の好きな人。

顔が見たいのにな。

もう、僕の目はダメみたいだ。いや、体に力が入らない。ダメなのは、目だけではな

いのか。

「……そつか。これで終わり？」

「そうね。私達の仕事は終わり」

「みんな生きてる、よね？」

「ええ」

良かった。

そう思いながら、僕は意識を手放した。

死ぬんだな。

守れたなら、いいや。

「ジョン!? 軍専用デバイスのバイタルサインは、……そ、そんなっ!」

「死ぬんじゃないやねえ、ジョン!」

TT、ジャニスが乗ってくれるかな。

「ジョン、ジョン!」

銃はカレンが使ってくれたら嬉しい。特にベレッタは、大切にしたいな。

……眠いや。

その手に掴んだもの

「よ」

「……………だろ？」

「……………るべきー！」

懐かしい声が聞こえる。

僕の大好きな人達。

でも声が足りないなあと思っていると、ドアを乱暴に開ける音が聞こえた。

ビツクリしたあ。

でも、いい刺激になったのかな。僕の耳は、かすかな機械の音まで聞こえるようになってる。

「ちよ、ち〇こ拭く時は教えてって言ったつすよーっ！」

「……………は？ な、何してんの君達っ!？」

「あ、起きた」

「惜しい」

「あ、危なかったわね、ジョン。止めたんだけど、ジャニスとカレンが」

「ウソ言うんじゃないやねえよ、アキ！ カレンに匂いがたまんねえって聞いて、ノリノリでズボン脱がしてたじゃねえか！」

「……はあ。ここどこ？ 死んでないなら、僕は寝てたんだよね。どのくらいの時間？」

「丸1日ってトコね。戦闘が終わった時に見たジョンの軍用デバイスのバイタルサインを考えたら、驚異的な回復力よ」

「そ。ジャニス、ズボン返して」

「もう少しそのまま」

「返して！」

「……チツ」

オクトとの戦闘中に見えなくなった目は、普通に視力を取り戻している。

手も足も、動く。ズボンも問題なく穿けた。

大丈夫だ。

どうやら、僕は命を拾ったらしい。

眠っている間ずっと、夢を観ていた。

この国がまだ強く大きかった頃の兵士達と、笑いながら酒を酌み交わす夢だ。

その中にはなぜか父さんとブルースもいて、父さんはビールの缶を傾けながら笑顔で僕に死ぬと言った。

その時ブルースは、微笑みながら僕の頭を撫でていたっけ。

「問題なさそう。……ねえ、オクトが最後に何をしたかわかる？」

「スタン・グレネードみたいなのを、ペンダントに仕込んでみたいね」

「あれか。音付きじゃないから命拾いしたんだね」

「本当にそうね」

「そういえば、オクトは銃弾を受け止めてたでしょ。それなのになんで、マグナムの弾で死んだの？」

「銃弾を跳ね返すほどの素材が、右腕の分しかなかったみたいよ。ティファニーがしれっと回収してたから、そのうち何かに使うと思うわ。それより、痛いところはない？」

「喉が渴いて、お腹が空いてるくらいかなあ。……ああ、トイレも行きたいや」

「ティファニー、お手洗いを借りるわよ？」

「はいっす〜」

「もしかしてここ、ティファニーの家？」

「そうっすよ〜」

片腕しかないティファニーが、僕に肩を貸そうとする。

「いいよ、ティファニーの方が痛そうだし」

「アンドロイドに痛覚はないっす。嫌ならお姫様だっこで運ぶっすよ？ 隻腕でも楽勝っす」

「……肩、お借りします」

部屋から出るとすぐに、木製の階段があった。

その階段を通り過ぎたところにあるトイレで長々と放尿していると、ドアの向こうからティファニーの溜息が聞こえる。

「どしたの？」

「用を足しながら、普通に話しかけるんっすね。……最後にオクト、ジーンって言ったじゃないっすか」

「言ったね」

「インターネットに残ってた当時の記録を検索したら、ジーン博士はオクトのマスターだったっす」

「だろうねえ」

「パルスガンで撃たれたアンドロイドは、身動きどころか話す事すら出来ないほどの苦痛を味わうっす」

「そうなのか。」

ならこれからは、敵対する相手がパルスガンを持っていないか充分に気をつけなければ。

トイレには、水の入ったバケツが置かれている。

アンドロイドはトイレを使う必要がないので、僕達のために用意してある物なのだろう。

その水を、便器に流した。

「ジーン博士の名前を呼びながら、動けないはずのオクトは腕を伸ばしたつす。そして愛していたのと言ってから、力を込めて拳を握ったつす。アンドロイドのくせに、あんなにたくさんの涙なんか流して」

「……僕は、ジーン博士の気持ちの方がわかるなあ」

「どんな気持ちでオクトを撃って、どんな気持ちでオクトに殺されたんつすかね。ジーン博士は」

「好きな人が危険な目に遭うくらいなら、死んだって止めたいもん。ジーン博士のそんな命がけの時間稼ぎのおかげで、オクトは生き残ったんでしょ。僕だってクリーブランドで何度も、シカゴまで一人で行けないか考えたし」

空港とかいう廃墟の前の道を、クルマの残骸がない方向に向かって進む。それなら行けるかと思つて、何度も思わず明け方にベッドで身を起こしたものだ。

でも僕が一人でシカゴに向かったと知らなければ、バスはシカゴを目指す。もし道にでも迷ったら、アキ達は僕抜きでオクトを殺さなければならぬ。

だから、唇を噛み締めながらベッドに身を横たえたんだ。

「マスターにシカゴのスペルを知られないようにしてたのは正解だったすね」

「そんな事してたの？ 酷いなあ」

「どつちがつすか。さあ、終わってるなら部屋に戻るつすよ」

「うん。水が欲しいや。タバコも」

またティファニーの肩を借りて部屋に戻る。

「対物ライフルすら弾き返したオクトの右腕、ジーン博士が国に特別な許可まで取って作ったらしいつす」

「へえ。じゃあ、大切にしなよ」

「使つていいんすか？ 縁起が悪いと思うつすけど」

「人を愛したアンドロイドと、アンドロイドを愛し抜いた人間の遺したものだからね。きつと、ティファニーを助けてくれるさ。……そうだなあ、オクト・アンド・ジーンとでも呼ぼうか。その腕」

「……了解つす」

痛いところはないけど、体中の筋が強張っている感じがする。

話しながら戻るとアキとジャンスとカレンだけではなく、部屋には上品そうな中年の女性もいた。

「あらあらあら。仲良しさんねえ」

「あ、もしかしてティファニーの?」

「ママつす」

「どうもすいません、大事な娘さんに怪我なんかさせて」

「いえいえ。やったのはうちの人でしょう。こっぴどくとつちめておいたから、気にしないで。それより、飲み物とお食事をどうぞ。温いから美味しくもないかもしれないけど」

「とんでもない。あ、ジョン・ハッピーニユーイヤーです。はじめまして。ベッド、ありますがどうぞございます。それに、お水や缶詰まで」

「ティファニーの母のフジーよ。いいから今は、ゆっくり体を休めなさい」

寝かされていたベッドに座って水を飲み、甘いオカユのような穀物を煮た缶詰を食べ始めると、アキがこれからの事を説明してくれた。

「それじゃ、シカゴのアンドロイドはしばらく今まで通りなのか……」

「ええ。とりあえずの代表者はウインストンさん。数日後には選挙で大統領が選ばれるけど、それも押し付けられそうだってポヤいてたわね」

「ポイント・ブランクさんは、この国をどうするつもりなんだろうねえ」

「人間と手を取り合いたいとは思ってるらしいわよ」

「……それ、大丈夫なの？ どう考えても人間は、アンドロイドにおんぶにだっこってなちやうと思うんだけど」

「だから交流は徐々にしたいそうよ。西海岸には、全権大使を1人だけ派遣するって」

「ふうん」

「全権大使の座はいただきつす！」

「リミッター解除したティファニーが国を離れて大丈夫なの？ どう考えてもオクトの代わりは、ティファニーがするしかないと思うんだけど」

一緒に西海岸に行けるのは嬉しいけど、そのせいで父さん母さんが苦勞するのはティファニーだって望まないはずだ。

「平気つすよ。オクトに作られたアンドロイドだって、大昔の一般人程度には知識も技術も持つてるんつすから」

「忘れられた時代の一般人かあ。それって今の世の中なら、すつごく優秀な人材なんじゃない？」

「そうね。西海岸の役人やエージェントなんて、足元にも及ばないわ」

「……いろいろとモメるんだろうなあ」

「それは間違いないでしょうね。でも、なんとかなるわよ。まあいざとなれば、全員でシカゴにお引越しね」

「いいつすねえ、それ」

「いいわねえ。娘夫婦と同居とか憧れるわあ」

「ごちそうさまをすると、ジャニスが火を点けたタバコが僕の唇に寄せられた。」

「お礼を言ってから、ゆっくりと吸う。」

ポインント・ブランクさんはティファニーがリミッター解除した事をアンドロイド達には伏せておき、西海岸との交流が始まってマスター登録を利用して悪事を行うアンドロイドが出たら、僕達にその始末をお願いしたいらしい。

「なんかシカゴ、ヘキサゴンスティツのエージェントみたいだねえ、僕達。まあポインント・ブランクさんとフジーさんには、イツチユキュイツピャンノオンジがあるからいいけど」

「二宿一飯の恩義、ね」

「……そう言ったよね、僕？」

「報酬もかなり出るんだぜ。にひひ」

「何をもらう気なの、ジャニス？」

「シカゴにあるのなら、装甲車を好きなのを選び直していいってよ。それにバイクの

「パーツと」

「そうだ、ベレッタ！ それにTTもっ！」

「落ち着けて。ベレッタは枕元だ。バイク、TTもクルマで運んでもらってある。他の武器も壊れちゃいないさ」

「良かった……」

「それにシカゴに来た時に自由に使っている家に、アタシ達が持っていない種類の武器。なんとゴールドまであるんだぜ？」

「なにそれ？」

「ジャニスゴールドの素晴らしさを語り出す。」

「なんでも忘れられた時代でも相当に価値のあった物らしく、西海岸で売れば豪邸を買ってもお釣りが来るそうだ。」

「カレンお姉ちゃんとジョンの愛の巣を買う」

「あはは。でも、そんなにもらっちゃっていいのかなあ。僕達は西海岸を攻撃されたら困るから、オクトを殺したただけだし」

「いいに決まっているっすよ。なんせマスター達は、シカゴ解放の英雄っすから」

「ヒーロー、ねえ」

「でもそれは全部、ウインストンさんが大統領に選ばれたらの話よ」

「なるほど。……ちなみにジャニス、TTのパーツって？」

「ありや素人が趣味のレースで使ってたバイクだろ。それが、プロのレーサーが乗ってたバイクになると思えばいい」

「頑張れ、ポイント・ブランクさん！」

数日後、ポイント・ブランクさんは見事に大統領に選ばれた。

なのでティファニーも全権大使というのにすんなり決まり、報酬もいただける事になったらしい。

大統領就任アンド愛娘を送り出すパーティーというのを終えた翌朝、僕はティファニーの家の前でTTに跨った。

新しい装甲車にも積めるけど、久しぶりだからとワガママを言わせてもらったからだ。

エンジンをかける。

「これからもよろしく、TT」

（おうおう、妬けるねえ）

（ホントよね）

（まあ、マスターのバイク好きは病気だと思えばいいっす）

（カレンお姉ちゃんにも乗る？）

ギアをローに入れた。

自然と笑顔になっっているのは、久しぶりにTTの鼓動を感じているという理由だけではないだろう。

僕の名前は、ジョン・ハッピーニューイヤー。

ハッピーニューイヤーの意味はまだわからない。

それでも、楽しくて希望に満ちたものはこの手に掴んだ。

それを手放さない事が、これからの僕の生きる目的になった。

「出発しよう。僕達なら、海の方こうにだって行けるはずだ！」